

569-14



1200501516364

9

14

納本

岩波文庫

III2

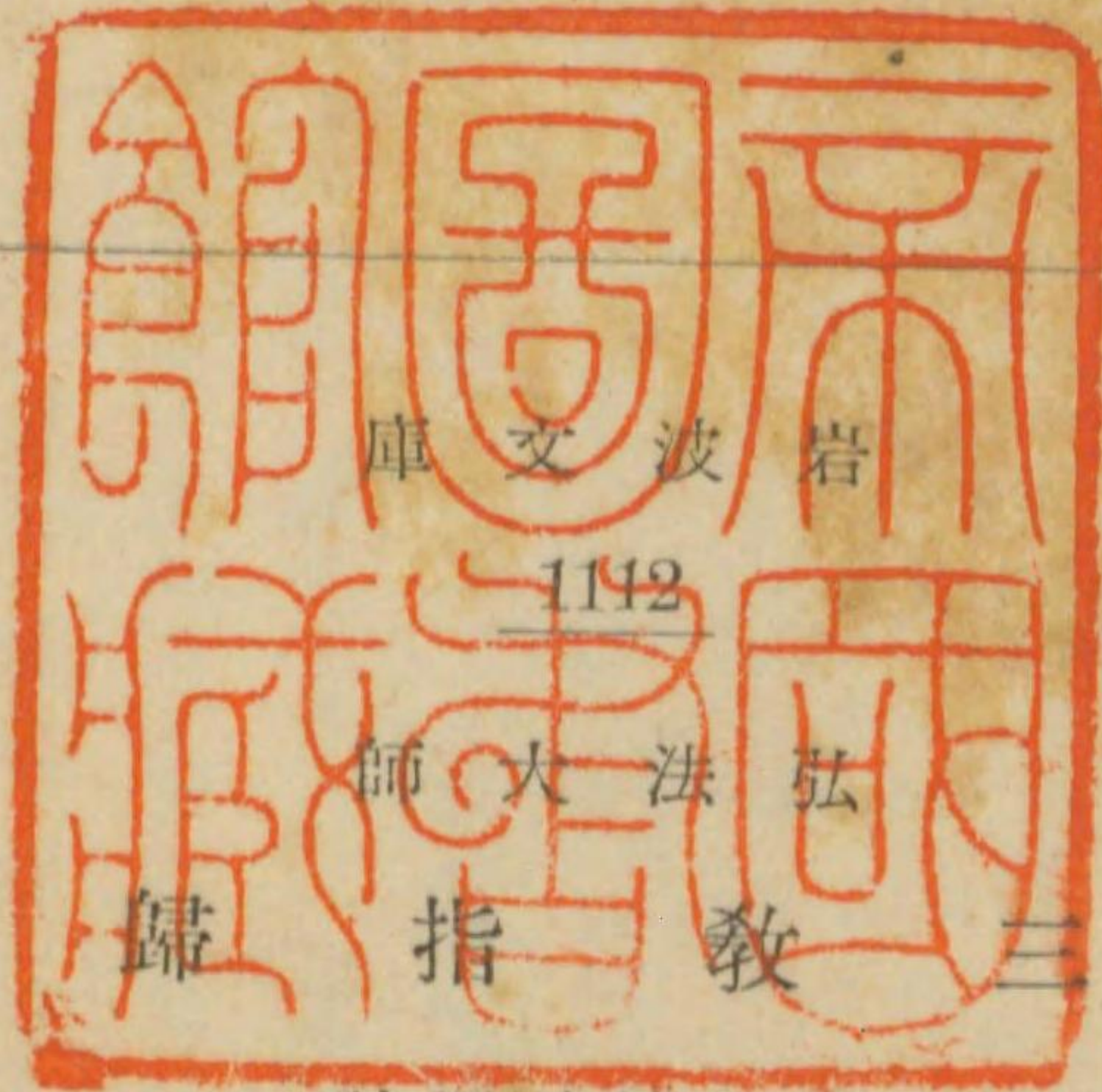
弘大法師

三教指歸

加藤精神譯註

岩波書店





岩波文庫

1142

弘法大師

教指歸

加藤精神譯註



岩波書店



569-14

解題

一、弘法大師小傳

解

題

弘法大師名は空海、光仁天皇の寶龜五年（A・D・七七四）六月十五日讚岐國屏風ヶ浦に生る。父は佐伯直田公さへきのあたひたぎみ、母は阿刀氏、幼名を眞魚まをと云ふ。性聰明にして夙に神童と稱せらる。十五歳にして南都に上り、外戚阿刀宿禰大足に就いて論語孝經等を受け兼ねて文章を學ぶ。十八歳にして大學明經科に入り直講味酒淨成に就いて毛詩尚書等を読み、岡田博士に就いて左氏春秋を問ひ、經史を博覽す。然れども尙未だ意に滿たず。適々大和石淵寺の勤操大徳に逢うて虚空藏求聞持法を受け、阿波の大瀧嶽、土佐の室戸崎等を跋涉して苦修練行す。又當時本書三卷を製して出家の志を宣明せられたりと云ふ。二十歳にして勤操大徳に隨つて和泉國槇尾山寺に至り



出家受戒して名を教海と號し、後に如空と改めまた空海と改む。延曆十四年東大寺戒壇に登りて具足戒を受け、一日佛前に誓ひを發して「唯願くは三世十方の諸佛、我に不二の法門を示し玉へ」と祈り靈夢に由つて遂に久米寺の大塔の下に大毘盧遮那經を感得す。延曆二十三年入唐留學の恩命に浴し、同年六月遣唐大使葛野鷹に隨つて入唐し、青龍寺の惠果和尚より眞言密教兩部の祕藏を稟承す。大同元年八月歸朝、我國に初めて眞言宗を弘傳し一代の師表として平城、嵯峨、淳和、仁明の四帝に灌頂を授けられ、終に承和二年三月二十一日高野山に入定せらる。爾後八十七年を経て延喜二十一年醍醐天皇より弘法大師の謚號を追賜せらる。

解

二、本書の梗概

本書は弘法大師空海上人が、發心出家の動機を寓意小説體に創作して、之を親戚知己の間に發表せられた宣言書であつて、其の潑刺たる青春の意氣と、其の少壯時代に於ける富贍なる文藻の一端を窺ふに足るものがある。

題

本書の内容は、序文に於て先づ儒道佛三教の優劣を論じて出家入道の必しも忠孝に乖かざる所以を痛論し、大師の出家を諫止せんとせし親戚の儒士等の妄を辯じて、本書製作の理由を明かにしたものである。次に本文に入つて上卷には兎角公を主人として之に外甥の不良青年蛭牙公子を拉し來り、儒者龜毛先生に託して其の感化教誘を請ひ以て忠孝の道を誨へしめ、中卷には道士虛亡隱士を煩はして、高遠なる道教の無爲澹怕なる理想を明かにし、赤烏の城に放曠し紫微の殿に優遊する仙術の幽致を説かしむ。下卷には假名乞兒をして佛教の玄妙なる三世因果の理を辯ぜしめ、次で無常の賦を賦して龜毛先生等を驚倒せしめ、更に彼等の需めに應じて生死海の賦を詠じ、終りに臨んで別に十韻の詩を作り、一同をして之を唱和せしめて全卷を結んでゐる。

解

題

三、本書製作の年時

本書製作の年代に就いては、一説には御遺告に依つて大師十八歳の作とし（眞濟

記、大師廣傳等) 一説には本書の序文に依つて延暦十六年、大師二十四歳の作とす(行化記、本朝通鑑等)。一説には前記兩説を折衷して、十八歳の起稿、二十四歳の再治とす(覺明註、簡註等)。後世多く此の第三説を取る。然るに瑜公の御遺告釋疑抄には十八歳にして製草の志を起し、二十四歳にして正しく作ると爲す。此の瑜公の説は最も妥當なるが如くである。但し延暦十六年は「聾瞽指歸」御製作の年時なるべく、三教指歸の御改題は更に其の後年に屬するものであらう。何となれば聾瞽指歸の序文に於て既に

題

「于時平朝御宇 聖帝瑞號延暦十六年窮月始日」
と明記し、又下卷に至りて

「未_レ就_レ所_レ思_ニ忽_ニ經_ニ三_ニ八_ニ春秋_一也」

とあれば聾瞽指歸が已に二十四歳の御製作なることは争ふの餘地がないからである。然らば大師が一旦脱稿せられた聾瞽指歸を更に三教指歸と改題せられ、并に初の序

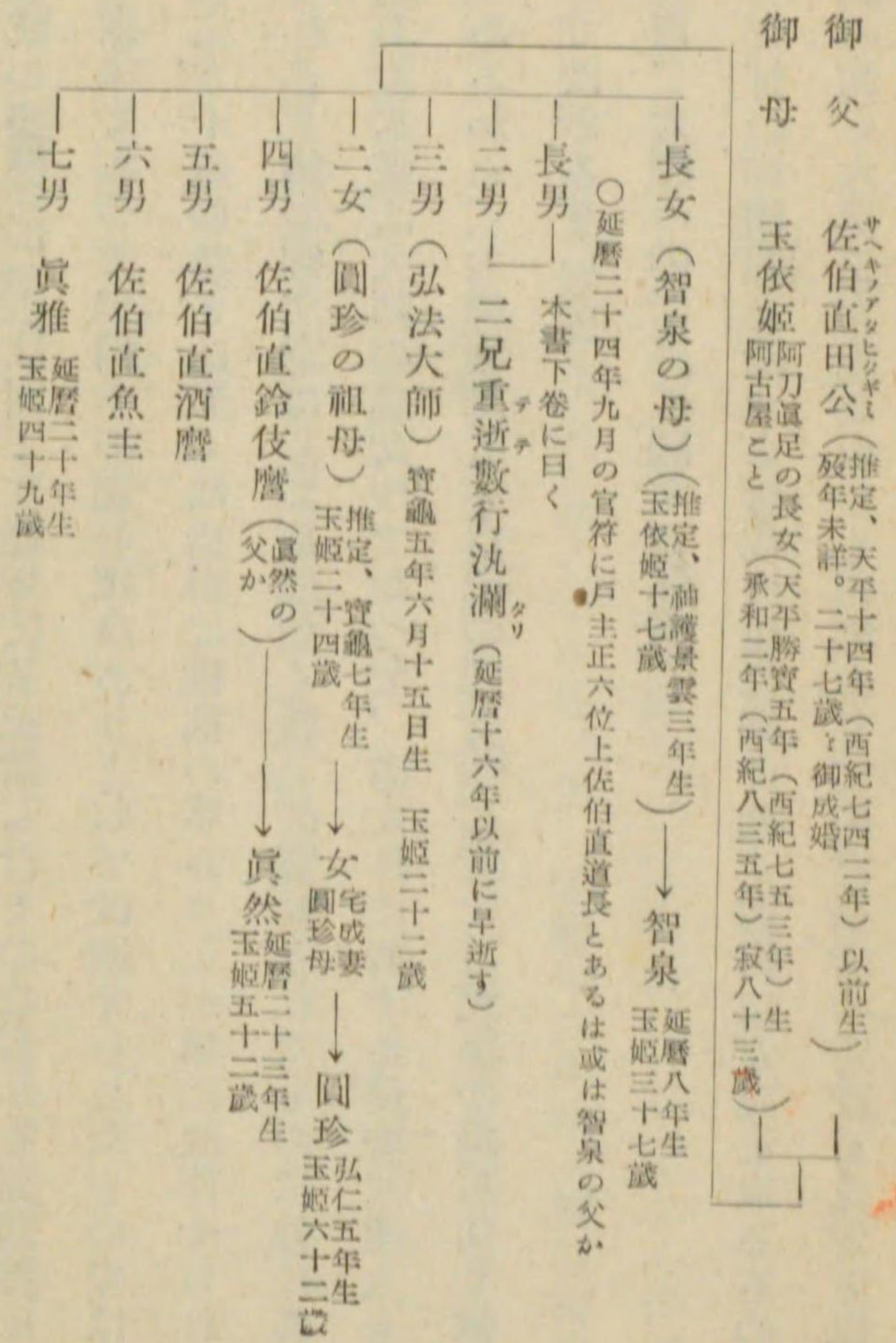
文と終の十韻の詩を改作し、或は處々の字句を補正せられた所以は如何と云ふに、題號の聾瞽の二字は固より蛭牙公子を指したもものならんも亦間接に儒道二教に對する意味もあつて、稍や不遜の嫌ひありとして改題せられたものではあるまいか。又序文と十韻の詩とは恐くは措辭に稚拙の感ありしが爲に改作せられたものであらう。されど大師の御文章にして是の如く數々改竄せられたものは他に其の例を見ない。想ふに本書は大師の處女作であつて、處女作に對する愛著は何人も免れがたいものであるから、大師と雖も亦自己の處女作に對する愛著の絶ち切り難いものがあつたのではあるまいか。

解

四、大師の御同胞に關する私案

大師の御同胞を論ずる者或は得仁師の如く四男二女説を取るもの、或は長谷寶秀師の如く六男二女説を取るもの等ありて未だ學者の定説を見ずと雖も、予は阿刀家系圖、三代實錄、并に本書等に依つて七男二女説を立てんとするものである。

大師の御同胞七男二女説の表（私案）



凡 例

本國譯は寛文三年版泊如運敵師の三教指歸刪補を底本とし、弘法大師全集本并に三教指歸簡註等を参照した。

昭和九年臘月一日

大正大學學長 加藤精神識

以上

三
教
指
歸



三教指歸 卷の上并びに序

文の起り必ず由あり。天期かなるときは則ち象を垂れ、人感するときは則ち筆を
含む。是の故に麟卦、聘篇、周詩、楚賦中に動いて紙に書す。凡聖貫殊に古今時異
三 たりと云ふと雖も、人の憤りを寫す、何ぞ志を言はざらん。

教 余并志學にして外氏阿二千石文學の舅に就いて伏膺し鑽仰す。二九にして槐市に
指 遊聽し雪螢を猶ほ忘るに拉ぎ、繩錐の勤めざるに怒る。爰に一の沙門あり、余に

虚空藏開持の法を呈す、其の經に説かく、「若し人法に依つて此の眞言一百万遍を誦
すれば、即ち一切の教法の文義諳記することを得」と。焉に大聖の誠言を信じて飛
箴を鑽燧に望み、阿國大瀧嶽に躋り攀ち、土州室戸崎に勤念す。谷響を惜まず、

明星來影す。遂に乃ち朝市の榮華念念に之を厭ひ、巖藪の煙霞日夕に之を飢ふ。
輕肥流水を看ては則ち電幻の歎き忽に起り、支離懸鶉を見ては則ち因果の哀み

休まず。目に觸れて我を勸む、誰か能く風を係がん。

爰に(二五)一多の親識あり、我を縛するに五常の索を以てし、我を斷るに忠孝に乖くと
いふことを以てす。余思はく「物の情一ならず、飛沈性異なり。是の故に聖者の人
を驅るに、教網三種あり、所謂釋李孔なり。淺深隔ありと雖も並びに皆聖說なり、
若し(二六)一の羅に入りなば何ぞ忠孝に乖かん」と。
(二七)復た一の表甥あり。性則ち很戾にして、鷹犬酒色晝夜に樂みとし、博戲遊俠以て

常の事とす。其の習性を顧みれば陶染の致す所なり。
(二八)彼此の兩事、日毎に予を起す。所以に龜毛を請うて以て儒客とし、兎角を要めて

主人と作し、虚區士を邀へて道に入るの旨を張り、假名兒を屈して出世の趣を示す。
俱に楯戟を陳ねて並びに姪公を箴む。勸して三卷と成して名けて『三教指歸』と曰
ふ。唯だ憤懣の逸氣を寫せり。誰か他家の披覽を望まん。時に延曆十六年臘月の一
日なり。

龜毛先生論 一首

龜毛先生といふものあり。天姿辯捷にして面容魁悟たり。(一)九經三史心藏に括囊し、
三墳八索意府に諧憶せり。(二)三寸纜かに發すれば枯れたる樹榮え華さき、一言僅かに
陳ぶれば曝せる骸反つて突づく。(三)蘇秦晏平も此に對へば舌を巻き、張儀郭象も遙
かに瞻て聲を飲む。

偶々(四)休暇の日に就いて兎角公が館に投る。爰に則ち筵を肆べて席を設け、饌を薦
めて盞を飛ばす。三獻已に訖つて膝を促けて談話す。

是に兎角公の外甥に姪牙公子といふ者あり。其の人となり、狼心很戾にして教誘
に纏はれず、虎性暴惡にして禮義に羈がれず、博戲を業とし鷹犬を事とす。遊俠に
して頼なく、奢慢餘あり、因果を信ぜず罪福を諾はず、醉ふまで飲み飽くまで喰
うて色を嗜み寢に沈めり。親戚病あれども曾て愁ふる心なく、疎人相對へども敬接

の志なし、父兄を狎れ侮り耆宿を侈り凌ぐ。

時に兎角公龜毛先生に語つて曰く「蓋し聞く、王豹 譎を好んで已に高唐を變じ、
縦之書を翫んで亦た巴蜀を化す。橘柚 陽に徙りぬれば自然に枳となり、曲蓬麻
に糝りぬれば扶けずして自ら直し。庶幾くは先生、祕鍵を披き陳べて頑心を覺し示
し、隱鈴を扣き攄べて蠢意を教へ悟せ」と。

先生の曰く「吾聞く、上智は教へられず下愚は移らずと。古聖猶ほ痛む、今愚何
ぞ易からん」と。

兎角公の曰く「夫れ物に體し情に縁るは先賢の論する所、時に乗じて藻を摘ぶる
は古振り貴ぶ所なり。故に韋昭が博を譏るの篇、元淑が邪を疾むの賦、並びに緇
素に載せ葉を経て鑿誠たり。又有り、鈍き刀の骨を切る必ず砥の助に由り、重き輅
の輕く走るは抑亦た油の縁なり。智なき鐵木すら猶ほ既に是の如し、情ある人類
何ぞ仰止せざらんや。今先生、霧意を蕩滌して彼の迷へる康を指し、瞳矇を鍼灸し

て此の直き莊に歸らしめよ。豈盛ならずや、復た快からざらんや」と。

爰に龜毛先生、心叅ひ神煩んで忙然として長息す。圓覆を仰いで以て慨を含
み、方載に俯して以て思を深うす。喟焉として良久しうし、嘖然として哈つて曰く
「三たび勸むること慇懃なり、來命を拒ぎ回し。今當に微管を傾け竭して愚流の行
迹を標し、拙蠶を盡し涸して攝心の梗概を陳ぶべし。但し懸河の妙辯は舌端に短く
乏しく、北海の湛智は心府に匿しく窶し。筆は痾を除くことを謝し、詞は將を殺
すに非ず。彼の趣を披かんと欲すれば口の裏に悻悻たり、黙して罷みなんと欲すれ
ば胸の中に憤憤たり、抑へ忍ぶことを得ず、聊か推揚を事とす。宜しく一隅を示す
べし、孰れか三端を扣かん。

竊かに惟みれば、清濁剖判して最靈 權輿たり。並びに二儀に稟けて同じく五體を
具へたり。是に賢智は優華の如く蠢癡は鄧幹の若し。是の故に善を仰ぐの類は猶ほ
鱗角よりも稀に、惡に耽るの流は既に龍鱗よりも鬱なり。操行は星の如く意趣は

面(三〇)に疑(三九)たり。玉石(三九)途殊(四〇)んじて遙(四〇)に九等(四一)を分ち、狂哲(四一)區(四二)を別(四三)んじて遠(四四)く卅里(四五)を隔(四六)たり。各、好む所に趣(四七)けば石(四八)を水(四九)に投(五〇)するが如(五一)く、並(五二)びに惡(五三)む所に赴(五四)けば脂(五五)を水(五六)に沃(五七)るゝに似(五八)たり。寔(五九)に鮑(六〇)の塵(六一)の嗅(六二)き氣(六三)猶(六四)ほ未(六五)だ改(六六)變(六七)せず、麻(六八)の畝(六九)の直(七〇)き性(七一)亦(七二)未(七三)だ萌(七四)兆(七五)せざるに由(七六)れり。遂(七七)に頭(七八)蝨(七九)と與(八〇)んじて以(八一)て性(八二)を陶(八三)き、晋(八四)齒(八五)と將(八六)んじて心(八七)を染(八八)む。表(八九)は虎(九〇)皮(九一)の文(九二)の若(九三)く、内(九四)は錦(九五)袋(九六)の糞(九七)に同(九八)じ。視(九九)肉(一〇〇)の譏(一〇一)具(一〇二)に一(一〇三)涯(一〇四)に招(一〇五)き、戴(一〇六)盆(一〇七)の誚(一〇八)永(一〇九)く萬(一一〇)葉(一一一)に傳(一一二)へたり。豈(一一三)辱(一一四)しからずや、亦(一一五)た哀(一一六)しからずや。

余思(一)はく、楚璞(二)光(三)を致(四)すは必(五)ず錯(六)礪(七)を須(八)ち、蜀錦(九)彩(一〇)を摛(一一)ぶること尤(一二)も江(一三)に濯(一四)ふに資(一五)れり。戴淵(一六)志(一七)を變(一八)じて將(一九)軍(二〇)の位(二一)に登(二二)り、周處(二三)心(二四)を改(二五)めて忠(二六)孝(二七)の名(二八)を得(二九)たり。然(三〇)れば則(三一)ち、玉(三二)は琢(三三)磨(三四)に緣(三五)つて照(三六)車(三七)の器(三八)と成(三九)り、人(四〇)は切(四一)磋(四二)を待(四三)つて穿(四四)犀(四五)の才(四六)を致(四七)す。教(四八)に従(四九)ふこと圓(五〇)なるが如(五一)くなるときは則(五二)ち庸(五三)夫(五四)の子(五五)も三公(五六)に登(五七)るべく、諫(五八)に逆(五九)ふこと方(六〇)なるに似(六一)たるときは則(六二)ち帝(六三)皇(六四)の裔(六五)も反(六六)つて匹(六七)備(六八)と爲(六九)る。木(七〇)は繩(七一)に従(七二)つて直(七三)しといふは已(七四)に昔(七五)の聽(七六)に聞(七七)けり。人(七八)は諫(七九)を容(八〇)れて聖(八一)なりといふこと豈(八二)今(八三)彼(八四)れ空(八五)しからん

や。上天(一)子(二)に達(三)し下(四)凡(五)童(六)に及(七)ぶまで、未(八)だ有(九)らじ學(一〇)ばずして能(一一)く覺(一二)り教(一三)に垂(一四)いて以(一五)て自(一六)ら通(一七)するものは。夏殷(一八)傾(一九)滅(二〇)し周漢(二一)興(二二)隆(二三)すること、並(二四)びに是(二五)れ前(二六)覆(二七)の龜(二八)鏡(二九)、後(三〇)誠(三一)の美(三二)風(三三)なり。戒(三四)めざる可(三五)けんや、愼(三六)まざる可(三七)けんや。宜(三八)しく汝(三九)蛭(四〇)牙(四一)公子(四二)、耳(四三)を伶(四四)倫(四五)に借(四六)り目(四七)を離(四八)朱(四九)に貸(五〇)りて、恭(五一)んで吾(五二)が誨(五三)を聞(五四)き汝(五五)が迷(五六)へる衢(五七)を覽(五八)るべし。

夫(一)れ汝(二)が性(三)たらく、上(四)二親(五)を侮(六)つて告(七)面(八)の孝(九)なく、下(一〇)萬民(一一)を凌(一二)いで隱(一三)恤(一四)の慈(一五)なし。或(一六)るときは弋獵(一七)を宗(一八)として山(一九)坳(二〇)に跋(二一)渉(二二)し、或(二三)るときは釣(二四)罟(二五)を業(二六)として溟(二七)海(二八)に櫂(二九)す。終(三〇)日(三一)譚(三二)浪(三三)して已(三四)に州(三五)吁(三六)に過(三七)ぎたり、達(三八)夜(三九)博(四〇)突(四一)して亦(四二)た嗣(四三)宗(四四)に踰(四五)えたり。話(四六)言(四七)遠(四八)く離(四九)れて寢(五〇)食(五一)盡(五二)く忘(五三)れたり。水(五四)鏡(五五)氷(五六)霜(五七)の行(五八)盡(五九)く滅(六〇)え、谿(六一)壑(六二)貪(六三)婪(六四)の情(六五)競(六六)ひ熾(六七)なり。毛(六八)類(六九)を咀(七〇)嚼(七一)すること既(七二)に師(七三)虎(七四)の如(七五)く、鱗(七六)族(七七)を喫(七八)噉(七九)すること亦(八〇)た鯨(八一)鯢(八二)に過(八三)ぎたり。曾(八四)て愛(八五)子の想(八六)なし、豈(八七)己(八八)宍(八九)の顧(九〇)あらんや。酒(九一)を嗜(九二)んで酪(九三)酏(九四)すること渴(九五)猩(九六)も耻(九七)を懷(九八)き、趁(九九)り逐(一〇〇)うて食(一〇一)を望(一〇二)むこと飢(一〇三)蛭(一〇四)も儻(一〇五)に非(一〇六)ず。蝸(一〇七)の若(一〇八)く蟾(一〇九)の若(一一〇)し、草(一一一)葉(一一二)の誠(一一三)を顧(一一四)みず。明(一一五)も靡(一一六)く晦(一一七)も靡(一一八)し、誰(一一九)か麻(一二〇)子(一二一)が責(一二二)を致(一二三)さん。恒(一二四)に蓬(一二五)頭(一二六)の婢(一二七)妾(一二八)を見(一二九)ても已(一三〇)に登(一三一)徒(一三二)

子が好色に過ぎたり。況や冶容の好婦に於てをや、寧ろ術婆伽が胸を焼くことなからんや。春馬、夏犬の迷已に胸臆に煽なり。老猿、毒蛇の觀何ぞ心意に起さん。倡樓に向つて喧樂すること恰も獼猴の杪に戯るゝに似たり。學堂に臨んで欠伸すること還つて麋兔の蔭に睡るが若し。首を懸け股を刺すの勤め全く心の裏に闕け、傷を提げ蟹を捕るの行専ら胸の中に蘊めり。數十の燿燿囊の中に聚めず、一百の青鳧常に杖の頭に懸けたり。若し儻寺に入つて佛を見ては、罪咎を懺せずして還つて邪心を作す。未だ知らず一稱の因遂に菩提となり、四銖の果終に聖位に登るといふことを。庭を過ぎて誨を蒙れども己が悪を誅せずして翻つて提撕を恨む。豈思はんや諄諄たる意猶子よりも切に、勸勸たる思比兒よりも重きことを。好んで人の短を談じて十韻の銘を顧みることなく、屢多言を事として三緘の誠を鑿みず。明かに諧言の骨金を鑠すことを知りて樞機の榮辱を發することを慎します。此の如きの品類定に繁くして徒あり。禹の筆も何ぞ書さん、隸が箒も豈計らんや。如し復た

飽くまで滋き味を食つて徒に百年を勞せんこと既に禽獸に同じ、煥に錦繡を衣て空しく四運を過さんこと亦た犬豚の如し。記に曰へらく『父母疾あるときは冠者櫛らず、行起に翔はず、琴瑟御せず、酒變に至らず、啖むこと矧に至らず』と。此れ乃ち親を思ふこと切骨にして敢て容装せざるなり。又云く『隣に喪あるときは春くに相せず。里に殯あるときは街に歌はず』と。是れ復た人と憂を共にして親疎を別たざるなり。其れ疎遠に於て是の如く、昵近に於て彼が如し。故に親族不豫なるときに醫を迎へ藥を嘗むるの誠なくんば則ち賢士、哲夫目を側めて汗を流す、閭巷に憂あれども相愁へて問慰するの情なくんば則ち傍親、有識心を寒うして地に入る。形禽獸に殊なるも何ぞ木石に同じきや、體人類の如きも何ぞ鸚猩に似たるや。嚮使蛭牙公子、若し能く惡を翫ぶの心を移して専ら孝徳を行はば則ち血を流し瓮を出し、筭を抽んで魚を躍らしむるの感、孟丁が鞞に軼んで蒸蒸たる美を馳せん。忠義に移さば則ち檻を折り疎を壞り肝を出し心を割くの操、比弘が類に

踰えて諤諤たる譽を流さん。經典を講論せば東海西河も舌を結んで辭謝せん。史籍を涉獵せば南楚西蜀も口を閉ぢて揖讓せん。書を好まば則ち鷗翔虎臥の字、鍾張王歐も毫を擲つて耻を懐かん。射を翫はば則ち落鳥哭猿の術、羿養更浦も弦を絶つて歎きを含まん。戰陣に就かば張良孫子も三略の術なきことを慨かん。稼穡に赴かば陶朱、猗頓も九穀の貯なきことを愁へん。政に莅まば則ち四知を跨えて譽を馳せん。獄を斷らば則ち三黜に超えて美を飛ばさん。清慎ならば則ち孟母、孝威が流ならん。廉潔ならば則ち伯夷、許由が侶ならん。若し乃ち神を醫道に赴け心を工巧に馳せば心を換へ胃を洗ふの術、扁華に越えて以て奇を馳せん。蠅を斲り鳶を飛ばすの妙、匠輪を凌いで異を翔らかさん。若し是の如くなるときは則ち汪汪たる萬頃彼の叔度と同じく、森森たる千仞此の庾嵩に比せん。觀る者は深淺を測らず、仰ぐ者は高下を度らざらん。

猶ほ須らく郷を擇んで家とし、土を簡んで屋とし、道を握つて床とし、徳を挈げ

て褥とし、仁を席として坐し、義を枕として臥し、禮を被として以て寝ね、信を衣として以て行くべし。日に一日を慎み時に一時を競ひ、孜孜として鑽仰し切切として斟酌せん。縹囊黄卷をば吐握にも弃てず、青簡素鉛をば顛沛にも離さず。

是の如くなるときは則ち、會宴の講義には五鹿の角を摧き、諸生の論難には五十の筵を重ねん。森森たる辯泉蒼海と與んじて以て沸涌し、彬彬たる筆峰碧樹と共んじて以て榮を縦にせん。玲玲として玉のごとくに振ひ孫馬を凌いで以て瑤を連ね、曄曄として金のごとくに響いて楊班に踰えて藁を貫かん。離騷を奏して時を過さず、鸚鵡を賦して點を加へず。詩賦の苑に翱翔し、藻製の野に休息せん。然れば則ち翹翹たる車乘門外に軫を接へ、菱菱たる玉帛囿の中に塵を連ねん。魏侯の輅、蓬門に軾せば何ぞ更に角を扣かん。周王の輦、草廬に敗せば何の暇あつてか鉄を弾ぜん。僥倖せずして以て台鼎に登り、自ら銜はずして以て槐棘に齒り、青紫を地芥に拾はんこと瞬目にして致しつ可し、印綬を股錐に總べんこと踵を旋らすに期し

つ可し。爰に則ち孝を移して主に竭し、涕を流して僚に接せん。干將を佩びて以て鏘鏘たり、圭笏を搢んで濟濟たらん。紫震に進退し丹墀に俯仰せん。入りて萬機を議らば譽四海に溢れ、出でて百姓を撫せば毀衆舌に斷たん。名簡牘に策され榮後裔に流らん。高爵の綏んする所、美諡の贈る所なり。豈に不朽の盛事に非ずや、何ぞ亦た更に加へん。

若し復た遊俗の前には行樂に日あれども、返眞の後には相娛しむに人なし。天上の牽牛も猶ほ獨り住むことを歎き、水中の鴛鳥も必ず比宿することを歡ぶ。所以に詩に七梅の歎あり、書に二女の嬪を貽せり。然れば則ち人は展季に非ず、誰か伉儷なからん。世は子登に異なり、何ぞ隻枕す可き。必ず須らく行雨の蛾眉は彼の姬氏を策ひ、飄雪の蟬鬢は此の姜族を占ふべし。轟轟たる訝の格隱隠として衢に溢れ、飄飄たる送の騎霜艾として郭に側たん。從者踵を躡んで袂幕天を蔭ひ、徒御肩に駕して汗霖地に灑がん。紫蓋空に飛んで雲の如くに翔り、繡服地を拂つて風のごとく

に歩まん。訝迎の禮を盡し勝送の義を極めん。牢を同じうし尊を同じうし、香を合せ體を合せん。珠簾を褰げて鳳儀に對ひ、金牀を拂つて龍體に比せん。琴瑟を陵いで以て韻を調へ、膠漆に超えて契を同じうせん。偕老を東鯨に笑ひ同穴を南鵲に悵らん。一期の愁を消し百年の樂を快くせん。

又時に九族を聚め數三友を速かば、則ち八珍の嘉肴を陳ね九醞の旨酒を酌まん。羽觴を飛ばして以て數なく、滿白を舉げて而も環の如くならん。客は八音を調べて『言歸んなん』の詩を詠じ、主は二轄を投じて途露の滋きを稱せん。日を重ねて歸らんことを忘れ夜を疊ねて舞蹈し、寶中の逸樂を縦にし世上の賞般を盡さん。寧んぞ樂しからざらん。

宜しく蛭牙公子、早く愚執を改めて専ら余が誨を習ふべし。苟に此の如くなるときは則ち親に事うまつるの孝窮まり、君に事うまつるの忠備はり、友に接はるの美普く、後を榮やかすの慶滿ちなん。身を立つるの本、名を揚ぐるの要、蓋し斯の如

き歟。孔子曰はく『耕すときは餒其の中に在り、學ぶときは祿其の中に在り』と。誠なる哉斯の言。當に紳骨に鏤書すべき耳』と。

粵に蛭牙公子跪いて稱して曰く「唯唯、敬んで命を承んぬ。今より以後心を専らにして奉習せん」と。

是に兎角公席より下りて再拜して曰く「猗歟善い哉。昔は雀變じて蛤と爲ること

を聞いて猶ほ疑怪を懷けり、今は蛭牙が鳩の心忽ちに化して鷹と作ることを見つ。
葛公が白飯忽ちに黄蜂となり、左慈が形を改めて倏に羊類と作るも、豈に先生の勝辯狂を變じて聖となせるに如かんや。所謂る『漿を乞うて酒を得、兎を打つて麀を獲』とは斯の謂歟。詩を聞き禮を聞くの客、何ぞ今日の勝誘勝誨に過ぎん。只に蛭牙が誠たるのみに非ず、余も亦た身を終るまでの口實に充てん」と。

三教指歸 卷の中

虚叵隱士論

虚叵隱士といふものあり、先より座の側に在りて、愚を詳り智を淪し光を和らげ狂を示す。蓬亂の髪は登徒が妻に踰え、濫縷の袍は董威が輩に超えたり。傲然として箕踞し莞爾として微笑す。唇を陳べ頬を緩うして睢盱として告げて曰く、「吁吁異なる哉卿が藥を投ずること、前には千金の裘を視て猶ほ龍虎に對へるがごとく、今は寸歩の蛇を觀て驢駒を瞻るが若し。如何んが己身の膏肓を療せずして輒爾く他人の腫脚を發すや。卿が病を療するが如きは治せざらんには如かじ」と。

粵に龜毛公愕然として顧眄し、有覩として進んで曰く「先生若し異なる聞あらば、

請ふ爲に啓沃せよ。僕、兎が命に忍びずして帥爾に輒く之を談ず。伏して乞ふ、先生、春雷を祕することなかれ」と。

隱士が曰く「夫れ懔懔たる弘陽輝光焔に朗かなれども、然れども盲瞽の流は其の曜を見ず。礧礧たる霹靂震響、猛く厲しけれども、然れども聾耳の族は彼の響を信ぜず。矧や太上の祕録言凡耳に邈なり。天尊の隱術如何んが妄に説かん。血を齧つて盟を遺すとも太だ聞くことを得難し、骨に鏤めて信を示すとも何ぞ曾て傳へ易からん。所以何んとならば、短き綆の水を汲む疑を井の涸れたるに懷き、小き指の潮を測る猶ほ底の極まれるかと謂へり。苟も其の人に非ざれば談を喉の内に閉ぢ、實に其の器に非ざれば櫃の泉の底に祕す。然うして後に機を見て始めて開き人を擇んで乃ち傳ふ」と。

是において龜毛公等並びに相語つて曰く「昔漢帝の仙を冀ひし、惘に王母に請ひ、長房が術を得たる亦た壺公に學びき。吾等邂逅して曾て邴原が千里の尋無うして長

く彭祖が萬祀の壽あらんこと、豈美ならずや、亦た幸に非ずや」と。三人並びに進んで再拜稽顙して隱士に請うて曰く「重ねて望むらくは誨を垂れよ」と。隱士曰く「壇を築いて誓を約せば且く一二を示さん耳」と。

爰に則ち命を承けて言の如くす。壇に昇つて誓を結び坎に臨んで盟を請ふ。契事已に畢つて増指誨を仰ぐ。隱が曰く「然り、汝等恭んで聽け。今當に子に授くるに不死の神術を以てし、汝に説くに長生の奇密を以てすべし。汝をして蜉蝣の短齡をもて龜鶴と相競ひ、跛驢の驚足をもて應龍と齊しく駿くし、三曜に並んで以て終始し八仙と共んじて相對し、朝には三嶼の銀臺に遊んで終日優遊し、暮には五岳の金闕を経て達夜逍遙することを得しめん」と。

龜毛等對へて曰く「唯唯、聞かんと欲す」と。隱が曰く「夫れ大鈞陶甄して彼此の異なく、洪鑪鎔鑄して憎愛の執を離る。獨り

彼の松喬にのみ厚くして此の項顔をのみ薄くするに非ず。但だ善く彼の性を保つと持つこと能はざると耳。養性の方、久存の術、厥の途極めて多し、具に述ぶること能はず。聊か大綱を撮つて其の少分を示さん。

又昔秦の始皇、漢の武帝内心には仙を願へども外事は俗に同じ。鐘鼓鐃鏘として已に耳聰を奪ひ、錦繡粲爛として忽に目明を損ず。紅臉、朱唇暫くも離るゝこと能はず、鮮鱗、生毛片食にも退けず。屍を臥せて觀と作し、血を流して川と爲す。是の如きの事類以て陳説し難し。流すに涓滴を以てし溲すに尾閭を以てす。心行相違して徒に費勞を深うす。是れ猶ほ方なる底に圓なる蓋を覆うて其の能く合はんことを願ひ、功力を寒氷に極めて飛焰を求めんがごとし。何ぞ其れ愚なるや。然れども猥俗の謂へらく『帝皇の至つて貴きも猶ほ亦た得ず。而るを況んや凡人をや』と。此れを以て虚誕と爲し此れを以て妖狂と號す。何ぞ其れ迷へるや。樂太兩帝の徒は此れ乃ち道中の糟糠、仙を好むの瓦礫なり。深く惡む可きの甚しきなり。夫れ是の

如くなるが故に傳ふるに必ず人を擇ぶ、尊卑を以てするに非ず。宜しく汝等心を専らにして受け學んで後の毀を致すことなかるべき耳。能く學ぶの人は蓋し此れに異なる歟。

手足の及ぶ所豸蠚をも傷けず、身肉の物精唾をも寫さず。身に鼻塵を離れ心に貪慾を絶つ。目に遠く視ることを止め耳に久しく聴くこと無し。口に麤語を息め舌に滋き味を斷つ。克く孝あり克く信あつて、且つは仁あり且つは慈あり。千金を蹶てて以て蓬芥の如く、萬乘に臨んで脱躪の如し。纖腰を視ること鬼魅の如く、爵祿を見ること腐鼠の如し。怕乎として無爲なり、澹然として事を減す。然うして後に始めて學ぶときは掌を指すに異ならず。但し俗人の尤も翫好する所は則ち道侶の甚だ禁忌する所ならず耳。若し能く此れを離るゝときは仙を得ること難きに非ず。五穀は腑を腐すの毒、五辛は目を損ずるの鳩、醴醪は腸を斷つ劍、豚魚は壽を縮むるの戟、蟬鬢蛾眉は命を伐るの斧、歌舞踊躍は紀を奪ふの鉞。大いに笑ひ大い

に喜び極めて忿り極めて哀しむ、此の如きの類各、損する所多し。一身の中に既に此の如きの敵多し、若し此の讎を絶たざれば長生久存未だ聞く所あらず。此れを離るゝこと俗に於て尤も難し、此れを絶つときは仙を得ること尤も易し。必ず須らく先づ其の要を察して乃ち服餌す可き耳。

白朮、黄精、松脂、穀實の類は以て内の痾を除き、蓬の矢、葦の戟、神符、呪禁の族は以て外の難を防ぐ。呼吸時を候ち、緩急節に隨ふ。天門を叩いて以て醴泉を飲み、地府を掘つて以て玉石を服す。草芝、穴芝は以て朝の飢を慰め、伏苓、威喜は以て夕の慙に充つ。則ち日中に影を淪し夜半に能く書す。地下を徹し瞻、水上に能く歩む。鬼神を隷とし龍驤を騎とす。刀を呑み火を呑み風を起し雲を起す。此の如きの神術何すれぞ成らざらん、何の願か満たざらん。又あり、白金、黄金は乾坤の至精、神丹練丹は藥中の靈物なり。服餌するに方あり、合造するに術あり。一家成ることを得つれば門を合つて空を凌ぐ、一銖纒かに服すれば白日に漢に昇る。

其の餘の符を呑み氣を餌ふの術、地を縮め體を變するの奇、推すに而も廣し、勝げて計ふ可からず。

若し彼の道に叶ひ若し其の術を得つれば即ち形を改め髪を改め命を延べ壽を延ぶ。死籍數、削り生葉久しく長し。上は則ち蒼蒼に跨つて翱翔し、下は則ち倒景を蹠んで獲伴す。心馬に鞭うつて八極に馳せ、意車に油さして以て九空に戲ぶる。赤鳥の城に放曠し、紫微の殿に優遊す。織女を機上に視、姮娥を月中に要む。帝軒を訪うて伴とし、王喬を覓めて徒とす。莊鵬の牀を察、淮犬の迹を見る。列馬の廐を窮め牽牛の泊を盡す。心に任せて偃臥し思に逐つて昇降す。淡泊として慾なく寂寞として聲なし。天地と興んじて以て長く存し、日月と將んじて久しく楽しむ。何ぞ其れ優なるや、如何ぞ其れ曠なるや。東父西母何ぞ恠しむに足らんや。是れ蓋し吾が聞き學ぶ所の靈寶の密術か。

世俗を顧み惟みれば、貪慾に纏縛せられて心意を煎迫し、愛鬼に羈縻せられて精

神を焦灼す。朝夕の食を營んで夏冬の衣に勞す。浮雲の富を願つて如泡の財を聚め、不分の福を邀めて若電の身を養ふ。微樂朝に臻れば天上の樂を咲ひ、小變夕に迫れば塗炭に没するが如し。娛曲未だ終らざるに悲引忽ちに逼る。今は卿相たれども明は臣僕となる。始は鼠上の猫の如く終は鷹下の雀たり。草上の露を恃んで朝日の至ることを忘れ、枝端の葉を憑んで風霜の至ることを忘る。吝、痛むべき哉、何ぞ鶻鳩に異ならん、曷ぞ言ふに足らんや。其れ吾が師の教と汝が説く所の言と、汝等が樂しむ所と吾が類の好む所と、誰れか其れ優劣なる。孰れか其れ勝負なる」と。是に龜毛公、蛭牙公子、兎角公等並びに啓いて稱して曰く「我等幸に好會に遇うて適、謙言を承はれり。方に知んぬ鮑の壘の至つて梟きと方壺の極めて香しきと、犖糜の醜きと子都の好きと。金石隔あり蕪蕪比ぶこと無し。今より以後心を専らにして神を練し永く斯の文を味はん」と。

三教指歸 卷の下

假名乞兒論

假名乞兒といふものあり。何くの人といふことを詳んぜず。蓬茨の術に生れて繩樞の戸に長ぜり。高く囂塵を屏けて道を仰いで勤苦す。漆髮剃隕して頭は銅の瓮に似たり。粉艶都べて失せて面は瓦の塙かと疑ふ。容色の顛額と體形の菼爾と。長き脚は骨豎つて池邊の鷺の若く、縮まれる頸は筋連なつて泥中の龜に似たり。五綴の木鉢は牛囊に比して以て常に左の肱に繫けたり、百八の櫃子は馬絆に方んで亦た右の手に係けたり。道神の屨を著けて牛皮の履を棄て、駄馬の索を帯にして犀角の帯を擲つ。茅座常に提げたれば市の邊の乞人も頬を押しして俯して羞ぢ、繩牀を縋負しつれば獄の傍の盜士も膝を抱いて仰いで歎く。口の破れたる軍持は油を



活るの肩かたに異らず、環わの落ちたる錫杖しゃくじやうは還たまた薪たきぎを賣るの手に同じ（二四）折頰せつあつと高匡かうきやうと
 顛頤けんいと隅目ぐもくと。鳴ゆがめる口は鬚ひげ無なうして孔雀貝くわんくわいに似たり、缺くわけたる唇くちびるは齒疎はをろそかにし
 て狡兔おとがひぼその唇くちびるの若やわし。偶たま市まいちに入るときは則すなはち瓦礫雨あめのごとくに集まり、若し津つを過
 ぐるときは則すなはち馬屎霧ばしりのごとくに来る。阿毘私度あびしどは常に膠漆かうしつの執友しやくゆうたり。光明くわうめい婆塞ばそく
 は時に篤信とくしんの檀主だんしゆたり。或るときは金巖きんがんに登つて而なうして雪ゆきに遇あつて坎墮かんらんたり、或
 るときは石峯せきほうに跨かがつて以もて糧かてを絶たつて輶輶きんかたり。或るときは雲童うんどうの娘ぢやうを眇みて心こころを
 懈たゆんで思おもひつ、或るときは瀟倍尼せうはいにを觀かんて意こころを策はまして厭いとひ離はなる。霜しもを拂はらうて蔬そを
 食くらふこと遙とほかに仮かが行こなひに同じく、雪ゆきを掃はうて肱ひぢを枕まくらとすること還かへつて孔くわんの誠まことに等なし。
 青幕天せいぼくてんに張はつて房屋ふさに勞あそせず、綈幌かうわう嶽たけに懸かつて幃帳みぢやうを營かまます。夏なつは則すなはち意こころを緩ゆるうし
 て襟えりを披ひいて太王たいうわうの雄風ゆうふうに對たいひ、冬ふゆは則すなはち頸くびを縮ちぢめ袂たもとを覆おほうて燧帝すゐていの猛火まうかを守る。
 橡飯じやうはん、茶菜ちさいも一旬いっしゆん給つがず、紙袍しほう、葛縲かつをんも二の肩かたを蔽おほはず。一枝いっしに逍遙せうえうし半粒はんりやくに自
 得とくす。何曾なにかが滋あじ味あじを願ねがはず、誰たれか子方こなたが溫裘をんきうを愛いとせん。三樂さんらくの叟おきなも此こゝれに比ひすれ

ば愧こゝろづることあり、四皓しこうの老おいも此こゝれに對たいへば儔ともがらに非あらず。形かたちは笑わらふ可べきに似にたれども
 志こゝろざしは已いに奪うばはれず。
 或あるるひと告つげて曰いく「我われれ師しに聞きけり。天地てんちの尤いるれいなる寔まことひと人ひと其そのれ首しゆたり。惟ただれ
 人の勝かちれたる行こなひは惟ただれ孝かう惟ただれ忠ちゆうなり。餘あまの行こなひは萬ばん差しやなれども此こゝの二ふたつは其そのの要もとなり。
 所以このゆゑに遺體ゐていを毀こぼたず、危あやきを見みて命いのちを授たまへ、名なを擧あげ先せんを顯あはすに、一ひとをも廢あすれ
 ば不可いなり。又一また一生いっしやうの娛ごらく樂らくは惟ただれ富ふう惟ただれ貴きなり。百年ひゃくねんの蘭友らんゆうも誰たれか妻孥さいどに比ひせん。
（三五）季きが萬鍾ばんしゆうを悲かなしむ唯ただだ逝せ親しんを感じかんじ、參さんが九佞きゆうべいに登のぼる當あたに主しゆに仕つかふるに由よしれり。今いま子なんぢ、
 親おやあり君きみあり。何なに爲なれぞ養やしやはず仕つかへざる。徒いたららち乞巧こつがいの中なかに淪しゆんで空からしく逃たれ役やくの輩ともがら
 に雜まはり、辱ちとく行かうして先人せんじんを忝はづかしめ陋名ろうめいを後葉こうえふに遺のこす。惟ただれ寔まことに大辟たいへきの加くふる所ところ、君
 子の耻はづる所ところなり。然しかも汝なんぢ之のを行なふ。親戚しんせき汝なんぢに代かつて地ちに入り、疎人しよじん汝なんぢを見て目めを
 掩おほふ。宜よろしく早く心こころを改あらめて速すみかに忠孝ちゆうかうに就つくべし」と。
 乞見こゝろ憮然ぶぜんとして問とうて曰いく「何なにをか忠孝ちゆうかうと謂いふや」と。答こたへて曰いく「聞きに在あるの

日は面を怡おもてばしめ、顔かんげせを俟うかひ、心こころに先だつて力を竭つくし、出入しゆつじふに告面こくめんし夏冬かとうに温清をんせいして、定省ていせいし色養しよくやうす、之を謂いつて孝とす。虞舜いんしゆん周文しうぶん之を行なうて帝位ていゐに登のぼり、董永とうえい伯喈はくかい之を守まもつて美名びめいを流つたふ。占筮せんせいの年としに孝こを移うつして命めいを盡つくし、顔かんげせを犯かして諫かんめ争まをふ。上天かみてん文ぶんに達いたし下地理しもちりを察しす。古いにしへを稽かんがへて今いまに擬なじ、遠とほきを柔やうんじて近ちかきを能よくくす。四海しかうに紀綱きかうとして一人じんを匡弼きやうひつす。榮後さかえこう裔えいに及び譽ほまれ來らい葉えふに流つたはらん。是こゝの如ごときを忠ちゆうとす。伊周いしゆう箕比きひ蓋かきし其そのの人ひとか」と。

假名答なまこたへへて曰いはく「親しんを安やすんじ主しゆを匡たす、是こゝの如ごときの類たぐひを忠ちゆうとし孝ことすること伏しして命めいの旨ねを承まかはんぬ。是こゝれ實まことに余あ不肖ふせうなりと雖なも然しかれども猶なほほ頗おほる禽獸きんじゆうに異ことなり。一念いっぴん離はなれず五内ごない爛裂らんれつす。夫おれ父母ふぼ覆育ふいくして提挈ていけつすること慙な懃めいなり。其そのの功こうを顧かへみるに高たかきこと五岳ごがくに並ならび、其そのの恩おんを思おもふに深こほきこと四瀆しとくに過とぎたり、骨こつに鏤ちりばめ肌はだに銘めいす、誰たれか敢あて遺忘ゐぼうせん。報はげんと欲ほするに極たまり罔なし、反かへさんと欲ほするに尤なほも厚あつし。南垓なんがいを詠よじて耻はを懷なき、蓼莪れうがを詞うたつて以もつて愁うれひを合あむ。彼かのの林鳥りんちゆうを見ては終日しゆうじつに焦あせ

灼あし、此こゝの泉癩せんらいを思おもうては達夜たつや爛肝らんかんす。常つねに歎なげずらくは楚河しよか未なだ決さくらざるに周鮒しゆうふ肆しに就つき、吳劍いごけん未なだ許ゆるさざるに徐子しよし墓かに臨ままんことを。老親らうしん皤皤ぱぱとして冥壤めいぢやうに臨まみ近づちかづけり。此こゝれ余あが頑頑ぐんぐんたる、哺ほを反かへすに由よしなし。居諸いしよ矢やの如ごとくにして彼かのの短壽たんじゆうに迫せまり、家産けさん澆漓じやうりして墻屋かうゑ傾かたくに向むかとす。二兄にけい重ねて逝ゆいて數行すかう汎瀾はんらんたり。九族きゆうぞく俱くに匱くわいしうして一心いしん潺湲せんげんたり。慷慨かうがいの思おもひを起おこして日ひを以もつて月つきに繼つぎ悽愴せいさうの痛いたみを興おこして且あより夕ゆふに達いたる。嗟呼ああ悲あい哉や。進すすんで仕つかへんと欲ほすれば已すでに筴さを好このむの主しゆなく、退ひいて黙もさんと欲ほすれば亦またた祿ろくを待まちつ親しんあり。進退しんたいの惟ただれ谷やることを歎なげき、起居ききよの狼お狽たたるに纏まとはる」と。則すなはち頌しようを作つくつて懷おもひを寫かして曰いはく、

「力ちからを肆のべて敵たに就つかんとすれば曾まて筋力きんりよくなく、角かくを扣ひいて將まさに仕つかへんとすれば既に甯ねいが識しなし。智ちなくして官くわんに在あれば譏そしりを空職くうしやくに致いたし、貪あることあつて素飡そさんすれば誠まことを尸食ししょくに遺のこす。濫竿らんかんの姦行かんかうは已すでに尤なほも直ちよくきに非あらず、雅頌がしゆうの美風びふうは但ただ周しゆうの國こくにのみ聞きく。彼かのの孔こうの縱聖じゆうせいなるすら栖遑せいきわうとして默もさず、此こゝれ余あが太ただ頑かたくな

なる、當に何れの則にか従ふべき。進まんと欲するに才なし、將に退かんとするに逼ることあり、進退兩の間何ぞ歎息すること夥しき」と。

是に頌の詞取り畢つて沈吟すること良久しうして乃ち書を作つて曰く、

「僕聞く、小孝は力を用ひ大孝は置しからずと。是の故に泰伯は髮を剃つて永く夷俗に入り、薩埵は衣を脱いで長く虎の食となる。父母地に倒るゝの痛を致し親戚天に呼ぶの歎あり。此れに因つて視れば、二親の遺體を毀ひ九族の念傷を致すもの誰か復た此の二子に過ぎんや。當に卿が告ぐるが如くんば並びに不孝を犯せり。然りと雖も泰伯は至徳の號を得、薩埵は大覺の尊と稱せらる。然るときは則ち苟くも其の道に合はば何ぞ近局に拘らん。羅卜が母の苦を抜き那舍が父の憂を濟ふもの寧ろ大孝に非ずや、亦た善友に非ずや。余愚陋なりと雖も雅訓を斟酌し遺風を鑽仰す。毎に國家のために先づ冥福を廻らし、二親一切に悉く陰功を讓る。此の惠福を摠べて忠とし孝とす。然も卿は但だ筋力の盡すべく身體の屈す

べきことを識つて、未だ于門の高かるべく嚴墓の掃ふべきことを視ず。何ぞ其れ劣なるや。然も此の書未だ心に委しうせず。後に當に之を顯はし陳ぶべし」と。

固く執ることは是の如くなるときは父兄にも拘らず親戚にも近づかず、萍のごとくに諸州に遊び蓬のごとくに異境に轉ず。爰に雲漢星闌けて六府の藏 闕焉として已に空し、石窟に儲け盡きて八萬の衆怒然として忽ちに窮す。飢の内には塵 飄り窟の中には苔充てり。是に思量すらく「内には食に依つて住することを顯はし、外には

學をすることの末なることを言ふ。如かじ、飢人を糲糲して早く豊郷に託せんには」と。即ち松林より發して聚落の京に赴き、知足の意に乗じて鉢を捧げて直に征く。從童都べて無うして子として佛經を持し、兎角が舎に到つて門の楹に倚り立てり。

是に龜毛と隱士とが論諍の戦ひの庭に逢ひぬ。各思はく「電の如くなる體を扶けて四生の囿に宿り、夢に似たるの意を擧げて十八の亭に入る。幻城を五陰の空しき國に築き、泡軍を四蛇の假の郷に興す。蛛蝥の網を甲にし蟪蛄の騎に鎧せり。蝨皮

を鼓として陳を驚かし、蚊の羽を旗として以て旅を標す。我見の戟を杖いて寡聞の劍を持ち、霜の如くなる臂を攘げて魍魎の原に戦ひ、利欲の談を競うて、寔中の辯を争ふ」と。

粵に耳を傾けて漸く聆き目を撃いて佇立す。各、我れは是なりと謂ひ並びに彼れは非なりと言ふ。時に自ら思はく「溜水の微辯燭火の小光だも猶ほ既に是の如し。沉んや吾は法王の子なり、蓋ぞ虎豹の鉞を擢き螻蛄の斧を拉がざらんや」と。遂に乃ち智慧の刀を砥いで辯才の泉を湧かし、忍辱の介を被て慈悲の驥に駕し、疾にも非ず徐きにも非ず龜毛が陳に入り、驚かず憚らず隱士が旅に對す。焉に壘を出でて盤桓し壁に入つて跋扈す。茲に因つて先んずるに孔璋が檄を以てし、示すに魯陽が書を以てす。將帥悚ぢ懼れて軍士氣を失ひ、面縛降服して刃に血ぬるに勞することなし。但し野心改め難くして情に猶豫を懷けり。即ち涙を流し首を摩でて、悲を含んで喩して曰く「夫れ鱗を濫觴に擧ぐるものは曾て千里の鯁を見るに由な

く、翮を籬籬に翳つものは何ぞ能く九萬の鵬あることを知らんや。是の故に海上の頑人は魚の如くなる木あらんかと疑ひ、山頭の愚士は木の如くなる魚あらんかと怪しむ。則ち知んぬ、離朱が明にあらざれば毫末を見るに人なく、子野が聰にあらざれば何ぞ能く鐘の響を別たん。咨呼、見ると見ざると、愚と愚ならざると何ぞ其れ遙かに隔たれるや。吾汝等が論を聞くに、譬へば氷に鏤め水に畫くに勞あつて益なきが如し、何ぞ其れ劣なるや。龜毛が鳧の脚未だ短しとす可からず、隱士が鶴の足長しとするに足らず。汝等未だ覺王の教、法帝の道を聞かずや。吾當に汝等がために略綱目を述ぶべし。宜しく秦王の僞を顯はすの鏡を鑒みて早く葉公が眞を懼るの迷を改め、俱に觸象の醉を醒して並びに師吼の道を學ぶべし。儒童迦葉は並びに是れ吾朋なり。汝が冥昧を愍んで吾が師先づ遣はず。然れども機の劣なるに依つて、淺く二儀の膚を示して未だ十世の理を談せず。而るに各、殊なる途を執して争つて旗鼓を擧ぐ、豈迷へるにあらずや」と。

隱士答へて曰く「吾熟公を視るに已に世の人に異なり。頭を視るに一毛なく、體を視るに多物を持せり。公は是れ何れの州、何れの縣、誰れが子、誰れが資ぞ」と。假名大いに笑つて曰く「三界は家なし、六趣は不定なり。或るときは天堂を國とし或るときは地獄を家とし、或ひは汝が妻孥たり或ひは汝が父母たり、有るときは(九六)波旬を師とし有るときは外道を友とす。餓鬼、禽獸は皆是れ吾と汝とが父母、妻孥なり。始より今に至るまで曾て端首なし。今より始に至るまで安んぞ定まれる數あらん。環の如くにして四生に擾擾たり、輪に似て六道に轟轟たり。汝が髪は雪の如くなれども未だ必ずしも兄たらず、吾が髪は雲の如くなれども而も亦た弟にあらず。是れ汝と吾と無始より來た更なる生れ代る死して轉變無常なり。何ぞ決定の州、縣、親等あらんや。然れども頃日の間(九七)利那幻のごとくに南閻浮提の陽谷(九八)輪王所化の下、玉藻歸る所の島、椽樟日を蔽すの浦に住し、未だ思ふ所に就かずして忽ちに三八の春秋を経たり」と。

隱士大いに驚いて曰く「何をか地獄、天堂と謂ふや。何すれぞ煩はしく衆物を持てるや」と。

假名が曰く「作業不善なれば牛頭馬頭自然に涌出して報するに辛苦を以てす。用心苟に善なれば金閣銀閣倏忽として翔り聚まり授くるに甘露を以てす。心を改むること已に難きのみ、何ぞ決定の天獄あらんや。余も前には汝が如く迷ひ疑ひき。但し頃日の間適と良師の教に遇うて既に前生の醉を醒せり。

夫れ我が師釋尊本願尤も深うして八十の權を現じ、慈悲極まり難うして三十の化を示す。時に有縁の衆は龍神をも簡ばず甘露の雨に沐し、枯れ萎める枝を榮やかして結菓の期を授く。無福の徒は貴賤を論ぜず辛臈を知らず、常に蓼溷に沈んで已に醍醐を忘れたり。所以に慈悲の聖帝終を示ししの日、丁寧(一〇〇)に補處の儲君、舊徳の曼殊等に顧命して、印璽を慈尊に授け撫民を攝臣に教ふ。是を以て大臣の文殊、迦葉等芳檄を諸州に班ち即位を衆庶に告ぐ。是の故に余忽ちに檄旨を承はつて、馬に

秣まきかひ車くるまに脂あぶらさして装束しやうそくして道みちを取る。陰陽いんやうを論ろんぜずして都史としの京けいに向むかふ。經途けいと多おほ艱がたにして人煙じんえん負おほに絶たえたり、康衢かうく甚おほだ繁しげくして徑路けいろ未なだ詳しやうかならず。一二いちじの從者しやうしや或あるひは泥中ちんちゆうに沈溺ちんてきして拔出ぞつしゆつ未なだ期ごあらず、或あるひは馬ばを騁はせ車くるまを奔わしらせて先に已なに發進はつしんせり。茲こゝに因よつて微物びぶつを弃すてず子身けつしんに負擔ふたんす。粮絶かてたえ路迷みちまどうて、辱はづかしく門もんの側かたはらに進しんんで行路かうろの資たすけを乞こふ」と。

爰おもひに則すなはち懷おもひを述こゝろべ心を策はけまして、無常むじやうの賦しを賦し受報じゆほうの詞ことばを題だいす。鈴鈴れいれいたる金錫きんしやくを振あひ啾啾しゅうしゅうたる玉たまの聲こゑを馳はせて龜毛きま等に唱となへて曰いわく、

熟尋じゆつじんねみれば、峨峨ががたる妙高めうかう峯たかねとして漢かんを干おかかせども劫火じやくわに焼やかれて以もつて灰滅けいめつ

し、浩浩かうかうたる溟瀚めいかん混濛こんもうとして天てんに滔はれども數日すうじつに曝さらされて消竭せうかつす。盤礴はんはくたる方輿ほうよ

も漂蕩ひょうたうとして摧くだけ裂ひけ、穹隆きゆうりゆうたる圓蓋えんがいも灼燠しやくやくとして碎くだけ折ひれぬ。

然しかれば則すなはち、寂寥せきりやうたる非想ひじやうも已なに電いなびかりの激おこするよりも短みづかく、放曠はうくわうたる神仙せんせんも忽たち

ちに雷らいの撃うつに同じ。況いはんや吾等われら體ていを稟うけたること金剛こんかうにあらず、形かたちを招まけるこ

と瓦礫くわれきに等ひとし。五蘊うんの虚妄こまうなること水兔すいとの僞借ぎせきに均ひとしく、四大しだいの逗とどまり難たがきこと

野馬やばの倏迹しゆくせきに過すぎたり。二六にじふの縁えんは意猿いざるを誘策いさくし、兩四りやうしの苦くるしみは常じやうに心源しんげんを惱なま

す。益盪ふんらんたる三毒さんどくの燭しやく、晝夜ちゆうやに恒つねに燐もえ、鬱鬱うつをうたる百八ひやくはちの藪夏冬おどろかとうに尤しげも繁しげし。埃ちり

を飄ひるがへせる脆ていき體きは機散きさんの朝あしたには春はるの華はなと與あんじて以もつて繽紛ひんぷんたり、風かぜに翔かける假かりの

命いのちは緣離えんりの夕ゆふべには秋あきの葉はと共にあんじて而しかも紛紜ふんうんたり。千金せんきんの瑤たまの質すかたも尺波せきはに先さきだつ

て黄扉くわうひに沈しんみ、萬乘ばんじやうの寶たからの姿すがたも寸烟そんえんに伴あつて玄微げんゐに厲いたる。姪媚せふげんたる蛾眉がびも霞がきを逐お

つて以もつて雲閣うんかくに飛とび、的矚てきしやくたる貝齒ばいしも露つゆに添そうて咸ことごとく零落れいらくす。傾城けいせいの華はなの眼まなこは

忽爾こつじとして綠苔りよくたいの浮うべる澤さはとなり、珠たまを垂たれたる麗耳れいじは倏然しゆくぜんとして松風しょうふうの通とほへる

壑たにと作る。朱しゆを施くせる紅くれなゐの臉ほも卒つひに青蠅せいようの躑躅たふしゆくとなり、丹たんに染そめたる赤くさかき唇くちびるも化

して烏鳥うてうの哺穴ほけつとなる。百もの媚こびの巧たくみなる笑あはれも枯かれ曝さらせる骨ほねの中なかには更さらに値あふべき

こと難たがく、千ちの嬌こびの妙たへなる態すがたも腐爛くちたれたる體ていの裏うちには誰たれか亦また敢あて進しんまん。峨峨がが

たる漆くろき髮かみは縦横じゆうわうとして藪おどろの上うへの流芥りうかいとなり、織織せんせんたる素しろき手ては沈淪ちんりんして草中さうちゆうの

と瓦礫くわれきに等ひとし。五蘊うんの虚妄こまうなること水兔すいとの僞借ぎせきに均ひとしく、四大しだいの逗とどまり難たがきこと

野馬やばの倏迹しゆくせきに過すぎたり。二六にじふの縁えんは意猿いざるを誘策いさくし、兩四りやうしの苦くるしみは常じやうに心源しんげんを惱なま

す。益盪ふんらんたる三毒さんどくの燭しやく、晝夜ちゆうやに恒つねに燐もえ、鬱鬱うつをうたる百八ひやくはちの藪夏冬おどろかとうに尤しげも繁しげし。埃ちり

を飄ひるがへせる脆ていき體きは機散きさんの朝あしたには春はるの華はなと與あんじて以もつて繽紛ひんぷんたり、風かぜに翔かける假かりの

命いのちは緣離えんりの夕ゆふべには秋あきの葉はと共にあんじて而しかも紛紜ふんうんたり。千金せんきんの瑤たまの質すかたも尺波せきはに先さきだつ

て黄扉くわうひに沈しんみ、萬乘ばんじやうの寶たからの姿すがたも寸烟そんえんに伴あつて玄微げんゐに厲いたる。姪媚せふげんたる蛾眉がびも霞がきを逐お

つて以もつて雲閣うんかくに飛とび、的矚てきしやくたる貝齒ばいしも露つゆに添そうて咸ことごとく零落れいらくす。傾城けいせいの華はなの眼まなこは

忽爾こつじとして綠苔りよくたいの浮うべる澤さはとなり、珠たまを垂たれたる麗耳れいじは倏然しゆくぜんとして松風しょうふうの通とほへる

壑たにと作る。朱しゆを施くせる紅くれなゐの臉ほも卒つひに青蠅せいようの躑躅たふしゆくとなり、丹たんに染そめたる赤くさかき唇くちびるも化

して烏鳥うてうの哺穴ほけつとなる。百もの媚こびの巧たくみなる笑あはれも枯かれ曝さらせる骨ほねの中なかには更さらに値あふべき

こと難たがく、千ちの嬌こびの妙たへなる態すがたも腐爛くちたれたる體ていの裏うちには誰たれか亦また敢あて進しんまん。峨峨がが

たる漆くろき髮かみは縦横じゆうわうとして藪おどろの上うへの流芥りうかいとなり、織織せんせんたる素しろき手ては沈淪ちんりんして草中さうちゆうの

腐敗と作る。馥馥たる蘭氣は八風に随つて以て飛び去んぬ、涓涓たる臭液は九竅より沸き擧れり。綢繆たる妻孥も楚宋が夢に神女に遇へるに異なることなく、磊砢たる寶藏も宛も鄭交が空しく仙語を承けしに同じ。颯颯たる松風は颯颯として襟を吹けども聆いて忻ぶの耳更に何れの所にか在る、玲瓏たる桂月は可憐として面に映すれども視て娛しむの心亦た何れの處にか之きにし。乃ち知んぬ、颯纒たる羅縠も何ぞ愛し喜ぶべき、森萃たる薜蘿此れ常の飾のみ。赭堂、聖室は曾て久しく止まることなし、松塚、墳墳は是れ長く宿するの里なり。琴瑟の孔懷も閨墓の下には相見ゆるに由なく、婉孌たる蘭友も荒墮の側には復た談笑するの理なし。孤り落落たる松の蔭に伏して空しく樹の邊に滅え、獨り譽譽たる禽の囀に伴つて徒に草の前に淪みぬ。蠢蠢たる萬蟲宛轉として相連り、斷斷たる千狗咀嚼して繼ぎ聯れり。妻子は鼻を塞いで以て厭ひ退き、親疎は面を覆うて以て逃げ旋る。嗟呼、痛ましい哉。百味を食うて婀娜たる鳳の體も徒に犬鳥の屎尿となり、

千彩を装うて嬋媛たる龍の形も空しく燎火の燃ゆる所と作る。誰か春の苑に遊んで愁緒を消し、秋の池に戯れて以て宴筵を舒ぶべけん。嗚呼、哀しい哉。潘安が詩を詠じて彌、哀哭を増し、伯姬が引を歌つて還つて裂酷を深うす。

無常の暴風は神仙を論ぜず、精を奪ふ猛鬼は貴賤を嫌はず。財を以て贖ふこと能はず、勢を以て留むることを得ず。壽を延ぶる神丹千兩服すと雖も、魂を返す奇香百斛盡く燃くとも、何ぞ片時を留めん誰か三泉を脱れん。

尸骸は草の中に爛れて以て全きことなく、神識は沸ける釜に煎られて專にすることなし。或るときは嶮巖たる刀獄に投げられて血を流すこと潺湲たり、或るときは嶮嶮たる鋒山に穿たれて胸を貫いて愁焉たり。乍ひは萬石の熱輪に轢まれ乍ひは千仞の寒川に没す。有ひは鏝湯腹に入つて常に焦煎を事とし、有ひは鐵火喉に流れて暫くも脱るゝに縁なし。水漿の食は億劫にも何ぞ稱を聞かん、咳唾の澆は萬歳にも擅にすることを得ず。師子虎狼は颯颯として歡び跳り、馬頭羅刹

は眇眇として相要む。號叫の響朝な朝な霄に翹ふれども、赦寬の意暮な暮な已に消えぬ。閻王に囑託すれども愍むの意咸く銷え、妻子を招き呼べども既に亦た繇なし。珍を以て贖はんと欲すれども曾て一の瓊瑤なく、逃げ遁れて免れんと欲すれども城高うして超ゆること能はず。嗟呼苦しい哉、嗚呼痛い哉。

誰か鷄鳴の客を覓めて早く閉關の勞を消さん、何ぞ狗盜の子を求めて克く極刑の刃を拯はん。謀窮まり途極まつて千たび悔い千たび切なり。石磷ぎ 芥盡きて已に叫び咷ぶことを増す。嗚呼痛い哉、嗚呼痛い哉。吾若し生日に勉めずして蓋し一苦一辛に羅りなば、萬たび歎き萬たび痛むとも、更に誰人にか凭らん。勉めよや、勉めよや。

是に龜毛等、百斛の酢梅鼻に入つて酸きことを爲し、數斗の荼蓼喉に入つて肝を爛らす。火を吞むことを假らずして腹已に焼くが如く、刀の穿つことを待たずして胸亦た割くに似たり。哽咽悽愴して涕泣漣漣たり。擗踴して地に倒れ屠裂して天に

翹ふ。慈親を喪ふが如く愛偶を失へるに似たり。一は則ち懼を懷いて魂を失ひ、一は則ち哀を含んで悶絶す。假名則ち瓶を採り水を呪して普く面の上に灑ぐ。食頃あつて蘇息して醒に似て言はず。劉石が塚より出でしが如く、高宗の喪に遭へるに似たり。良久しうして二目に涙を流し五體を地に投げて稽顙再拜して曰く「我等久しく瓦礫を翫んで常に微樂に耽る。譬へば辛きことを蓼葉に習ひ臭きことを廁屎に忘れ、盲目を覆うて以て險道に進み、蹇驚を驚せて冥途に向ふが如し。投らん所を知らず、陥らん所を知らず。今偶々高論の慈誨に頼つて乃ち吾が道の淺膚なることを知んぬ。臍を噬うて以て昨の非を悔い、腦を碎いて以て明の是を行はん。仰ぎ願はくは慈悲の大和上、重ねて指南を加へて察かに北極を示せ」と。

假名が曰く「兪り。咨咨善い哉、汝等遠からずして還れり。吾今重ねて生死の苦源を述べて涅槃の樂果を示さん。其の旨は則ち姫孔の未だ談ぜざる所、老莊の未だ演べざる所なり。其の果は則ち四果、獨一も及ぶこと能はざる所なり、唯だ一生、

十地の漸く優遊する所ならくのみ。諦かに聴き能く持て。要を擧げ綱を撮つて略、汝等に示さん」と。

龜毛等並びに席を避けて稱して曰く「唯唯、心を靜かにし耳を傾けて恭しく専ら説くことを仰がん」と。

粵に則ち心藏の鍵を開き舌泉の流を振うて正に生死海の賦を述べ兼ねて大菩提の果を示して曰く、

夫れ生死の海たらく、三有の際を纏うて彌望するに極まり罔し、四天の表を帯びて渺瀰として測ることなし。萬類を吹嘘し巨億を括總す。大腹を虚しうして以て衆流を容れ、鴻口を闢いて諸沍を吸ふ。陵に襄るの汰洶洶として息まず、崎を凌ぐの浪瀾瀾として相逼る。礧礧として霆のごとくに響いて日に已に衆く、麟麟として雷のごとくに震うて夜夜既に充てり。衆物累なり積んで群品夥く聚る。何の怪か育せざらん、何の詭か豊ならざらん。

其の鱗類は則ち慳貪、瞋恚、極癡、大欲あり。長き頭端なく遠き尾極まりなし。鰭を擧げ尾を撃つて、口を張り食を求む。波を吸ふときは則ち離欲の船、撞摧け帆匿れぬ、霧を吐くときは則ち慈悲の舸、楫折れ人殞びぬ。且は泳ぎ且は涵んで志意式あらず、或ひは饜し或ひは養して心性直きにあらず。壑の如く溪の如く後害測られず、鼠の若く蠶の若く隠ふるに匪す惻むに匪す。共に干劫の蹉跎を忘れて並びに一涯の貴福を望む。

其の羽族は則ち諂誑、讒諛、誹謗、譏諷、譏惡、噂暗、囁呶、籛籛、惡作あり。翮を整へて道に背き高く翥つて樂に赴く。四倒の浦に碎旬として十惡の澤に沸奔す。正直の菱を彫啄し廉潔の藿を啜喋す。鳳を見鸞を見て仰いで豫め嚇嚇たり、鼠を摯り犬を摯つて俯して則ち咋咋たり。且は飛び且は鳴いて現前の潤屋を替み、或ひは痛み或ひは死して未來の苦酷を忘る。豈知らんや、鴈門の坂には織羅張り列ね、昆明の池には黏微普く設け、更羸が箭は前に來つて首を碎き、養由が弧は後

に放つて血を流すことを。

若し其の雜類は則ち傲慢、忿怒、罵詈、嫉妬、自讚、毀他、遊蕩、放逸、無慚、無愧、不信、不恤、邪淫、邪見、憎愛、寵辱、殺害の黨、鬪鬪の族あり。形同じく心異に、類別に目殊なり。鋸の爪、鑿の齒あつて、慈少く穀を喰ひ、眈眈として虎のごとくに視て朝露の麓に遊び、睚眦として師のごとくに吼えて夜夢の谷に戯る。遇ふ者は氣を奪はれ精を抜かれ腦を塗れ腸を碎く、見る者は身慄き心悚ちて瞻瞻として警伏す。

是の如きの衆類上有頂天を絡ひ、下無間獄を籠めて、處に觸れて櫛のごとくに比び浦毎に屋を連ねたり。玄虚が神筆千たび聚めても陳べ難く、郭象が靈翰萬たび集めても何ぞ論ぜん。茲に因つて五戒の小舟猛浪に漂はされて以て羅刹の津に曳曳掣掣たり、十善の椎輪強邪に引かれて魔鬼の隣に隱隱軫軫たり。

是の故に勝心を因の夕に發し、最報を果の晨に仰ぐにあらずよりんば、誰か能

く森森たる海底を抜いて蕩蕩たる法身に昇らん。誠に須らく六度の筏纜を漂河に解き、八正の舸棹を愛波に艤し、精進の幢を樹て靜慮の颿を擧げ、群賊を拒ぐに忍鎧を以てし衆敵を威すに智劍を以てす、七覺の馬に策うつて亟に沈淪を超え、四念の輪に駕して高く囂塵を越ゆべし。

則ち頂珠を許して以て疆を封ぜんこと彼の鷲子、授記の春に同じうせん、頸瓔を奉じて以て境を盡さんこと此の龍女得果の秋に比せん。十地の長き路須臾に經殫し、三祇の遙かなる劫究め圓んせんこと難きに非ず。然うして後に十重の荷を捨てて尊位を眞如に證し、二轉の臺に登つて帝號を常居に稱せん。一如理に合うて心に親疎なく、四鏡智を含んで遙かに毀譽を離れん。生滅を超えて改めず増減を越えて衰へざらん。萬劫を踰えて圓寂に、三際に互つて無爲ならん。豈皇いならずや、亦た唐しからずや。軒帝堯羲も履を採るに足らず、輪王、釋梵も轎を扶くるに堪へず。天魔、外道、百非を勝せても毀る所にあらず、聲聞、辟支、萬是

を飛ばしても是とする所にあらず。

然りと雖も四弘未だ極めざるに一子溝に沈めり。此れを顧みるに悵悵たり、此れを思ふこと丁寧なり。爰に更に百億の應化、百億の城に班ち、假に非相に託して非形を示現す。會成の道八相に始まり、金山の體四康に坐す。神光神使八荒に驛し、慈悲慈檄十方に頒つ。

然うして後に萬類萬品雲に乗じて雲のごとくに行き、千種千彙風に騎つて風のごとくに投ることを待つ。天より地より雨の如く泉の如く、淨より染より雲の若く煙の若し。地に下り天に上り、天に上り地に下る。八部四衆區々にして各々交り連れり。讚唱 關關たり、鼓騁淵淵たり。鐘のごとくに振うて磻磻たり、華のごとくに飄へつて聯聯たり、燐燐爛爛として震震填填たり。目に溢ち耳に溢ち、黄に滿ち玄に滿てり。踵を履み跟を履み、肱を側め肩を側め、禮を盡し敬を盡し、心謹み心專なり。

爾れば廻ち、一音の鸞輪を轉じて群心の娘械を摧き、大千を抜き掲いで他界に投擲ち、大山を削らずして小芥に入る。甘露の雨を雨して以て誘ひ以て誡め、法喜の食を班つて智を韞み戒を韞めり。悉く康哉を詠じて腹壤を撃ち、咸く來蘇を頌して帝功を忘る。無量國の歸湊する所、有情界の仰ぎ叢まる所なり。惟れ尊惟れ長、以て都たり以て宗たり。咨咨蕩蕩たらざらんや大覺の雄、巍巍たるかな誰か敢て比び窮めん。

此れ寔に吾が師の遺旨、如如の少深なり。彼の神仙の小術、俗塵の微風、何ぞ言ふに足らんや、亦た何ぞ隆なりとするに足らんや。

是に龜毛公等一たびは懼れ一たびは辱ぢ、且は哀しみ且は笑ふ。舌に任せて俯仰し、音に逐つて方圓なり。歡喜踊躍して稱して曰く「吾等幸に優曇の大阿闍梨に遇ひ、厚く出世の最訓に沐す。誰昔にも未だ聞かず、後葉にも豈あらんや。吾若し不幸にして和上に遇はざらましかば、永く現欲に沈んで定めて三途に没しなん。今

僅かに提撕ていせいを蒙まうつて身心あんしん安やす徹てつなり。譬たとへへば震しん霆てい響きやうを發はつして螿ちやう蚊もん封ほうを開ひらき、朝あ烏う輪りんを轉まわじて幽ゆう闇あん氷ひやうを渙たくが如ごとし。彼かの周しゅう孔くわう、老らう莊じやうの教を何へぞ其そのれ偏へん膚ふなるや。今いまより以もつ後のち、皮かはを剝はいで紙しとし骨こつを折ひつて毫ふんを造つくり、血ちを刺さして鈇すみに代かへへ觸かねを曝あけて研すに用もちひて、敬つゝしんで大だい和わ上じやうの慈じ誨わいを銘めいして、以もつて生しやう生じやうの航かう輅らくに充みてん」と。

假かり名なが曰いわく「座ざに復かへれ、今いま當まさに三さん教かうを徹てつんじて、十じふ韻いんの詩しを以もつて汝なん等だちが譎ご諤えつに代かへへん」と。廼なち詩しを作つくつて曰いわく、

居い諸しよ冥めい夜やを破やぶり 三さん教かう癡ち心しんを褻せつぐ。

性しやう欲よくに多た種しゆあれば 醫い王わう藥やく鍼しんを異ことんず

綱かう常じやうは孔くわうに因よつて述しゆべ 受うけ習じゆうて槐くわい林りんに入る。

變へん轉てんは聃たん公こうの授さうけ 依いり傳でんへて道だう觀くわんに臨りんむ。

金きん仙せん一いつ乘じやうの法ほふは 義ぎ益い最さいも幽ゆう深しんなり。

自じ他た兼けんねて利り濟じす、 誰たれか獸じゆうと禽きんとを忘わすれん。

春はるの華はなは枝えだの下したに落おち 秋あきの露つゆは葉はの前まへに沈しづむ。

逝せ水すい住すままること能あたはず 廻くわい風ふう幾いくばくか音こゑを吐つく。

六ろく塵ちんは能あたく溺なる、海うみ 四し德とくは歸かへする所ところの岑みねなり。

已いに三さん界がいの縛ばくを知しんぬ 何なにぞ纒えい簪しんを去すてざらん。

三教指歸 卷上 序

註

- 一 鱗卦伏犧氏の畫せし所の卦。* 伏犧は人首鱗身なりしを以てなり。
- 二 聘篇老子の道德經二篇を云ふ。* 聘は老子の字なり、耳の輪なきを云ふ。
- 三 周詩、楚賦周人は詩に長ず、詩經の三百篇多くは是れ周人の詩なり。楚人は賦に長ず、屈原宋玉等最も著はる。
- 四 志學十五歳。
- 五 外氏阿二千石文學の舅大師の母方の叔父、阿刀宿彌大足。* 二千石とは大夫を云ふ。文學とは親王の學士なり。大足は嘗て伊豫親王の學士たり。
- 六 伏膺喜んで伏し従ふなり。
- 七 鑽仰學徳を仰ぎ尊ぶこと。* 〔論語〕「之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅し。」
- 八 二九十八歳。
- 九 槐市大學を云ふ。* 前漢の時、博士の舎三十區をつくり、たゞ槐樹のみを列ね植えて、物品經書等を交換し又は論議せる故なり。

- 一〇 雪螢を云云孫康車胤の故事。孫康は家貧しくして油を得ず、冬日雪の光によりて讀書せり、後に御史大夫に至る。*車胤も亦た家貧しくして油を得る能はず、夏日數十の螢を捕へその光にて讀書し、日夜怠らず。後、朝廷に顯はれ、博學を以て世に知らる。
- 一一 繩錐の云云孫敬蘇秦の故事。孫敬は常に戸を閉ぢて讀書し、梁より繩を下して頸に懸け、動もすれば坐睡せんとするを防げり、市人呼んで閉戸先生となす。*蘇秦は秦王に十たび上書して用ゐられず、秦を去る。此れより發憤し、太公の陰符を讀む。讀みて坐睡せんとする時は錐を以て股を刺す、血流れて足に至る。期年にして之を讀み畢る。後、六國の宰相となり秦王をして畏怖せしむ。
- 一二 一の沙門石淵の勤操大徳。*古記に曰く、三論宗の道慈律師在唐の日、善無畏の門人に從つて求聞持法を受け、歸朝の後善議に授け、善議、勤操に授け、勤操、大師に授く、と。
- 一三 其の經虛空藏菩薩求聞持法經一卷、唐善無畏三藏の翻譯なり。*此の法は能く諸願を満足せしめ、特に記憶力を増進せしむるの利益ありと云ふ。
- 一四 飛燄を鑽燧に望む勤めて精進し、少時も息はずに道を求むるなり。*太古には木を鑽みて火を發せしむ、若し少時も息はば火を得ざるに喩ふ。
- 一五 谷響を惜まず修行して感應の虚しからざるに喩ふ。
- 一六 明星虛空藏菩薩の應化なり。來影來臨し影向せしを云ふ。
- 一七 朝市朝廷と市場。*名を争ふものは朝廷に於てし、利を争ふものは市場に於てす。

- 一八 巖藪山やおどろ。澤の水なきを藪と云ふ。
- 一九 輕肥輕き衣、肥えたる馬。流水車乘を云ふ。
- 二〇 電幻の歎電の如く幻の如く無常迅速なるを歎くこと。
- 二一 支離支離疎、不具者にして極めて醜き人の名。莊子に見ゆ。
- 二二 懸鶉貧人の衣なり。懸結して鶉の如くなるを云ふ。
- 二三 因果の哀休まず醜者貧者を見て、その前世の業因の不善なりしより得たる果報なることを哀しむなり。
- 二四 誰か能く風を係がん風を繋ぎ留め得ざるが如く、誰か我が出家の志を思ひ止めしむることを得んや、との意。
- 二五 一多の親識一人の親戚とは阿刀大足、多數の知人とは味酒の淨成、岡田の博士等を指す。
- 二六 飛沈性異なり魚は水に沈み、鳥は雲に飛びて其の性同じからず。
- 二七 釋佛敎、李道教、孔儒敎。
- 二八 表甥母方の甥を云ふ。
- 二九 鷹鷹狩り。犬獵をなすこと。
- 三〇 博戲博奕等の遊び。
- 三一 彼此の兩事親戚の出家を止むると外甥の行樂遊俠なるとの二事。
- 三二 延曆十六年大師時に二十四歳。臘月十二月。

龜毛先生論

一 九經、易經、書經、詩經、周禮、儀禮、禮記、春秋左氏傳、公羊傳、穀梁傳なり。三史、史記、漢書、漢記なり。

二 三墳、伏犧、神農、黃帝の書を云ふ、墳は大道の意なり。八索、八卦の說なり。卦によりて其の義を索むれば八索と云ふ。

三 三寸、舌。

四 蘇秦、蘇秦は東周洛陽の人、鬼谷先生に學びて出遊すること數年、困窮して歸る。兄弟嫂妹等皆笑つて曰ふ、周人は産業に勵み商工に力む、然るに本を捨てて口舌を事とす、困窮するも亦た宜ならずや、と。蘇秦之を聞き、恥ぢて室を出でず。後に合縱の策を立て、六國に宰相として北の方趙王を訪ふ、途すがら故郷洛陽を過ぐるにその勢力王者の如し。時に蘇秦の兄弟嫂妹畏れて仰ぎ見る者なし。蘇秦笑つて嫂に謂ふ、何ぞ前には倨りて後には恭しきや、と。嫂、地に伏して謝して曰ふ、季子の位高く金多きを以てなり、と。蘇秦喟然として歎じて曰ふ、一人の身なれども、富貴なる時は親戚も畏れ貧賤なる時は輕んじ易る、況や衆人をや。且つ我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば豈六國の相印を帯びんや、と。是に於て千金を散じて宗族朋友に賜ふ。

五 晏平、晏平仲嬰は萊の夷維の人なり、齊の靈公莊公景公に事へて節儉力行を以て齊に重んぜ

られたる賢臣。

六 張儀、蘇秦と共に鬼谷子の門に學び、辯舌を以て聞ゆ。張儀嘗て楚の相に従つて飲む、楚相璧を亡ふ、門下張儀の貧にして行なきを以て、相君の璧を盜めるならんとして答うたる、事數百なりしも服せずして釋さる。妻難じて曰く、子書を讀みて遊説することなくんば何ぞ此の辱めを得んや、と。張儀曰く、我が舌尙ありや否や、と。妻笑つて曰く、舌はあり、と。儀曰く、舌あらば即ち足る、と。後に秦の相となりて連衡の謀を爲す。

七 郭象、郭象字は子玄、少にして才理あり、老莊を好んで能く清言す、時に懸河の辯と稱せらる。後に司徒の椽に辟され、稍、黃門侍郎に至る。東海王越、引いて太傅主簿と爲し甚だ親委せらる。碑論十二篇の著あり。

八 者宿、者は六十歳、宿は久なり。德行や學問の勝れた老人。

九 王豹、王豹の巧なりし人。*文選陳琳の書に曰く、「蓋し聞く、高唐を過ぐる者は王豹の謳を効ひ、睢渙に遊ぶ者は藻績の綵を學ぶ」と。大師は是の文に依る。然るに李善の註に曰く、「孟子に、淳于髡が、昔は王豹淇に處て河西善く謳ひ、蘇駒高唐に處て齊右善く歌ふ、と云へり、云云」。按ずるに陳琳の譜記の失か。

一〇 縦之、文翁字は縦之、廬江舒城の人なり。蜀郡の太守となり、巴蜀の地の僻陋にして蠻夷の風あるを見て意を教育に用ひ、大いに其の地の學藝を盛ならしめし人なり。卒するに及んで蜀人祠堂を立て、歲時に祭祀すること今に至りて絶えず。巴蜀の文雅を好むこと文翁の化な

- 二 橘柚陽に徘徊りぬれば云云。橘は小、柚は大、水は北を陽とす。橘の淮南に生ずるは則ち橘なれども、之を淮北に移さば則ち枳となりて、葉は似たりと雖も其の實の味は同じからず。
- 三 悉しきう愚。
- 三 物に體し情に縁る。物に體して賦をつくり、情によりて詩をつくるなり。
- 四 藻を摛ぶ。文を發す。藻は水草の文あるもの、故に文章を云ふ。
- 五 韋昭の篇。韋曜字は弘嗣、吳郡の人なり、本名は昭、晉の武帝の父司馬昭の名を避けて之を改む。太子和の命を受けて博奕論を作る。
- 六 元淑。趙壹字は元淑、漢陽西縣の人なり。體貌魁梧、才を恃んで倨傲なる爲に郷黨に擯せられ、幾んど死に至らんとす。友人救ひて免るゝことを得たり、乃ち世を刺り邪を疾むの賦を作つて以てその怨憤を舒ぶ。
- 七 細素。書籍のこと。細はあさぎ色の書帙を云ひ、素は白色のかしら縑を云ふ。
- 八 圓覆。天。
- 九 方載。地。
- 三 喟焉。長大息するさま。
- 三 颯然。大いに笑ふさま。
- 三 微管、拙蠡。何れも、自分の識見を謙遜して云ふ。蠡は瓠瓢なり。〔東方朔〕管を以て天

を窺ひ、瓢を以て海を測る云云。

- 三 北海の湛智。鄭玄の故事。〔後漢書〕鄭玄は北海の人なり、遊學すること十餘年にして歸る。黨の事起るに及んで門を杜ぢて出でず、弟子の遠方より來るもの數千人なりしと云ふ。
- 四 痾を除く。陳琳の故事。〔典略〕陳琳文を草して魏の武帝に呈す、帝先より頭風を病む、是の日疾發して臥す。琳の文を讀み翕然として起きて曰く、此の書我が病を愈すこと數々なり、と。厚く賜へり。
- 三 將を殺す。魯仲連の故事。〔史記〕齊の將田單、聊城を攻むるに歳餘にして降らず、魯連書を爲りて矢に結び、之を城中に射たり。燕將此の書を見て泣く事三日、自ら決すること能はず。退きて誅せらるゝと降つて辱めらるゝとを欲せずして遂に自殺せり。
- 六 悻悻。言はんとして言ひ得ざるさま。
- 七 推揚。揚げて之を引き其の趣を述ぶるなり。
- 六 孰れか三端を扣かん。自分は一隅を擧ぐるのみにて他の三隅は他の扣くに任すとの意。端は隅に同じ。
- 元 清濁剖判して。世界の始め混沌たる時より天地の開闢して後。
- 三 最靈。人類なり。
- 三 權輿。始なり。
- 三 二儀。天地陰陽を云ふ。

三 優華の如しうとんけ優曇華の稀なるに喩ふ。優曇 Udmbaraは梵語、譯して靈瑞華と云ふ、三千年に一たび現る。「法華文句」

四 蠢癡蠢愚者。

五 鄧幹の若し數多きを云ふ。〔列異記〕昔神人あり、姓は鄧、名は禹、字は誇步、神力あり。身長一千七百丈、手に桑の杖を執り日と競ひ走り、渴して死す。棄つる所の鞭策等皆林木と作る、其の姓鄧なるを以て鄧林と號す。廣き數十里なりと云ふ。

六 鱗角鱗麒麟には唯一角あるのみ、賢善の甚だ稀有なるに喩ふ。

七 星の如く箕星は風を好み畢星は雨を好むが如く、人の好む所各異なるを云ふ。

八 面に疑たり人の面の各異なるが如く、人の心の異なるを云ふ。

歸 指 教 三

九 玉石云云玉と石とは似たれども類を異にするが如く、人を論ずるにも九等の差ありとの意。

十 卅里を隔つ楊脩の故事。〔世說新語〕魏武帝嘗て曹娥の碑の下を過ぐ。碑の背上に題して黃絹、幼婦、外孫、蓋白の八字あり。楊脩之を見て直ちに黃絹は色系、幼婦は少女、外孫は女子、蓋白は受辛にして即ち、絕妙好辭の隱語なりと解す。帝は行く事卅里にして始めて之を解することを得たり。乃ち歎じて曰く、我が才の卿に及ばざること乃ち卅里なり、と。

十一 鮑の塵云云鮑魚の店には鮑魚を去ると雖も其の臭氣尙ほ存するを云ふ。

十二 頭蝨と與んじて以て性を陶き云云頭に處る蝨は其の色自ら黒く、晉人は常に棗を食ふ故に其の齒黃なりと。習ひ性となるの意なり。

十三 視肉の譏禽獸は肉を視てたゞ食ふことを知るのみ、人として學ばざれば禽獸に異らず。

十四 一涯一生涯。

十五 戴盆の謂盆を戴けば天を望むこと能はず。今は愚者を云ふ。

十六 楚璞和氏、璞を楚山の中に得て厲王に獻ず、厲王玉人をして之を相せしむ。玉人の曰く、石なり、と。王、和を以て誑けりと爲し其の左足を削る。厲王薨じて武王位に即く、和また璞を奉りて其の右足を削る。武王薨じて文王位に即く、また璞を獻ず、文王玉人をして其の璞を理かしむるに寶を得たり、遂に名けて和氏の璧と云ふ。〔韓非子〕

十七 蜀錦蜀都にて織る錦。之を江水に濯ぎて次第にその文彩明かとなるなり。

十八 戴淵〔世說〕戴淵は少頃遊俠にして江淮の地に商旅を攻掠せり。或る時陸機將軍の都に還るに輜重甚だ盛なり。淵は少年等を指揮して之を奪はしむ。機は淵の指揮の鮮かなるを見て、淵に對ひ何故に其の才を以て劫盜をなすかと問ふ。淵泣いて劍を投げ機に歸伏す。後に機の薦めにより征西將軍となれりと云ふ。

十九 周處〔世說〕周處は義興の人、少頃兇強俠氣にして郷人に患へらる。又義興の水中には蛟住み、山中に白額の虎あり、義興の人、蛟と虎と周處とを呼んで三横と爲す。或る人處に説いて言ふ、虎と蛟とを殺さば二横除かれ唯だ一を餘すのみなり、と。處は直ちに行いて虎を刺し、水に入つて蛟を殺す。蛟は或は浮び或は沈み行くこと數十里、三日三夜を經。郷里、

處も亦已に死せりとして相慶す。處は歸來して自ら人の患となれる事を知り、遂に吳に入り清河に見えて修養し、終に忠臣孝子の譽を流せり。

五〇 照車の器二魏の梁王に徑一寸の珠にして車の前後各十二乗を照すもの十枚ありしと云ふ。

五一 穿犀の才二犀象の如き堅き革をも斷つ利刀の如き英才。

五二 夏股傾滅し、周漢興隆す二夏の桀王、徳を努めずして百姓を武傷し、百姓堪へず。湯王徳を修め諸侯皆湯に歸す。湯遂に兵を率ゐて桀を伐つ。桀鳴條に走りて遂に放たれて死す。

五三 殷の紂王、酒を好んで淫樂なり。妲姫を愛して百姓怨む、諸侯畔むく者あり。周の西伯、徳を修め善を行ふ、諸侯西伯に歸す。西伯卒して武王遂に諸侯を率ゐて紂を伐つ。紂が兵敗れて死す。周室之より興隆す。

漢の高祖は沛の人なり、姓は劉氏字は季、秦の二世元年に沛公となる。漢の元年沛公の兵遂に諸侯に先つて覇上に至る。秦王の子嬰、素車白馬にして頸に係くるに組を以てす。皇帝の璽符節を封じて軹道の傍に降る。遂に西の方、咸陽に入る。沛公を立てて漢王と爲し、五年に皇帝の位に即く。

五四 伶倫二黃帝の臣にして耳の特に聴かりし人。

五五 離朱二眼の極めて明かなりし人。百歩の外にある針の先を明察せりと云ふ。

五六 告面の孝二外出に際しては親に告げ、歸宅すれば面接する程の孝行。

五七 弋獵二鳥や獸を狩ること。

五八 弋獵二鳥や獸を狩ること。

五九 弋獵二鳥や獸を狩ること。

六〇 弋獵二鳥や獸を狩ること。

六一 山垆二野山。垆は遠野なり。

六二 州吁二衛の莊公の子、長じて兵を好み驕奢なり、後に兄桓公を殺して自立し、衛の君となる。

六三 嗣宗二阮籍字は嗣宗、容貌瓌傑にして志氣宏放なり、性となり至孝なりしも母の臨終に人と圍碁して止めず、遂に勝負を決せりと云ふ。

六四 水鏡氷霜の行二明かなること水鏡の如く、清きこと氷霜の如き行爲。

六五 谿壑貪婪の情二谿谷の水を容るゝ如く限りなく貪り婪むる心。

六六 愛子の想二肉に對して、是れ我が前世の父母妻子兄弟の肉なりと觀じて食はざるを云ふ。〔梵網經〕

六七 己害の願二放生の業を行すべきを説いて、六道の衆生は皆我が父母なり、之を殺すは我が父母を殺すなり、自己の故身を殺すなり、肉を食ふは自己の故身の肉を食ふが如し、と觀じて之を止むるなり。〔梵網經〕

六八 草葉の誠二飲酒を禁ずる誠。* 四分律等に、佛弟子は草頭を潤す一滴の酒をも用ゐるを禁ず。

六九 麻子が責二未詳。

七〇 蓬頭の婢妾二頭髮の亂れたる賤女。

七一 登徒子二楚の襄王の大夫、醜婦を妻として而も五子を擧げたるを以て好色漢とさるゝ人。〔宋

玉好色賦

六 術婆伽ニ漁夫の名なり。美しき王女、拘牟頭くむづに戀す。その母、王女に肥えたる鳥魚の肉を遺り、惑を請ひて遂に天祠の中に密會せしめんとす。天神、小人をして王女を辱しめしむるを厭ひ、術婆伽をして睡つて覺めざらしむ。王女既に天祠に入つて其の睡りの甚だ深きを見、瓔珞を遺して去る。術婆伽後に覺めて王女の來りしことを知り、情願遂げざることを憂恨して悶死す。〔智度論〕

六 春馬、夏犬の迷ニ性欲の迷を云ふ。*〔婆沙論〕馬は春時に慾心盛なり、牛は夏、犬は秋、熊は冬に盛なり、と。夏犬は未詳。

七 老猿、毒蛇の觀ニ女人に對する愛著を除去する觀想。*老猿は釋尊が其の弟子難陀を教化せられし時、難陀の妻を以て老猿に比せし故事。*蛇に三害あり、見て人を害し、觸れて人を害し、齧かみて人を害す。僧侶は女人を見て情欲を起し、觸れて中罪を起し、交會して重罪を犯す。故に害を毒蛇に譬ふ。〔法苑珠林〕

七 首を懸け股を刺すの勤ニ孫敬蘇秦の故事。序註一一參照。

七 觴を提げ蟹を捕るの行ニ酒肴に耽溺する行爲。*東晉の畢卓は常に酒を飲んで職を廢す。卓嘗て人に謂つて曰く、酒を數百石の船に満たして四時の甘味を兩頭に置き、右手に酒杯を持し左手に蟹螯かにを持して酒船の中に拍浮せば、便ち一生を畢るに足らん、と。

七 數十の熠燿囊の中に聚めずニ熠燿は螢火を指す。車胤の故事。

七 青鳧ニ錢を云ふ。*〔搜神記〕南方に蟲あり、其の形蟬に似て大なり、其の子は草葉に著く、蠶種の如し。若し人其の子を得て歸れば母蟲直ちに飛來す。或る人子蟲を採つて貫やじに塗り、母蟲を錢に塗つて物を買ふに、錢を用ゐれば後に自ら貫に還ると云ふ。

七 杖の頭に懸けたりニ阮脩字は宣子、易と老子の教とを好み善く清言す。性簡素にして世俗の事を修めず。俗人を避け、俗人に遇はば捨て去る。歩行の際には常に百錢を杖頭に懸け、酒店に入つて酣飲かんいんす。今は酒飲の惡癖を云ふなり。

七 一稱の因遂に菩提となるニ法華經に云ふ、若し人、散亂心もて塔廟の中に入るも、南無佛と一稱すれば皆已に佛道を成ず、と。

七 四銖の果終に聖位に登るニ貧者の一燈を云ふ。*〔阿闍世王受記經〕阿闍世王は百斛の麻油を以て佛に燈明を供養せんとして祇園精舍に至る。その時に常に佛を供養せんと願ひつゝも貧窮の爲に果さざりし一老母あり、之を見て感激し、乞を行じて乃ち兩錢を得。之によつて油を求むるに、店主その至誠に感じて更に油を増して與へしかば、以て佛に供養す。佛、遂に此の老母を記莚して、後に須彌燈光如來となるべしと説きたまふ。

註

七 庭を過ぐニ師の側に侍るなり。

七 提撕ニ後進の人を教へ導くこと。古への先生は手を以て弟子の耳を提撕して親しく教訓せしなり。

八 猶子ニ甥、養子。*〔禮記〕兄弟の子は猶ほ己の子の如し、と。

- 八二 比兒二己の兒に比するもの、兄弟の兒なり。
- 八三 十韻の銘二崔子玉の座右銘を指す。その初に曰ふ、「人の短を道ふこと無かれ、己が長を説くこと無かれ」と。
- 八三 三緘の誠二孔子周に行き太祖后稷の廟に入るに、右階の前に三重に口を緘する金像あり。その背の銘に曰ふ、古の言を慎む人なり、之を戒めよ。多言することなかれ、多言は敗多し。多事なることなかれ多事は患多し。安樂にして必ず誠めよ。悔ゆる所を行ふことなかれ。謂ふなかれ何ぞ傷らんと、其の禍將に長ぜんとす。謂ふなかれ何の害あらんと、其の禍將に大ならんとす。謂ふなかれ聞えずと、神將に人を伺ふ、と。
- 八四 讒言の骨金を鑠すこと二前漢書の鄒陽の上書に曰く、衆口金を鑠し積毀骨を銷す、と。其の意味は、眞金も毀られて衆共に之を疑へば、眞金を證する爲に數々燒鍊せられて以て銷鑠するに至る、讒佞の人其の詐巧を肆にして骨肉兄弟の間をも離間して遂に覺知せざらしむるなり。
- 八五 樞機二周易に曰く、言行は君子の樞機なり、と。
- 八六 禹二禹は堯帝の時に司空となり、九州の土地、山川、草木、禽獸に命名せり。
- 八七 隸二隸首は黃帝の吏なり、算數を作る。
- 八八 四運二四時。
- 八九 記二禮記。



- 九〇 琴瑟御せず二憂へて樂がくに在らず。 咲むこと矧しに至らず二笑つても齒もとの見える程笑はない。
- 九一 酒變二に至らず二憂の爲に、酒を用ゐても貌を變へる程は飲まぬこと。
- 九二 春二くに相せず二春二く時に杵を送るに歌聲を出さざるを云ふ、禮なり。
- 九三 傍親二或は云ふ、傍觀の寫誤かと。
- 九四 鸚猩二鸚鵡や猩猩。*禮記に、鸚鵡能く言へども飛鳥を離れず、猩猩能く言へども禽獸を離れず、と。
- 九五 血を流し二高柴は魯の孝子なり。父の死してより泣いて血涙を流すこと三年、未だ嘗て齒を現はして笑はざりしと云ふ。〔孝子傳〕
- 九六 瓮を出す二郭巨は家貧しうして老母を養へり。子生れて三年、老母常に己の食を減じて孫に與ふ。巨、妻に謂つて曰く、子は復た得べきも母は再び得べからず。如かじ子を埋めんには、と。妻も敢て反かず。巨、穴を掘ること二尺餘にして忽に黄金の充てる釜を得たり。其の上二に銘ありて曰ふ、天、孝子郭巨に賜ふ、官も奪ふことを得ざれ、人も取ることを得ざれ、と。〔孝子傳〕
- 九七 筭を抽んづ二孟宗は母に事へて至孝なり。母、筭を好む。孟宗、冬月に竹林に入つて哀歎するや筭之が爲に出づ。孝心の天地を感ぜしめたるものなりと云ふ。〔孝子傳〕
- 九八 魚を躍らしむ二晉の王祥は孝子なり。繼母の不慈なるに對して祥愈々恭謹なり。母冬日に生

魚を欲す。祥乃ち爲に氷を削いて魚を求めんとして衣を脱するや、氷忽に自ら解けて二鯉躍り出づ。里人驚きて曰ふ、孝感の致す所なりと。〔晉書〕

九 孟丁 孟宗と丁蘭。* 孟宗は前註にあり。* 丁蘭は少くして父母を喪ふ。乃ち木像を刻んで之に事ふること生ける人に事ふるが如し。或る時隣家の張叔の妻、家具を借らんとして来る。蘭の妻跪いて木像に報じたるに木像悦ばず、乃ち貸す事を断れり。張叔乃ち泥酔して來り、木像を罵り杖にて其の頭を打つ。蘭、家に歸りて木像の憐ばざる容貌を見、妻に尋ねてその事實を聞き、直ちに劍を揮つて張叔を殺す。官吏に捕へられて行くに方り木像に辭す。木像は蘭を見て涙を垂る。郡縣其の至孝の神明に通ずることを嘉して、其の形像を靈臺に圖したりと云ふ。〔逸人傳〕

一〇〇 檻を折り 魯の朱雲は容貌甚だ壯にして勇力を以て聞ゆ、不羈にして大節を好む。嘗て槐里の令となる。漢の成帝の時、上書して帝に謁し、帝師張禹をその面前に罵倒す。帝怒りて雲を死刑に處せんとす。御史雲を將ゐて降る。雲殿檻を攀ぢて折り、呼ばつて曰く、臣は下龍逢、比干に従つて地下に遊ぶことを得ば足りなん、未だ聖朝の如何を知らざるのみ、と。左將軍辛慶忌、職を辭し頭を叩き血を流して雲を赦さんことを請ふ。帝の意解く。帝後に折れたる檻を易へしめず、以て直臣を旌はさんとす。雲是れより後に復た仕へず。〔前漢書〕

一〇一 疎を壊り 師經は樂官にして琴を鼓す。魏の文侯起つて舞ひ賦して曰ふ、我が言をして敢て違ふこと無からしめん、と。經、琴を執つて侯を撞くに外れて窓に當り窓を壊す。文侯怒り

て經の罪を左右に問ふ。左右曰く、罪當に烹るべしと。經捉へられて堂を降ること一等、死に臨んで一言せんことを請ひ許さる。乃ち曰く、堯舜の君となるや唯だ言ひて人の違はざらんことを恐る、桀紂の君となるや唯だ言ひて人の之を拒まんことを恐る、臣はただ吾が桀紂を撞くのみ、我君を撞くに非ざるなり、と。文侯其の過を悟りて之を釋し、琴を壁に懸けて疎を補はず、以て其の直言を表せりと云ふ。〔說苑〕

一〇二 肝を出し 狄人衛の懿公を殺し、盡くその肉を食ひて、獨りその肝を捨つ。弘演使して還り之を見て哭し、自己の肝を出して懿公の肝を以て自の胸中に入る。齊の桓公之を聞いて曰く、弘演は忠と謂つべし、と。〔韓詩外傳〕

一〇三 心を割く 殷の紂王、淫亂甚しくして諫を用ゐず。微子等數々諫むれども聽かず、乃ち太師少師と謀つて遂に去る。比干の曰く、人臣たる者は死を以て諫めざるべからず、と。乃ち強いて諫む。紂怒りて曰ふ、吾聞く、聖人の心に七竅あり、と。比干の胸を割きて其の心を觀たりと云ふ。〔史記〕

一〇四 比弘 比干と弘演。前註參照。

一〇五 東海西河 包咸と子夏とを指す、共に論講に巧なる者なり。* 包咸字は子良、魯詩論語の註に明かなり。東海に精舍を立てて講授せり。* 子夏字は商。子游と共に文學に秀づと稱せらる。孔子の没後西河に居りて魏の文侯の師となれり。

一〇六 南楚西蜀 南楚の人、屈原を指す。西蜀の人、楊雄や相等を指す。何れも文學を以て聞え

たる人々なり。

一〇七 鷗翔虎臥の字、鷗の翔り、虎の臥するが如き勢ある筆跡。

一〇八 鍾張王歐、鍾繇、張芝、王羲之、王獻之、歐陽詢、歐陽通。何れも書家にして著名なり。

* 魏の鍾繇字は元常、潁川長社の人なり。官、太傅に至る。正隸、行草、八分を善くし、特に正隸に巧なりと稱せらる。* 東漢の張芝字は伯英、熒煌酒泉の人なり、官、太尉に至る。池に臨んで書を學び、池水盡く黒しと云ふ。其の筆力飛動して神變極り無し。張芝は草書の祖なり。

* 王羲之は晉の人、字は逸少。官、右軍將軍、會稽の内史に至る。辯論を善くし、直言を以て稱せらる。篆、隸、行、草、飛白に善し。特に隸、草は古今の妙と稱せらる。子七人あり、名ある者五人、中に第七子王獻之特に著はる。羲獻父子は世に二王として並び稱せらる。* 唐の歐陽詢字は信本、潭州臨湘の人なり。隋に仕へて太常博士と爲り、後に唐の高祖に仕へ給事中に擢でらる。初め王羲之が書を學び、後に險勁之に過ぎたり、因て自ら其の體に名づく。尺牘の傳ふる所、人以て法と爲す。卒するとき年八十五。其の子歐陽通亦た父の書を學んで名あり。世に大小歐陽の體と號す。

一〇九 落烏哭猿の術、養由基の如き術。* 堯帝の世に十個の太陽並び出でて大に早せしとき、羿をして之を射落さしめ以て民の災を除きしと云ふ。烏は日の異名なり、太陽の中に三趾の烏ありと云ふ傳説に依る。又種々の惡獸の民を害するものあり、亦た羿をして悉く退治せしむ。

〔淮南子〕

* 楚王白猿を飼ふ。王自ら之を射るに矢を取りて戲る。養由基をして射しむ、養由基をつがへて未だ發たざるに白猿柱を擁いて號叫すと云ふ。〔淮南子〕

一一〇 羿養更蒲、養由基、更羸、蒲且子。

* 更羸は魏王と共に處るに雁あり東方より來る。羸矢をつがへずして弓を鳴らすに雁落つ。王怪しんで問ふ。羸曰く、雁に傷あればなり、と。王問ふ、何を以て之を知るや、と。羸の曰く、此の雁飛ぶこと徐く鳴くこと悲し、飛ぶこと徐きは故き傷の痛むなり、鳴くこと悲しきは久しく群を離れたるなり。故き傷の尙ほ痛みてその驚心今に去らざるを以て弦の音を聞きて驚き落ちたるなり、と。〔戰國策〕

* 蒲且子は楚人なり、弋射を善くす。嘗て庭前に雙鳧ありて飛び過ぐるを見て、繖をもて射て一鳧を落すに、他の一鳧は弋に羅らずと雖も繖に隨つて落ちたりと云ふ。〔汲冢書淮南子註〕

一二 張良、字は子房、其の先、韓人なり。嘗て下邳の圯上に遊び、一老父に遇ひて遂に太公の兵法の書を得たり。漢の高祖を輔けて功あり。帝嘗て曰ふ、籌策を帷帳の中に運らし勝を千里の外に決するは子房の功なり、と。後に功を以て齊の三萬戸に封ぜられんとせしが、良は之を辭して曰ふ、良の始めて上と會ひし地、留に封ぜらるれば足れり、敢て三萬戸に當らじ、と。遂に留侯に封ぜらる。〔史記〕

二三 孫子武は齊の人なり。嘗て兵法を以て吳王闔廬に見ゆ。王曰く、我れ子の兵法十三篇を盡く見たり、試みに少しく兵を勸せ、と。孫子諾す。王又曰ふ、試みに婦人を以てすべきやと。孫子諾す。乃ち宮中の美人百八十人を出す。孫子之を二隊に分ち、王の寵姫二人を以て各一隊長と爲して皆戟を持たしむ。孫子令して鼓を打つに婦人大いに笑ひて令に従はず。孫子曰ふ、約束明かならず申令熟せざるは將軍の罪なりと。復た令して鼓するに婦人復た大いに笑ふ。孫子曰ふ、約束明かならず申令熟せざるは將の罪なりと雖も、既に明かに知りて法の如くせざるは吏士の罪なりと。乃ち左右の隊長二人を斬り、次の者を以て隊長たらしめ復た鼓す。婦人左右前後に跪起して皆な規矩繩墨に中り、敢て聲を發する者なし。孫子使を使はして王に報じて曰ふ、兵既に整へり、王試みに下りて觀よ、唯だ王の欲するが如く水火の中をも行かん、と。是より吳王は孫子の能く兵を用ゐるを知りて、將軍と爲して強楚を破り齊晉を威し名を諸侯に顯はす。〔史記〕

二三 三略の術、黃石公の作る所。黃石公は神人なり。三略あり、上略は禮賞を設け姦雄を別ち成敗を著はす、中略は德行を差さび權變を審かにす、下略は道德を陳べ安危を察し賢を賊するの咎を明かにするなり。〔三略〕

二四 陶朱は越王勾踐に仕へし范蠡なりといふ。范蠡身を苦しめ力を戮せて勾踐の爲に深謀すること二十餘年、竟に吳を滅して會稽の恥を雪ぐ。范蠡は上將軍と稱せらる。自ら其の私の徒屬と海路齊に至り、名を變じて鴟夷子皮しひと謂ひて海畔に耕す。父子俱に身を苦しめ力を

戮せて、幾ばくもなくして數千萬の財産を成す。齊人彼れの賢なるを聞いて以て宰相と爲す。范蠡歎じて謂ふ、家に居りては則ち千金を致し、官に居りては則ち卿相に至る。庶民としての極なり。久しく尊名を受くるは不祥なりと。乃ち宰相を辭し、其の財を悉く散じて知友郷黨に分ち、密かに去りて陶に止り、自ら陶朱公と謂ふ。また父子よく耕畜して、幾ばくもなく復た巨萬の富を蓄ふと云ふ。〔史記〕

二五 猗頓は魯の窮士なり。陶朱公の富めるを聞いて往いて術を問ふ。朱公之に告げて曰く、速かに富まんとすれば五牂を飼ふべしと。是より河西に行いて大いに牛羊を猗氏の南に畜す。十年の間に畜繁殖して計ふべからず。財産王侯の如し、名を天下に馳す。〔孔叢子〕

二六 四知は陽震の故事。*陽震字は伯起、弘農華陰の人なり。大將軍鄧騭其の賢を聞いて茂才に舉す。四遷して東萊の太守となる。都に赴くに當つて道に昌邑を過ぐ。昌邑の令、王密はもと陽震の舉するところなり。王密夜に至りて金十斤を懷にして密かに震に賂る。震曰く、故人君を知るに、君故人を知らざるは何ぞや、と。密曰く、暮夜なれば知る者なし、と。震曰く、天知る、神知る、我れ知る、子知る。何ぞ知るもの無しと謂ふやと。密愧ぢて出づ。〔後漢書〕

二七 三黜は柳下惠は士師（獄刑官の長）となりて、三たび黜けらる。人問ふ、子尙未だ去るの意なきや、と。答へて曰く、道を直くして人に事ふれば、何くに往くとして三たび黜けられざらんや。道を枉げて人に事ふれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん、と。〔論語〕

二六 孟母 孟母少かりし時、隣家にて猪を殺せるを見てその母に何の爲なりやを問ふ。母戯れに言ふ、汝に啖はしめんと欲するなり、と。已にして母その失言を悔いて曰く、吾れ、是の子を懷妊せしより、席正しからずんば坐せず、割正しからずんば食はずして胎教せり。今、適に物知る頃となりて之を欺くは之に不信を教ふるなり、と。隣家の猪肉を買ひて以て食はしめ、欺かざることを明かにせりと云ふ。〔韓詩外傳〕

二九 孝威 孝威、魏の人なり。武安山に隠れて穴を鑿りて居と爲し、薬を探つて自ら業とす。建初中に州召せども官につかず。刺史部を行つて使を以て謁を致す。佟は病を載せて往いて謝す。刺史進物を執つて佟に見えて曰ふ、孝威身を居くことは是の如くにして任官せず、甚しく貧に苦しむこと如何と。佟答ふ、自分は幸に性命を保ちて終ることを得、神を存し和を養ふことを得。然るに明使君の如きは詔書を奉宣して夕まで庶事を惕むは反つて苦しからずやと。遂に去つて迹を隠して見えす。

三〇 伯夷 伯夷叔齊は孤竹の君の二子なり。父は弟なる叔齊を立てんとす。父卒して叔齊は兄伯夷に譲るに、伯夷は父の命なればとて受けずして遂に逃れ去る。叔齊亦た立つことを肯せずして逃れ去る。國人其の仲子を立つ。是に於て二人は周の西伯昌の善く老を養ふを聞き慕ひて赴く。至るに及んで西伯已に卒し、子の武王即位して木主を載せて號して文王と爲し東方殷の紂王を伐たんとす。伯夷叔齊、武王の馬を叩いて諫めていふ、父死して葬らず爰に干戈に及ぶ、孝と謂ふべしや、臣にして君を弑す、仁と謂ふべしやと。左右之を殺さんとす。

太公曰く、義人なりと。扶けて去らしむ。武王已に殷の亂を平げて天下周を宗とす。伯夷叔齊之を恥ぢて周の粟を食ふを肯しとせずして首陽山に隠れ、薇を採りて食ひ遂に餓死せり。〔漢書〕

三一 許由 許由字は武仲、陽城槐里の人なり。人となり正を好み邪を惡む。帝堯之を聞いて天下を譲らんとす。由、之を遁れて箕山の下に隠る。堯また召して九州の長と爲さんとす。由之を聞いて耳を潁水の濱に洗へり。時に巢父なるものあり、犢を牽いて之に水を飲ませんとして來り、之を見て故を問ふ。由答ふ、堯我れを召して九州の長と爲さんとす、我れその聲を聞くを欲せず、是の故に耳を洗ふなり、と。巢父曰く、汝、眞に俗事を厭はば高巖深谷に處るべし。然るに故らに浮游して人をして聞かしめ、以て名譽を求めんとするか。是の如き水を飲ましむれば犢の口を汚す、と。乃ち犢を上流に牽いて飲ましむ。〔皇甫謐、高士傳〕

三三 扁鵲 扁鵲と華他。*扁鵲は勃海郡の人にして古の名醫なり。曾て魯の公扈と趙の齊嬰との二人疾あり、同じく鵲に請うて治を求む。鵲之を治し已る。鵲の曰く、外より干す所の疾は治し了れり、然も未だ生れ乍らにして體と俱に長ぜる疾あり、今汝の爲に之を治せんとす、如何、と。二人所以を問ふ。鵲答ふ、扈は謀ありて斷に乏しく、嬰は斷に富めるも慮に少し、其の心を入れ換ふれば偕に善からん、と。遂に二人に毒酒を與へて假死せしむること三日、胸を剖き心臓を採り出して之を置易へ、神藥を與へて蘇生せしむ。二人辭して扈は嬰の室に歸り、嬰は扈の室に歸る。妻子皆驚き、兩家の妻相與に訟へて辯を扁鵲に求む。扁鵲その由

を辯じて訟乃ち已む。〔列子〕

* 華他は沛國譙の人、亦た古の名醫なり。養性の術を曉り方薬に精し。若し疾あつて内に結し、針薬及ばざる時は先づ酒にて麻沸散を服せしめ、酔ひて覺なき時に腹背を剖きて悪しきものを抜き去る。若し疾胃腸に在る時は胃腸を斷ち截り之を洗ひ、疾穢を去つて後之を縫合し、神膏を以て之を著くるに四五日にして創癒え一月にして平復す。〔後漢書〕

二三 匠輪匠石と公輸般。* 莊子が葬を送つて惠子の墓を過ぎ、從者に謂ふ、郢人聖もて鼻端を漫漫すこと蠅翼の如くに薄し、匠石をして之を斲らしむるに、匠石斧を運らしめて風を成し聖を盡し去つて鼻端を傷けざりし、と。宋元君之を聞いて匠石を召して自の爲に之を試みしめんとす。匠石之を辭していふ、惠子の如きは臣をして之を爲さしむるの質ありしも、惠子の死後吾れの以て質とすべき者なし、と。

* 公輸般は魯班の號なり、或は云ふ子なりと。淮南子に曰く、魯般墨子、木を以て鳶をつくりて飛ばすに三日まで集まらず。是の如く巧に過ぎたる者には工を爲さしむべからざるなり。故に高くして及ぶべからざるものは以て人の量と爲すべからず。行つて及ぶべからざるものは以て國俗となすべからず、と。

二四 叔度黃憲字は叔度、汝南の人なり。世々貧賤にして父は牛醫たり。郭林宗少うして汝南に遊び先づ袁閔を過ぎれり。宿せずして退き、進んで往いて憲に従つて日を累ねて方に還る。或人故を問ふ。林宗の曰く、閔の人物は汎濫の水の如く、清けれども挹み易し、叔度の人物

は汪汪たる萬頃の陂つゝみの如く、之を澄ませども清まらず、濁せども濁らず量り知る可からず、と。〔後漢書〕

二五 此の庾嵩に比せん晉書に云ふ、庾の数字は子嵩。温嶠其の徳行を奏す。子嵩は更に温嶠を器として曰く、森森たること千丈の松の如く、礪石として節多しと雖も、大廈に用ゐれば棟梁の用あらんと。* 或人曰く、「此の温嶠に比せん」といふべきか、と。又曰く、「此の庾嵩の言に比せん」といふなり、と。

二六 縹囊青白色の袋、書帙を云ふ。黄卷書籍。

二七 吐握成王、伯禽を魯に封ず。周公誠めて曰く、往け、子、魯國を以て土に驕ることなかれ、吾れは文王の子、武王の弟、成王の叔父なり。又天下に相たり。吾れ天下に於て亦た輕からず。然れども一たび沐するに三たび髪を握り、一たび飯するに三たび哺を吐き、猶天下の士を失はんことを恐る、と。

二八 青簡、素鈔青簡は竹簡なり、古へ紙なく用ゐて以て書とす。素は絹、鈔は鉛筆、書を理むる所以なり。

二九 五鹿の角を摧く漢書に曰く、五鹿充宗は、宣帝の時より貴幸せられ、易を修めて梁丘氏の説を善しとす。元帝諸易の異同を考へんと欲し、諸の易家をして充宗と論ぜしむ。充宗、貴に乗じて辯口なり。諸儒疾と稱して會せず。朱雲薦められて堂に登り、論難して五鹿君を刺り距ぐ。諸儒爲に語りていふ、「五鹿嶽嶽たり朱雲其の角を折る」と。

一三〇 五十の筵を重ね、後漢書に曰く、戴憑字は次中、年十六にして明經に擧す。後に虎賁中郎將に任ぜられ侍中を兼ね。元旦の朝賀に百僚悉く會す。帝群臣の能く經を説く者をして更互に相難詰せしめ、義通ぜざる者あらば其の席を奪ひて通ずる者に重ねしむ。憑は遂に席を重ねること五十餘席なりしと謂ふ。京師のもの語つて曰ふ、「經を解いて窮まらざるは戴侍中なり」と。

一三一 孫馬、孫綽と司馬相如なり。* 孫綽字は興公、憑翊の太守、楚が子なり。博學にして文を善くす。嘗て天台山の賦を作りて辭致甚だ巧なり。初め之を友人范榮期に示して云ふ、卿試みに之を地に擲ちみよ。當に金玉の聲を作すべし、と。榮期曰く、恐らくは此の金石、宮商に中るにあらざるべし、と。然れども佳句に至る毎に輒ち言ふ、應に是れ我輩の語なるべし、と。〔晉書〕

* 司馬相如字は長卿、蜀郡成都の人なり。少き時より讀書を好み擊劍を學んで犬子と名づく。藺相如が人となり慕ひて名を相如と更む。蜀人、楊得意、拘監と爲つて上に侍す。武帝『子虚の賦』を讀みて之を善しとして曰く、朕獨り此の人と時を同じうするを得ざるや、と。得意對へて曰ふ、臣の邑人、司馬相如自ら此の賦を爲れりといふ、と。帝驚き乃ち召して相如に問ふ。相如曰く、是れあり、然れども此れ諸侯の事にして未だ觀るに足らざるものなり。請ふ、天子游獵の賦を爲らん、と。帝尙書に令して筆札を給せしむ。後に孝文園の令を拜す。病みて卒す。〔漢書〕

一三二 楊班、楊雄と班固。楊雄字は子雲、蜀郡成都の人なり。少くして學を好み、博覽にして見ざる所なし。嘗て辭賦を好む。是れより先、蜀に司馬相如あり、賦を作りて甚だ弘麗溫雅なり。雄、心に之を壯とし、賦を作る毎に之に擬して以て式となす。〔漢書〕

* 班固字は孟堅、年九歳にして能く文を屬し詩書を誦す。長ずるに及んで遂に博く載籍を貫く、九流百家の言、窮究せざる無し。學ぶ所常の師なし、章句を爲めず、大義を擧ぐるのみ。〔後漢書〕

一三三 離騷を奏す、淮南王、安、人となり書を好み琴を鼓し弋獵狗馬の馳騁を喜ばず。初め安入朝するや上(武帝)離騷傳を作らしむるに、且に詔を受けて食時に上れりといふ。〔漢書〕

一三四 鸚鵡を賦す、『鸚鵡賦』の序に曰く、時に黃祖の太子射、賓客を大いに會す。鸚鵡を獻ずる者あり。酒を衡が前に擧げて言はく、先生願はくば此の鳥の爲に賦せよ、四坐をして共に榮觀あらしむるも亦た可ならずや、と。衡因つて賦を作るに筆、停綴せず、文、點を加へず、と。

一三五 魏侯の輅、淮南子に曰く、段干木、祿を辭して家に處れり。魏の文侯其の閭を過ぎて軾す。其の僕曰く、君何すれぞ軾するや、と。文侯曰く、段干木あり、此の故に軾す、と。其の僕曰く、段干木は布衣の士なり。君其の閭に軾すること已に甚しからずや、と。文侯曰く、段干木は勢利に趨らず、君子の道を懷く。窮巷に隱處すれども聲千里に施す。寡人敢て軾すること勿らんや、段干木は徳に光れり、寡人は勢に光れり。段干木は義に富めり、寡人は財に富めり。勢は徳の貴きに若かず、財は義の高きに若かず。干木は己を以て寡人に易へしむと

雖も爲さじ、と。

一六 角を扣く。三齊略記に曰く、齊の桓公夜近舎に出づ。甯戚疾く其の牛の角を扣いて高歌して曰く、「南山研たり、白石爛たり。生れて堯と舜との禪に遭はず。短布、單衣にして適に軒に至れり。昏より牛に飲ひて夜半に至る。長夜曼曼たり、何れの時にか且けん」と。桓公召して與に語つて悦び、以て大夫と爲す。

一七 周王の輦。史記に曰く、太公望呂尙は東海の上の人なり。蓋し嘗て困窮して年老いたり、釣魚を以て周の西伯を好む。西伯將に出獵せんとして卜するに、曰く、「獲る所は龍にも非ず、麕にも非ず、虎にも非ず、黿にも非ず。獲る所は霸王の輔ならん」と。是に於て西伯獵し、果して太公に渭水の陽に遇ひぬ。與に語つて大いに喜んで曰く、「吾が先君太公より曰く、當に聖人あつて周に適くべし、周以て興らんと。眞に是れか。吾が太公、子を望めること久し」と。故に太公望と號す。載せて與に俱に歸り、立てて師と爲す。

一八 鋏を彈ず。史記に曰く、馮驩は孟嘗君の客を好むことを聞いて、履を躡んで見ゆ。孟嘗君傳舎に置くこと十日なり。驩其の劍を彈じて歌ひて曰く、「長鋏歸んなんや、食ふに魚なし」と。孟嘗君之を幸舎に遷す、食に魚あり。五日にして復た劍を彈じて歌ひて曰く、「長鋏歸んなんや、出づるに與なし」と。孟嘗君之を代舎に遷す、出入するに輿車に乗ず。五日して又劍を彈じて歌ひて曰く、「長鋏歸んなんや、以て家ををさむることなし」と。孟嘗君悦ばず。居ること期年にして馮驩言ふ所なし。

一九 台鼎。三公の位。

二〇 槐棘。周禮に曰く、左の九棘は孤卿大夫の位、群士其の後に在り、右の九棘は公侯伯子男の位、群吏其の後に在り、面の三槐は三公の位なりと。註に曰く、棘を植ゑて以て位と爲すことは其の赤心にして外に刺すに取れり。槐の言は懷なり、人を此に懷け來らしめて與に謀らんと欲するなり。

二一 青紫。卿大夫の服。

二二 干將。名劍の名なり。

二三 丹墀。尙書省。省舎の中を丹を以て地に漆するが故なり。

二四 牽牛。星の名。天河の傍にありて織女星と相隔つ。故に獨住といふ。

二五 七梅の歎。詩は召南、標有梅の篇なり。曰く、「標つる梅あり。其の實七つ。我れを求むる庶士、其の吉に迨ばんか」と。標梅は熟して落ちんとする梅の實なり、十個の實、已に三個落ちたるは嫁期の已に三分過ぎたるをいひ、樹上に尙ほ七個の實あるは嫁期尙ほ未だ全く盡きざるをいふ。謂はく女二十歳春盛んにして嫁せざれば夏に至りて衰ふるを歎く詩なり。

二六 書に二女の嬪。書は尙書堯典。堯の二女、娥皇女英を以て舜に嬪し以て其の法度ありて二女に接するを觀る。「孔傳」

二七 展季。柳下惠なり。柳下惠遠行して夜家に歸る。暮に逼りて廓門の外に止宿す。須臾にして一女子至る、便ち共に止宿す、時に天大いに寒し、柳下惠女子の凍死せんことを恐れて乃ち

懷の中に坐れて衣を以て之を覆ふ。曉に至るまで亂を爲さず。

一四 子登^一晉書に曰く、孫登字は公和、汲郡共の人なり。家屬なく、郡の北山に於て土窟を爲つて居り、夏は草を編んで裳と爲し、冬は髪を被つて自ら覆ふ。好んで易を讀み七弦琴を撫す、見る者皆之を親しみ樂しむ、性恚怒なし、遂に終る所を知らず。〔晉書〕

一五 行雨の蛾眉^一楚の襄王宋玉と雲夢の臺に遊んで高唐の觀を望む。其の上に獨り雲氣あり、峰として直ちに上り忽として容を改む。須臾の間に變化すること窮りなし。王は玉に問うて曰く、此れ何の氣ぞや、と。玉對へて曰く、所謂る朝雲といふものなり、と。王曰く、何をか朝雲と謂ふや、と。玉曰く、「昔先王嘗て高唐に遊びき。怠みて晝寝ねたり。夢に一婦人を見る、曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客たり、君、高唐に遊ぶと聞く、願はくは枕席を薦めんと。王因つて幸す。去る時に辭して曰く、妾は巫山の陽、高丘の岨^{そま}に在り、且には朝雲と爲り、暮には行雨と爲る、朝朝暮暮陽臺の下にあり、と。且朝之を見れば言の如し、故に廟を立てて號して朝雲といふ」と。

一五 姬氏、姜族^一孔穎達の毛詩疏に曰く、黃帝の姓は姬、炎帝の姓は姜、二姓の後子孫昌盛にして其の家の女美なる者最も多し、遂に姬姜を以て婦人の美稱と爲す、と。

一五 東鰈^一「東方に比目魚あり、比ばざれば行かず、其の名を鰈といふ。」〔爾雅〕

一五 南鷓^一「南方に比翼の鳥あり、比ばざれば飛ばず、其の名を鷓といふ。」〔爾雅〕

一五 二轄^一を投ず^一陳遵嘗て大いに賓客を會す。宴飲して客の去らんことを恐れ、乃ち車の轄^{くま}を脱

して井戸に投ず。急なりと雖も客去ることを得ず。〔漢書〕

一五 葛公が白飯^一葛仙公、客と對食す。客曰く、食畢らば當に一奇戲を作さんことを請ふべし、と。食未だ畢らざるに仙公曰く、「諸君、邑邑たる無きことを得て、見んと欲するや」と。即ち口中の飯を吐くに盡く飛蜂と成りて居に滿ち或は客身に集る。震肅せざることなし。但だ自ら人を齧さざるのみ。やゝ久しうして仙公口を張りて蜂に見^{しめ}すに皆飛還つて口中に入り飯と成り、之を食ふ。〔葛仙公別傳〕

一五 左慈云云^一神仙傳に曰く、左慈字は元放、廬江の人なり。少くして五經に明かなり。兼ねて星氣に通ず。漢祚の將に盡きんとするを見て乃ち道術を學ぶ。六甲に明かにして能く鬼神を役し、坐ながらにして行厨を致す。曹操聞いて之を召して道を學ばんと欲す。左慈曰く、道を學ぶには當に清淨無爲なるべし、と。操怒つて之を殺さんと謀り、左慈を收めんとす。慈走つて群羊の中に入り、慈の所在を失す。追ふ者化して羊と爲ることを疑ひ、乃ち人をして羊を數へしむるに一口を餘す、果して化して羊と爲れることを知れり。乃ち謂つて曰く、「若し是れ左公ならば但だ出でよ、苦しきこと無し」と。一羊あり跪いていふ、「何ぞ許^{かく}の如くなる」と。追ふ者之を執へんと欲す。是に於て群羊皆跪いて曰く、「何ぞ許^{かく}の如くなる」と。追ふ者乃ち去る。

三教指歸 卷中

一 登徒_レ登徒子。卷上に見ゆ。

二 董威_レ神仙傳に曰く、董威輩は何許の人と云ふことを知らず、晉武の末に洛陽の白社の中に在つて寢息す。襪縷の衣は形を蔽はず、恆に一石子を呑み、目を経て食はず、或は市に乞ひて傭作す。人或は往いて之を観るに與に言はず。時に或は詩を著はず。終る所を知る莫し。

三 寸歩の蛇_レ上の龍に對す、魑魍は上の虎に對す。

四 膏肓_レ膏肓の病。左氏傳に曰く、晉侯病める時、醫を秦に求む。秦伯は醫緩を使はして療せしむ。未だ至らざるに公夢むらく、「疾二豎となりて曰く、彼は良醫なり、懼らくは我れを傷らん、焉んか逃れんと。一豎の曰く、膏の上膏の下に居らば我れを如何んせんやと。」醫至つて曰く、「疾治すべからず、膏の上、膏の下に在り。之を攻むるも可かず、之に針するも及ばず、藥も至らじ、治すべからず」と。公の曰く、「良醫なり」と。厚く禮を爲して之を歸す。

五 漢帝_レ漢の武帝長生の術を好み、道を求む。西王母、使を遣はして帝の爲に報じて曰く、「七月七日我れ當に暫く來るべし」と。帝日に至つて宮掖の内を掃いて香を燔き雲錦の幃を張り、盛服して階下に立つ。食頃にして王母至れり。或は龍虎に駕し或は白鹿に乗れる天女數子を從へり。侍女玉盤を以て仙桃七顆を盛りて以て王母に呈す、王母四を以て帝に與へ自ら餘の

三を食ふ。又侍女に命じて絃歌を奏せしむ。絃歌已に了つて帝乃ち地に下り頭を叩いて曰く、「願はくは長生の術を賜へ」と。王母の曰く、「上元夫人と相見ざること四千餘年なり」と。既にして至れり。侍女凡そ千餘人、年十八九なるべし。夫人の年二十餘なるべし。夫人王母と同乗して去る。帝乃ち天下に仙あることを信ず。〔漢武内傳〕

註 七

六 長房_レ費長房。汝南の人なり。嘗て市の椽となる。市中に老翁ありて藥を賣れり。一壺を肆頭に懸けて市罷むに及んで輒ち跳つて壺中に入る。市人之を見るものなし。唯だ長房、樓上より之を靚て異しむ、遂に壺公に従つて一符を受くることを得て、能く衆病を治し鬼神を鞭笞す。後に其の符を失ひ、衆鬼の爲に殺さると云ふ。〔後漢書〕

七 邴原_レ魏志に曰く、邴原字は根矩、北海の人なり。少うして管寧と俱に操を以て尙び稱せらる。州府の召命あるも皆就かず。遊學して孫崧の許に至る。崧辭して曰く、「君は郷里の鄭君を知れりや。鄭君は學古今を覽、博聞強識にして學者の規模なり。君は乃ち之を舍てて、厖を千里に躡むは所謂る鄭君を以て東家の丘と爲すものなり」と。原曰く、「先生の言は苦藥良誠なり。然れども人各々志あり。規とする所同じからず。君は僕が鄭を以て東家の丘と爲すと謂ふも、君は僕を以て西家の愚夫と爲すか」と。崧辭謝す。

八 彭祖_レ彭祖は殷の大夫なり。姓は篋、名は鏗、帝顓頊の玄孫、陸終氏の中子なり。夏を経て殷末に至りて八百餘歳、後に昇仙して去る。〔列仙傳〕

九 坎に臨んで盟を請ふ_レ曲禮の疏に曰く、盟の法たる先づ地を鑿りて方坎を爲り、牲を坎上に

殺し、牲の左耳を割いて盛るに珠盤を以てし、血を以て盟と爲し、書成つて乃ち血をすゝつて書を讀む。

一〇 八仙ハクセン 淮南王劉安は漢の高帝の孫なり。天下の道書及び方術の士あらば、千里を遠しとせずして辭を卑うし幣を重うして之を致す。是に於て八公あつて門に詣れり。皆鬚眉皓白なり。劉安乃ち日夕に朝拜して道を習ふ。後八公、安と與に白日に天に昇る。〔神仙傳〕

二 三嶼サンイク 渤海中にある三の神山、即ち蓬萊、方丈、瀛州を指す。諸仙人及び不死の藥皆あり。金銀を宮闕と爲す。故に銀臺と云ふ。〔史記封禪書〕

三 五岳ゴウエツ 渤海の東に大壑あり、其の中に五山あり、即ち岱輿、員嶠、方壺、瀛州、蓬萊なり。其の上に臺觀あり、皆金玉なり。〔列子〕

三三 大鈞、洪鑪コウロ 並びに天地を云ふ。

三四 松喬コウキョウ 赤松子と王子喬。* 赤松子は神農の時の雨師なり。水玉を服して以て神農に教ふ。* 王子喬は周の靈王の太子晉なり。道士浮丘公接つなひて嵩高山に登る。共に長壽を得たる仙人なり。〔列仙傳〕

歸 指 教 三

一五 項顏コウゲン 項橐と顏回。* 史記に曰く、項橐生れて七歳にして孔子の師と爲る。* 論語に孔子曰く、顏回といふ者あり、學を好みき。不幸短命にして死す。

一六 秦の始皇コウシ 史記に曰く、秦の始皇の二十八年、齊人徐市、上書して海に入つて仙藥を求めんと請ふ。是に於て徐市を遣はして男女數千人を發して海に入つて不死の神藥を求めしむ。

一七 漢の武帝コウツ 王母、上元夫人に語つて曰く、劉徹コウツ (漢武帝) 道を好む。適々來つて之を見るに然も形漫けいまんはしくして神穢しんたいれたり。肉多くして精少し。恐らくは仙才に非ず、と。〔漢武内傳〕

一八 尾閭ビョウ 司馬彪曰く、尾閭は水の海より外に出づるものなり、一に沃焦と名づく。百川の下に在るを以て尾と稱す。閭は聚なり水の聚る所の義なり。扶桑の東に一石あり、方圍四萬里、海水注ぐもの焦盡せずといふことなし、故に沃焦といふ、と。蓋し古人百川海に朝して海水の溢れざる所以を想像して尾閭ありとす。今は壽命を損ずることの多きに譬ふ。

一九 欒太コウ 欒太は前漢の孝武帝の臣なり、大言して曰く、「臣の師はいふ、黄金成しつ可し、河の決くるも塞ぎつべし、不死の藥得つべし、仙人致す可しと。」是に於て上乃ち太を拜して五利將軍と爲す。其の後、東の方海に入つて其の師を求めんといふ。上其の言に従ふ。而も敢て海に入らず、秦山に之ゆいて祠る。上、人をして微かに隨ひ驗せしむるに實に見る所なし。五利妄つて曰く、其の師を見る、と。上乃ち五利を誅す。〔史記〕

註

三〇 兩帝リョウテイ 秦始皇、漢武帝。

三一 白朮コウ 云云 白朮、黃精、松脂、穀實は皆除病延年の仙藥なり。

三二 蓬の矢、葦の戟コウ 共に山中の惡鬼邪神等を除く仙具なり。

三三 神符コウ 抱朴子に曰く、符に十八あり、若し神符を帶すれば惡鬼等の害を被らず、と。又曰く、呪に曰く「臨兵闘者皆陳列在前」と。此の九字常に密に呪すべし、避けざる所なし、と。

三四 天門コウ を扣く 天門は鼻孔なり、扣くは開くことなり。鼻孔を開いて鼻息を調和するなり。醴

泉は唾液を云ふ。

三 玉石 地中より掘出して仙薬とす。抱朴子に曰く、玉を服する者は壽、玉の如し、と。
草芝、尖芝、伏苓、威僖 何れも仙薬の名。

三 死籍 死期を記入する帳簿。既に長壽を得るが故に其の簿を削去るなり。

三 生葉 生存の日。葉は世なり。

三 蒼蒼 天を云ふ。

三 倒景 地上の高き四千里の處。天に近く、下に日を見る處なりと云ふ。

三 八極 八方の極なり。

三 九空 八方と中央となり。

三 赤鳥の城 赤鳥は太陽、日天子の所居なれば城と云ふ。

三 紫微の殿 天帝の室、太一（天帝の別名）の精なり。列子に出づ。

三 織女 織女星。

三 姮娥 姮娥は羿の妻なり。羿、不死の薬を西王母に請ふ。未だ服するに及ばざるに姮娥盗み

食して仙を得て月中に奔り月精となる。是を蟾蜍と云ふ。〔高誘、淮南子註〕

三 帝軒 列仙傳に曰く、黄帝名は軒轅、首山の銅を採つて鼎を荆山の下に鑄る。鼎成つて龍あり、胡髯を垂れて下つて帝を迎ふ。乃ち天に登る、云云。

三 王喬 王喬は河東の人なり。顯宗の世に葉の令と爲る。喬神術あり、屢々顯宗を驚かすと云

ふ。古の仙人なり。

三 莊鵬の牀 莊子に言ふ所の大鵬の居處。*北冥に魚あり、其の名を鯤と爲す。鯤の大いさ其の幾千里といふことを知らず。化して鳥となる、其の名を鵬と爲す。鵬の背其の幾千里といふことを知らず云云。〔莊子〕

三 淮犬の迹 淮南王劉安の八仙と昇天せし時、仙薬の餘を中庭に置き去りたるを以て鷄犬之を舐めて皆昇天したりと云ふ。〔神仙傳〕

三 列馬の廐を窮む 星辰の境に至り盡すを云ふ。東壁の北の十星を東廐と云ふ。主馬の官なり。〔晉書天文志〕

三 牽牛の泊 牽牛星の住所を云ふ。

三 東父、西母 仙人の夫婦なり。崑崙山に銅柱あり、其の高きこと天に入る。上に大鳥あり、名づけて希有と云ふ。南に向つて左翼を張るに東王公を覆ひ、右翼は西王母を覆ふ。〔神異經〕

三 鷓鴣 和名葭切といふ小鳥。孔璋の檄に曰く、鷓鴣の鳥葭苕に集くふ、苕折れて子破る、下愚の惑なり、と。

三 方壺 東海中にある仙人の住む山、方丈なり。其の山形壺の如し、故に方壺と云ふ。別國洞冥記に曰く、元封中に方壺山の像を起し、乃ち天下の異香を焼くと。故に「極めて香し」と云ふ。

三 擊塵 醜き人の名。

三 子都 世の美巧なる人の名。

三教指歸 卷下

- 一 蓬茨の衡、繩樞の戸しりぞ共に賤陋なる住居を云ふ。
- 二 瓮うすに同じ。
- 三 蕞爾さいに小にして陋なる兒。
- 四 五綴の木鉢ごずい極めて賤卑なる鉢。鉢は應量器と云ふ。比丘の食器なり、比丘十八物の一。常には鐵鉢を用ゐる。然れども、當時本邦の僧儀多く木鉢を畜へしものならん。五綴とは律に比丘の鉢破損したる時は一綴より五綴に至る迄は用ゐる事を許す。
- 五 牛囊に比してし木鉢を入れる、袋は牛の飼を入れる、囊ふくろに似たり。
- 六 百八の櫃子ひやくはち珠數なり。櫃は櫛くしなり。
- 七 馬絆まきん馬絆は馬の尻管しりくだなり。其の形大顆の珠數に似たり。
- 八 道神の屨ぢ路傍の道祖神に供へてある様な賤しき草履。
- 九 犀角の帶さいかく犀の角にて帶鈎をつくれる高價な帶。
- 一〇 繩牀じゆじやう繩床。床に繩を張りたる椅子なり。比丘十八物の一。
- 一一 緇負しやうふ負ひ紐にて小兒を負ふが如くに背負ふ。
- 一二 軍持ぐんぢ *kuṅḍi* は梵語にして、水瓶を云ふ。飯用水を入れる、と手洗水を入れる、との二種あり。

歸指教 三

比丘十八物の一。

- 一 油を沽るの肩、薪を賣るの手あぶら油を賣る人の肩と薪を賣る人の手。何れも見苦しき狀を云ふ。
- 二 折頰せつがは鼻柱のつぶれてゐること。高匡かうきやう眼のひつこんで醜き高き眼ぶち。顛頤てんぎ尖つて醜いあご。隅目ぐもくかどばつた眼。
- 三 孔雀貝くわんこくがい俗に云ふ子安貝なり。
- 四 阿毘私度あひしだ未詳。響聲指歸の大師自註に「阿毘法師」とあり。私度は私に得度せる義か。
- 五 光明婆塞くわうみやうばさい大師の自註に「光明能優婆塞」とあり。報恩經に説く本生譚中の大光明王なるべし。此の王は大布施行を修して惡婆羅門に自ら頭を施せりと云ふ。優婆塞は譯して近事男と云ふ。五戒を持つ信士なり。
- 六 金巖きんがん大師の自註に「加禰能太氣」とあり。大和の金峰山か。或は伊豫の金山出石寺か。
- 七 坎壕かんごうたり困窮するさま。
- 八 石峯せきほう大師自註に「伊志都知能太氣」とあり。伊豫の石槌山か。
- 九 輓軻らんこたり不遇なるさま。
- 一〇 雲童の娘うんどうのむすめ大師の自註に「須美能曳乃宇奈古乎美奈」とあり。「住吉すみのぎの海子女」か、未詳。
- 一一 濬倍尼じゆんばいに大師の自註に「古倍乃阿麻」とあり。舊註に王法正論經を引いて曰く、毘舍利國に王あり、毘舍離好容王といふ。一州内の美女を求めて八萬四千人を后と爲す。其の内濬倍尼は第一后なりし、と。此の經今傳はらず。是れ美女とする義なり。又眞俗雜記に曰く、或人

註

曰く許部は面皴の倭語なりと。是れ醜女とする説なり。是れ亦た日本の故事か。未だ何れか
是なるを知らず。

二 伋が行 子思の如き生活。伋は子思の名。

三 孔の誠 孔子の誠。即ち論語「疏食を飯ひ水を飲み肱を曲げて枕とす、樂み亦其の中に在り」
の文を指す。

二 縞幌 白雲を指す。

三 太王の雄風 爽快なる風の意。* 楚の襄王蘭臺の宮に遊ぶに、宋玉侍す。風あり颯然として
至る。王は襟をひらいて之に當つて曰ふ、「快哉、此の風は庶人と共にするものか」と。宋玉
對へて曰ふ、「獨り大王の雄風のみ。庶人何ぞ之を共にする事を得んや」と。

六 燧帝の猛火 燧帝は始めて木を鑽つて火を取りし人。尙書大傳に曰く、燧人氏を燧皇と爲す、
火を以て官を紀す。

三 橡飯、茶菜 粗食を云ふ。

三 紙袍、葛襪 粗衣を云ふ。

三 何曾が滋き味 何曾は陳國の人、學を好み禮義に篤し。然れども性奢侈なり。殊に厨膳の滋
味王者よりも奢る。天子に見ゆる毎に設けられし所のものを食はず、帝命じて食を取らしめ
しに蒸餅の上、十字を作さずんば食はず、と。食、日に萬錢を費せども猶ほ曰ふ、箸を下す
に所なし、と。〔晉書〕

三 子方が温裘 子思衛に居り、緇袍に裏なく、二旬にして九たび食す。田子方之を聞いて人を

以て狐白裘を贈る。子思の受けざらん事を恐れて曰ふ、「我れ人に貸せば遂に之を忘る。我
れ人に與ふること之を棄つるが如し」と。子思曰く、「我れ聞く、妄りに與へんよりは之を溝
壑に棄つるに如かじと。我れ貧なりと雖も身を以て溝壑と爲すに忍びず、是れを以て敢て受
けざるなり」と。〔說苑〕

三 三樂の叟 列子に曰く、孔子泰山に遊びし時、榮啓期の索を帶にして琴を鼓つて歌ひ樂しめ
るを見て問ふ、「先生の樂しむ所以は何ぞや」と。對へて曰く、「吾が樂み甚だ多し。天の萬物
を生ずるに人を最も貴しとなす、而して吾れ人となるを得たり、是れ一の樂なり。男女の別
は男を以て貴しとなす、吾れ既に男となる、二の樂なり。人と生るゝも幼くして夭折する者
あり、吾れ既に年九十歳なり、是れ三の樂なり。貧は士の常なり、死は人の終なり。常に處
し終を得。當に何をか憂へんや」と。孔子曰く、「善い哉、能く自ら寛にする者なり」と。

三 四皓の老 漢の高祖の時その太子を輔けし四人の老人、義に篤かりし人々なり。* 高祖太子
を廢して戚夫人の子を立てんと欲せし時、大臣諫争して決せず。時に張良は呂后に曰ふ、「此
れ口舌を以て争ひ難し。願ふに上の致す能はざる者天下に四人あり、皆老人なり。上を以て
慢にして人を侮るとなし、山中に逃れ匿れて漢の臣とならず。然も高祖は此の四人を高しと
す。故に太子をして書を作らしめ辭を卑うして客となることを固く請はしむべし」と。呂后
言の如くす。四人至りて客となる。燕して置酒するに及んで、四人太子に従へり。年皆八十

を越え鬚眉皓白にして、衣冠甚だ偉なり。高祖怪しんで之に問ふ。四人進み對へて各々の名姓をいふ。曰く東園公、綺里季、夏黃公、用里先生と。高祖大いに驚きて曰く、「吾れ公を求むること數歲なるに、公等吾れを逃る。然るに今何すれぞ自ら我が兒に従つて遊するや」と。四人皆曰ふ、「陛下は士を侮つてよく罵る。臣等、義辱を受けじと、故に恐れ亡れ匿る。竊かに聞く、太子は人と爲り仁孝、恭敬して士を愛すと。故に臣等來れるのみ」と。高祖乃ち太子を調護せんことを請ふ。四人壽をなし畢つて趨り去る。高祖之を目送す。戚夫人を召して四人を指示して曰く、「我れ太子を易へんと欲するも彼の四人太子を輔く。動かし難し」と。〔史記〕

三季が萬鍾を悲しむ子路、孔子に見えて曰ふ、「重きを負ひ遠きを渡る時には地を擇ばずして息ふ。家貧しくして親老いたる時には祿を擇ばずして仕ふ。我れ昔、二親に事へし時は極めて粗食して親の爲に米の運搬を行へり。親歿して後に南の方楚に遊び、百乗の車を從へ萬鍾の粟を積む身分となり、樽を重ねて坐し鼎を列べて食ふ。然れども今粗食して米の運搬をし、父母に孝養せんと欲するも亦た得べからざるなり」と。〔孔子家語〕

三參が九佞に登る參は曾參、曾子なり。曾子嘗て曰ふ、「往きて還るべからざるものは親なり。至りて加ふべからざるものは年なり。是の故に孝子は養はんと欲すれども親待たず、木は直からんと欲すれども風止まず。此の故に牛を殺して墓を祭らんよりは鶏豚を以て親の存するに速ばんには如かじ。我れ嘗て齊に仕へて少祿に欣々たりしは、親に速ぶことを樂しみてな

り。親歿して後、楚に遊んで尊官に就き九佞の高堂に處し百乗の車を得て、而も北に向つて涕泣せし所以は吾が親に速ばざることを悲しんでなり」と。〔韓詩外傳〕

三七 大辟 死刑。

三六 虞舜周文 孰れも孝を以て知らる。* 虞舜は名を重華と曰ひ、父を瞽叟と云ふ。舜の母死して父更に妻を娶りて象を生む。父象を愛して舜を殺さんとす。舜、父と繼母とに事へて至孝なり。堯乃ち二女を以て舜に妻せて五典百官に試みるに皆治る。堯崩じて皇帝に登る、天下能く治まる。〔史記〕* 周文は周の文王にして、父王季に事へて至孝なり。父崩じて帝位に登り天下能く治まる。

註 三九 董永 漢の董永少くして母を失ひ父に事へて至孝なり。父の死に遭ひ身を賣りて奴となり、その錢を以て父を葬る。その歸路に忽に容姿端正なる一婦人に遭ふ。永が妻とならん事を求む、永之を諾して俱に主人の處に到る。主人曰ふ、「永が妻をして縑三百匹を織らしむれば汝夫妻を放たんと。一箇月にして織り畢る。主人其の速かなるを怪しみ、遂に之を放つ。妻は永に隨つて舊遇ひし處に到りて辭して曰ふ、「我れは天の織女なり、君が至孝なるによつて天帝君を助けて債を償はしむ」と。言訖つて空を凌いで去る。〔蒙求舊註〕

四〇 伯喈 蔡邕字は伯喈、陳留圉の人なり、性篤孝。母嘗て病に滯ること三年、邕は寒暑の節に衣服を更ふるの外、襟帶を解かず。寢寐せざることを十旬、母卒す。乃ち其の家側に廬して動靜に必ず禮を以てす。室傍に兔ありて馴れなつく、又木ありて連理を生ず。遠近之を奇とし

往きて觀る者多し。〔後漢書〕

四 占筮の年二初官を筮仕と云ふ。仕へんと欲する時吉凶を占筮する故なり。

四 孝を移して命を盡す二親に對する孝をそのまゝ移して君に忠を行ふなり。

四 伊周箕比二伊尹、周公、箕子、比干なり、何れも忠を以て知らる。*伊尹は殷の湯王に忠を

盡したる賢人、その孫太甲即位するや暴虐にして湯王の法に遵はず徳を亂る。伊尹之を桐宮

に放ち三年の間自ら政を攝す。帝太甲過を悔い自ら責めて善に反かへりしかば伊尹之を迎へて政

を授く。太甲徳を修め諸侯咸な殷に歸す。*周は周公且を云ふ。文王の子武王の弟なり、武

王崩じて成王少かりし爲、天下の叛かん事を恐れ、周公成王に代つて政を攝す。七年の後、

政を成王に還して臣となり、王を敬ひ謹しむ。〔史記〕 *箕子、比干は紂王の親戚なり。箕

子は紂が無道なるを見て佯狂して奴となり、比干は強いて諫めて殺さる。〔史記〕

四 南垓二南陔に作るべし。孝子を詠へる詩篇の名なれども、詩經に篇目のみありて缺く。東哲

其の缺略を補ふ、之を補くの詩と云ふ。文選に出づ。

四 蓼莪二詩篇の名。幽王を刺そり、人民勞苦して孝子の親を養ふことを得ざるの哀を詠ぜしもの。

四 林鳥、泉二獺二孝を盡すと傳へらるゝ動物。鳥に反哺の孝ありと云ふ。又獺は正月に魚を捕り

て祖先を祭ると云ふ。

四 楚河云云二莊子に曰く、莊周、家貧しく往いて粟を監河侯に借らんとす。侯曰く、「諾。我れ

近く領内の租を得んとす。將に子に三百金を貸さんとす、可ならんか」と。周、忿然色をな

して曰く、「昨日途に我れを呼ぶものあり。顧視するに轍中の鮒魚なり、斗升の水を求めて生
かさん事を請ふ。予曰く、諾、我れ今南の方吳楚の王に遊び江西の水を激して子を迎へんと
す、可ならんか、と。時に鮒魚忿然と色を作して曰く、吾れ今水盡きんとして處る所なし。
吾れ斗升の水を得ば足れり。君西江の水を言はんよりは曾て早く我れを枯魚の肆に索めん
は如かじ」と。

四 吳劍云云二季札初め使して北方、徐の君を過ぐるに、徐君季札の劍を好めども敢て口に出さ
ず。季札心に之を知りしも上國に使用するが爲に之を獻ぜず。使命を果し還りて再び徐に至る
に、君已に死したり。是に於てその寶劍を解いて之を徐君の家樹に繋けて去りぬ。季の從者
曰く、「徐君已に死す、尙誰にか與へん」と。季曰く、「然らず。始め吾れ心に已に之を許しき。
豈死を以て吾が心に背かんや」と。

四 皤皤二老いたる貌。

五〇 冥壤二墓。

五一 居諸二日月。

五二 二兄重ねて逝く二蓋し事實を録するものか。大師の二兄天逝せられたるならん。

五三 竿を好むの主二後註五七を見よ。

五四 角を扣く二卷上の註一三六に出づ。

五五 素飡二素は質なり。人但だ質朴のみにして民を治むるの材なく、位に居て徒に君の加賜を併

五 尸食ニ尸祿を云ふ。善惡を知る所あれども言はず、默然として語らず、苟くも祿を得んと欲するのみ。

五 濫竽の姦行ニ齊の宣王竽を好み人をして竽を吹かしむ。南郭處士請うて王の爲に竽を吹く、粟食三百人と等し。宣王死して文王位に即き一一に之を聴く、處士乃ち逃ぐ。竽は竹製の樂器なり。

五 彼の孔の縱聖ニ孔夫子は天の縱せる將聖なれども聖哲の治を行はんが爲に棲棲遑遑として席を暖むるに暇なかりしを云ふ。

五 泰伯ニ太伯、周の太王の子にして仲雍と共に季歴の兄なり。季歴賢にして、その子昌亦た聖なりしかば、父太王は季歴を立てて昌に及ぼさんと欲す。是に於て太伯等二人荊蠻に走り、身を文し髪を斷ちて用う可からざるを示し季歴の爲に王位を避く。季歴果して立ちて王季となり昌は文王となれり。〔史記〕

六 薩埵ニ最勝王經に曰く、過去世に一國王あり、大車と名づく。その大夫人に三子あり、長を摩訶波羅と云ひ、次子を摩訶提婆と云ひ、幼子を摩訶薩埵と云ふ。或る時大王山林に遊觀して、三子も亦た隨ふ。時に一虎あり、七子を産み飢渴に逼められ久しからずして將に死せんとす。その時に薩埵王子は「我が身命を捨つるは今正に是の時なり」と思ひ、その虎の處に至り、衣服を脱ぎ去り高山に上りて身を地に投ず。餓虎乃ち薩埵の血を舐め肉を噉ひ盡して

只だ餘骨を留むるのみ。王及び夫人此の事を聞き已り悲歎に堪へず、俱時に悶絶して將に死せんとす。良久しうして蘇る。遂に諸人と共に薩埵の遺骨を供養して塔中に置けり。「往時の薩埵は我が身（釋尊）是れなり」と。

六 羅卜ニ淨土孟蘭盆經に曰ふ、目連尊者の前生の名を羅卜と稱す。母の慳貪にして死して餓鬼道に墮せるを見て定光佛の教勅に従ひ母の飢苦を救ひ生天得樂せしむ。〔此の經は藏經に入らず、今傳はらず〕。

六 那舍ニ灌頂經に曰く、那舍長者の父母性慳貪にして、妄語して施すことなし、爲に地獄に墮す。那舍重病を得假死して父母の地獄にあるを知り、釋尊の教に従つて衆僧に施し遂に父母をして生天せしむ。

六 于門の高かるべくニ漢書に曰く、于定國は東海たん刻の人なり。其の父子公、縣の獄吏、郡の決曹となりて獄を決すること平なり。其の閭門壞れ、父老之を理むるに、于公の曰く、少しく門閭を高大にして駟馬高蓋車を容れしめよ。我れ獄を治めて陰徳多し、子孫必ず興る者あらん」と。定國に到りて果して丞相となり、西平公に封ぜられ、其の子永は御史大夫と爲れり。

六 嚴幕の掃ふべきニ漢書に曰く、嚴延年は東海下邳の人なり。河南の太守に遷る。野に行盜なく威傍郡に振ふ。囚人を刑殺して血を流すこと數里、河南號して屠伯といふ。延年在母、東海より來りて責めて曰く、幸に郡守に備はることを得るも仁愛の教化なく、多く人を刑殺して以て威を立てんとす。天道は神明なり。人獨り殺さるべからず。我れ意はざりき、老に當

つて壯子の刑戮せらるゝを見んとは。吾れ東に歸つて墓地を掃除せんのみ、と。遂に去る。歳餘にして果して敗す。

五 雲漢天の川。雲漢星闌けてとは夜が更けての意。

六 六府五臟六腑。

七 闔焉として已に空し。空腹の意。

八 石窟自己の住居を指す。

九 八萬の衆華嚴經に曰ふ、菩薩自ら飲食せんとする時、次の加く念言せよ、「我が身中に八萬戸の蟲あり、我れに依つて住す、我れ飢うれば彼れ亦た飢う。我が身満ち樂しまば彼れ亦た樂しむ。我が今受けし此の飲食をもて願はくは彼等をして充飽せしめん。我が自ら食するは彼れに施さんが爲なり、故に其の味を食らず」と。

十 怒然飢多る意なり。

十一 内内典即ち佛教。四食經に曰く、「一切有情は皆食に依つて住す」と。

十二 外外典。韓非子に曰く、「美食を具ふること能はずして俄人に飯を勸むれば、爲に飢者を活かす事能はず。今の學者の言たるや本作を務めずして末事を好み、虚惠を道として以て民を悦ばしめんとす。此れ勸飯の説なり」云云。

十三 末原文に未とあり、末の字の寫誤ならん。

十四 飢人上文の八萬の衆を云ふ。

七五 四生胎、卵、濕、化の四生。

七六 十八の亭十八界。眼根等の六根と色等の六境と眼識等の六識なり。即ち我身を云ふ。

七七 五陰舊譯には五陰と云ひ新譯には五蘊と云ふ。佛教に於て有情を以て色、受、想、行、識の五蘊假和合なりと云ふ。

七八 四蛇四大。地、水、火、風の四大種を云ふ。四大種よりなる身體は心識の依託する所なるを以て喩へて假郷と云ふ。

七九 蠶螟晏氏春秋に曰く、齊の景公天下に極細なるものありやと問ふに晏子對へていふ、「東海に蟲あり、蠶の睫まゆげに巢かくふ。子を産みて再び飛立つも蠶爲に驚かず。臣其の名を知らざるも、東海の漁者は名づけて蠶螟といふ」と。

八〇 寰中の辯唯だ世間のみを論じて未だ出世間の大道に及ばざるを以てなり。

八一 盤桓進み難き貌。

八二 孔璋陳琳。卷上註二四参照。

八三 魯陽が書未詳。一説に曰く、魯仲連と鄒陽との二人の書なり、と。魯連は書を以て燕の將を自殺せしめ、鄒陽は獄中より上書して梁の孝王をして之を出して上客と爲さしむ。

八四 猶豫狐疑なり。

八五 鯨を濫觴濫ぶべきほどの小流に遊ぶ小魚に擧ぐるもの鰲。

八六 鯢大魚の名、卷中註三九参照。籩籝かきね。

八七 離朱Ⅱ卷上註五四に出づ。

八八 子野Ⅱ師曠の字なり。晉の平公大鐘を鑄て工人をして聽かしむるに皆調へりといふ。師曠獨り調はずとし更に鑄ん事を請ふ。平公曰く、工人調へりといふ、と。師曠曰く、後世音を知る者あらば將に鐘の調はざることを知らん。臣竊かに君の爲に之を取づ、と。師涓に至つて果して其の鐘の調はざることを知れり。〔呂氏春秋〕

八九 秦王の僞を顯はす鏡Ⅱ西京雜記に曰く、漢の高祖初めて咸陽宮に入るに鏡あり、幅四尺高さ五尺九寸表裏に明あり。人直ちに來りて照さば影則ち倒に見ゆ。手もて胸を捫つて來らば腸、胃、五臟歴然として障りなく見ゆ。疾病ある時は胸を掩つて照さば病の所在を知り、又女子に邪心ある時は膽張り心臓動くを以て之を知る。始皇帝此の鏡もて宮女を照し、膽張り心動く者は之を殺せり、と。

九〇 葉公Ⅱ劉向新序に曰く、子張、魯の哀公に見えて七日なるに未だ禮せられず。乃ち去りて僕夫に托して言はしむ、「葉公子高は龍を好みて鉤して龍を寫し、鑿して龍を寫し、屋室の彫文以て龍を寫せり。玆に天龍之を聞いて自ら降り頭にて觸より窺ひ、尾にて其の堂を抱くに葉公之を見て驚き逃れ走りて失神せり。是れ葉公龍を好むに非ずして、龍に似て龍に非ざるものを好むなり。今哀公の士を好むことを聞きて、千里を遠しとせずして以て君に見ゆ。七日まで未だ禮せられず。君は眞の士を好むに非ず」と。

九一 觸象の醉Ⅱ涅槃經に曰く、「大王あり、大臣に命じて象を盲人に示さしむ。大臣勅の如く盲人

の衆をあつめて象を示すに、盲人各々象に觸る。大王各々に問ふ、象とは如何なるものかと。その牙に觸るゝ者は大根の如しといひ、其の耳に觸るゝ者は箕の如しといひ、其の頭に觸るゝ者は石の如しといひ、其の鼻に觸るゝ者は杵の如しといひ、其の脚に觸るゝ者は木臼の如しと云ひ、其の背に觸るゝものは牀の如しといひ、其の腹に觸るゝものは甕の如しといひ、其の尾に觸るゝ者は繩の如しといふ。善男子よ此の衆盲の如きは象體を説かず。然れども亦た是れを離れて別に説く可き象の體あるに非ずと。大王は佛に喩へ、大臣は方等涅槃經に、象は佛性に、盲人は一切无明の衆生に喩へたるものなり」と。

九二 儒童迦葉Ⅱ『佛說空寂所問經』及び『天地經』に曰く、「佛は迦葉をして老子と爲し、儒童を孔丘と爲して漸次に震且を教化せしめ其をして孝順ならしむ」と。〔此等の經、藏經に無し〕

九三 二儀の膚Ⅱ天と地、陰と陽の如く此の天地間現世の道理を説くに止まる淺略なる教。

九四 十世の理Ⅱ過去、現在、未來の三世に各々三世ありて九世となり、總世を加へて十世と云ふ。佛教は三世因果の理を説くが故に十世の理を談すと云ふ。

九五 多物Ⅱ比丘の十八物を指す。

九六 波旬Ⅱ梵語の波卑夜 (Pāpīyas) の訛、譯して惡者と云ふ、天魔の別名なり。〔義林章〕

九七 南閻浮提の陽谷Ⅱ大師の自註に「日本」とあり、日本帝國を指すなり。南閻浮提は本は印度大陸を云ふ、今は五大州を悉く南閻浮提と稱す。

九八 輪王Ⅱ轉輪聖王即ち我が天皇を尊稱せるなり。

九 玉藻歸る所の島、椽樟日を蔽すの浦大師の自註に「贊岐」とあり、讃岐の國多度郡屏風ヶ浦を指す。古記に曰く、屏風ヶ浦に大楠樹あり、枝葉扶疎として陰をなす。樹下に小堂あり、是れ大師の兒たりし時嬉戲せし所なり、と。

一〇 三八の春秋二十四年の歲月。

一一 牛頭馬頭地獄の獄卒なり。『大佛頂經』に曰く、無間地獄に入るに牛頭の獄卒、馬頭の羅刹、手に槍稍を執り、驅りて城門に入らしむ、と。

一二 良師釋尊を云ふ。

一三 八十の權を現ず釋尊降誕して一化八十ヶ年の權迹を示す。

一四 三十の化を示す三十歳にして佛陀伽耶に成道の化儀を示す。

一五 結菓の期を授く聲聞等に當來作佛の記莢を授くるを云ふ。

一六 蓼溷たでや厠。蓼蟲は辛に處て葵藿に徙ることを知らず。厠蟲は糞を樂しんで他味を知らず。

一七 醍醐最も勝れたる味、即ち佛教の法味を指す。牛乳より精製せる最上の味なり。又藥中の第一にして之を服すれば衆病悉く除くと云ふ。〔涅槃經〕

一八 補處の儲君補處とは具には一生補處と云ふ、視率天の一生を終れば次に此の土に降りて佛位に登る彌勒菩薩を指す。

一九 舊德の曼殊文殊師利 (Mañjuśrī) 菩薩なり。譯して妙吉祥と云ふ。文殊は七佛の師なる

が故に舊德と云ふ。

二〇 慈尊慈氏。彌勒 (Maitreya) 菩薩の譯名なり。迦葉經に曰く、佛、摩訶迦葉に告げたまはく、如來久しからずして當に般涅槃すべし、と。迦葉、佛に白して言さく、「彌勒菩薩は當來世に於て當に正覺を成ずべし、譬へば國王の第一の太子の當に王事を爲して世を治すべきが如く、彌勒菩薩も亦た法王の位を紹いで正法を守護せん」と。その時に佛、迦葉の言を讚して、右手もて彌勒の頂を摩して言ひ給ふ、「彌勒よ、我れ汝に付屬す、當來末世後五百歳の正法の滅せんとする時、汝當に三寶を守護して斷絶せしむること莫かれ」と。

二一 撫民を攝臣に教ふ佛入涅槃の時、文殊菩薩に告ぐるに、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の爲に廣く大法を説くべき事を以てし、正法を文殊に付屬し、乃至、迦葉阿難等至らば當に是の如き正法を付屬すべしと教ふ。〔涅槃經〕

二二 芳楸を諸州に班ち即位を衆庶に告ぐ摩訶迦葉等は小乗の法藏を結集し、文殊等は大乘の法藏を結集して之を廣く世間に流布せしめたるを云ふ。

二三 都史都史陀 (Turīṣṭha) は梵語、譯して知足天と云ふ。欲界に六天ある中の上より第三の天なり。此の天の内院は彌勒菩薩の淨土にして最後身の菩薩茲に住す。大師は都率天彌勒の淨土に往生せんことを本願とせらる。御遺告參照。

二四 妙高妙高山、即ち須彌山。太古の印度人はヒマラヤ山を以て世界の中心と想像し之を須彌山と稱せしが、後交通漸く開けてヒマラヤ山の外に須彌山を立て、以て世界の中心と説くに

至れり。

二五 劫火二佛教にては世界に成、住、壞、空の四劫ありと云ふ。壞劫に水、火、風の三災あり、火災劫の時には山河大地悉く燒盡すと云ふ。

二六 溟瀚二四大海を指す。

二七 數日に曝されて消竭す二七日喻經に曰ふ、一切の有爲法は無常變異にして磨滅に歸す。此の世界の滅ぶる時は先づ大旱蛟續きて草木悉く燒枯し、第二の日出でて細流悉く渴し、第三の日出でて大河悉く涸れ、第四の日出でて四大河及び無熱池も空渴し、第五日出でて大海乾涸し、第六日出でて大地須彌山等皆悉く烟を出し、第七日出でて熾然として復た煙氣なく、大地及び須彌山乃至梵天皆燃え滿つと云ふ。

二八 方輿二大地。

二九 漂蕩二世界の壞する水災劫の時を明す。

三〇 圓蓋二天。

三一 非想二三界の最上に位する天にして無色界の非想非非想處を云ふ。此の天の壽命は八萬歳なりと云ふ。

三二 水兔の僞借二水中の月影の假のものなること。* 月中に兔と蟾蜍と在りと云ふ。〔五經通義〕

三三 野馬の倏迹二春の時に陽氣發動して遙かに藪澤の中を望めば、奔馬の如く見ゆるを以て、陽炎を野馬と云ふ。

二四 二六の緣二十二因緣。即ち無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死なり。

二五 意猿二意識。

二六 兩四の苦二八苦。即ち生、老、病、死の四苦と愛別離苦と怨憎會苦と求不得苦と五陰盛苦となり。

二七 三毒二貪、瞋、癡なり。

二八 百八の藪二煩惱に二八あり。煩惱は繁ければ叢林にたとふ。八十八使の見惑と十使の修惑と十纏とを百八煩惱と云ふ。

二九 八風二四方四隅の風。

三〇 楚宋云々二楚の襄王、宋玉と雲夢の浦に遊ぶ。玉をして高唐の事を賦せしむ。其の夜玉寝ねたり。夢に神女に遇ふ、其の狀甚だ麗し。玉之を異として明日以て王に白す。王の曰く、其の夢如何と。玉對へて曰く、一婦人を見るに、狀甚だ奇異なり、寝ねて夢み寤めて自ら識らず、罔として樂しまず、悵爾として志を失ふ、と。〔宋玉 神女賦〕

三一 鄭交二列仙傳に曰く、鄭交甫、江漢の邊に遊びて江妃の二女に遭ふ。二女の曰く、橘は是れ柚なり。我れ之を筥に盛りて漢水に附して流ととも下らしめん、我れ其の傍に遡つて其の芝を採つて之を茹はん、と。遂に二女手づから佩（玉を飾れる大帶）を解いて交甫に與ふ。交甫悦び受けて之を懷にす、中を心に當てて趨り去る。數十歩にして佩を見れば空懷にして佩なし、二女を顧れば忽然として見えず。

一三 潘安が詩に潘岳字は安仁、滎陽中牟の人なり。總角にして辯才あり、文章に秀づ。亡妻を悼むの詩三首文選に出づ、句句歎歎すべし。

一四 伯姫が引に琴操に曰く、伯姫嫁して宋の恭夫人となる。公七年にして薨じ、伯姫節操を守ること三十餘年なり。時に宋の客、失火せり。有司は火の將に至らんとするを見て、直ちに出でん事を請ふ。伯姫之を肯んぜずして曰く、「吾れ聞く、婦人夜出づる時に、傳と保母とを見ざれば堂より下らずと。今傳は至れども保母未だ來らず」と。遂に火に陥りて焼死す。保母、自ら行くことの遅くして伯姫をして火災に遇はしめしことを傷み、琴を操つて痛傷の歌を作り自ら責む。故に伯姫が引と云ふ。

一五 神識は沸ける釜に煎られて以下地獄の種々の苦相を明す。

一六 水漿の食は以下餓鬼道の苦相を明す。

一七 師子虎狼以下は重ねて地獄の苦相を明す。

一八 鷄鳴の客云云に史記に曰く、齊の孟嘗君薛に在りて諸侯の賓客を招き、及び亡人の罪ある者皆孟嘗君に歸す。秦の昭王其の賢なるを聞きて秦に招くこと再度、遂に入りて秦の相とならんとす。或人昭王に説いていふ、孟嘗君は賢にして齊の族なり。今秦に相とならば必ず齊を先にし秦を後にせん。秦其れ危からんと。是に於て昭王孟嘗君を囚にして謀りて之を殺さんとす。孟嘗君人をして昭王の幸姫に解されんことを求めしむ。幸姫の曰く、願はくば君の狐白裘を得んと。孟嘗君に一の狐白裘あり、値千金、天下に雙なし。已に之を昭王に獻じて他

裘なし。孟嘗君患へて徧ねく之を客に問ふに能く對ふる者なし。最下座に狗盜を爲す者ありて曰く、臣能く狐白裘を得んと。乃ち夜、狗となりて秦宮の藏中に入り、先に王に獻せし所の狐白裘を取りて至る。以て秦王の幸姫に獻ず。幸姫爲に昭王に言す、昭王孟嘗君を釋す。孟嘗君出づることを得て即ち馳せ去る。封傳を更め、名姓を變じて以て關を出づ。夜半、函谷關に至れり。秦昭王孟嘗君を出せしことを後悔し求むるに已に去りぬ。即ち人をして傳を馳せて逐はしむ。孟嘗君關に至れり。關の法は鷄鳴して客を出す。孟嘗君、追者の至らんことを恐る。客の下座に居る者能く鷄鳴を眞似る者あり、之によりて鷄悉く鳴いて遂に傳を發して出づ。食頃にして秦の追者果して關に至る。已に孟嘗君が出づるに後れて乃ち還れり。

一三 石磧ぐに磬石劫なり。瓔珞經に曰ふ、方八百里の石を淨居天の衣の重き三銖なるを以て三年に一度拂ひて此の石乃ち磨滅し盡くるを一大阿僧祇劫と名づく、と。

一四 芥盡きて芥子劫なり。智度論に曰ふ、百由旬の城に芥子を満たし、百年に一粒づつを取り去つて若し芥子盡くるとも劫は猶ほ未だ盡きず、と。之を一大阿僧祇劫に喩ふ。

一五 劉石に博物志に曰く、劉玄石と云ふ者、昔山中の酒家に酒を酤ふ、酒家千日の酒を與へて其の節度を教ふることを忘る。家に歸り酔に當り、家人知らずして已に死せりと爲し、假に之を葬る。酒家千日の満つるを計へて乃ち憶ふ、玄石前に來つて酒を酤ひて酔ふ、まさに醒むるに向んとす、と。往いて之を視るに、云く、「玄石死し已に葬りてよりこのかた三年」と。是に於て棺を開けば醉始めて醒む、と。

- 一四二 高宗 股の中興の王武丁なり。父没して三年、默然として言はず。故に「喪に遭ふ」と云ふ。論語に子張曰く、「書に云ふ、高宗諒陰三年言はずと、何の謂ぞや。」子曰く、「何ぞ必ずしも高宗のみならんや、古の人皆然り」と。
- 一四三 姫孔 姫とは文武、周公なり、並びに姫姓なるが故なり。孔は孔子。
- 一四四 四果 聲聞の聖位、謂く預流果、一來果、不還果、阿羅漢果なり。
- 一四五 獨一 緣覺を云ふ。
- 一四六 一生 等覺の位、已に三大阿僧祇劫の修行を満じて殘る一生を經れば直ちに佛の位を補ふ菩薩にして、之を一生補處の菩薩と云ふ。
- 一四七 三有 三界、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一四八 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一四九 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一五〇 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一五一 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一五二 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一五三 三有 三有、即ち欲有、色有、無色有なり。
- 一四〇 玄虛 木玄虛。*傳亮が文章志に曰く、廣川の木玄虛、『海の賦』を作るに文甚だ佛麗にして前良に繼ぐに足れり、と。
- 一四一 郭象 卷上註七、參照。
- 一四二 郭象 卷上註七、參照。
- 一四三 郭象 卷上註七、參照。
- 一四四 郭象 卷上註七、參照。
- 一四五 郭象 卷上註七、參照。
- 一四六 郭象 卷上註七、參照。
- 一四七 郭象 卷上註七、參照。
- 一四八 郭象 卷上註七、參照。
- 一四九 郭象 卷上註七、參照。
- 一五〇 郭象 卷上註七、參照。
- 一五一 郭象 卷上註七、參照。
- 一五二 郭象 卷上註七、參照。
- 一五三 郭象 卷上註七、參照。

- 一五 十善 不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見の十善業道。
- 一五〇 八正 正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八聖道。
- 一五一 七覺 念覺支、擇法覺支、精進覺支、喜覺支、輕安覺支、定覺支、捨覺支の七覺支。
- 一五二 四念 身、受、心、法の四念處。
- 一五三 頂珠 許して法華經に曰く、唯だ髻中の明珠をば以て之を與へず。所以は何ん。獨り王の頂上に此の明珠あり、若し以て之を與ふれば王の諸眷屬必ず大いに驚き怪しみなん。乃至文殊師利よ、轉輪王の諸兵衆の大功ある者を見ては心甚だ歡喜して以て此の難信の珠の久しく髻中に在つて妄に人に與へざるに而も之を與ふるが如し、と。
- 一五四 授記 記莖を授くること。即ち佛が舍利弗に未來成佛を豫言せられしこと。
- 一五五 龍女 法華經に曰ふ、爾の時に龍女に一寶珠あり、價直三千大千世界なるを持して以て佛に上る。佛之を受けたまふ……當時の衆會龍女の忽然の間に變じて男子と成り、菩薩行を具して即ち南方無垢世界に往いて寶蓮華に坐し、等正覺を成ずるを見る。
- 一五六 三祇 阿僧祇は譯して無數と云ふ。三阿僧祇劫は菩薩の修行する期間なり。
- 一五七 二轉 煩惱を轉じて菩提を得、生死を轉じて涅槃を得るを云ふ。
- 一五八 四鏡 如實空鏡、因熏習鏡、法出離鏡、緣熏習鏡。
- 一五九 軒帝堯義 黃帝軒轅氏、帝堯陶唐氏、太昊伏羲氏。何れも聖天子として知らる。

一六 四弘 四弘誓願。衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、菩提無上誓願成の菩薩の四大誓願なり。

一七 非相に託して非形を示現す云云 如来は清淨にして虚空に等しく、無相無形にして十方に遍ず。今云ふ意は眞身は無相なり、釋尊の八相成道の相は眞身の相にあらずして化身の相なりと云ふなり。

一八 八相 釋尊の天下、入胎、出胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃の八相。

一九 八部 天、龍、夜叉、等の八部。

二〇 四衆 僧、尼、信士、信女を云ふ。

二一 黄、玄 地と天。天は玄く地は黄なり。

二二 一音 維摩經に曰く、佛は一音を以て法を演説し給ふに、衆生は類に随つて各々解を得、と。
二三 腹壤を撃つ 堯の時の如く世治まりて、民腹を撃ち壤を撃ちて帝の徳を忘るゝ太平の治を云ふ。

二四 來蘇 尙書にいふ、「きん后來らば其れ蘇らん」と。此れ殷の湯王夏の桀王を伐つの時、人民相慶して其の速かに來らんことを望める語なり。

二五 優曇の大阿闍梨 稀有の大師。

二六 螿蚊 禮記に曰く、仲春の月は日夜ひと分し、雷乃ち聲を發し始めて電す。螿蚊咸く動き戸を啓いて始めて出づ。

一七五 朝鳥 旭日なり。

一七六 謠諤 徒らに歌ふを謠と云ひ、徒らに鼓を撃つを諤と云ふ。今、世俗遊蕩の樂に代ふるなり。

一七七 居諸 日月。

一七八 金仙一乗の法 大乘佛教を指す。

一七九 廻風 急風なり。

一八〇 六塵 色、聲、香、味、觸、法。

一八一 四徳 常、樂、我、淨。

一八二 纓簪 冠のひもとかんざし。官吏を指す。

三教指歸 卷上 并序

文之起必有由。天朗則垂象。人感則含筆。是故鱗卦聃篇周詩楚賦。動乎中書于紙。雖云凡聖殊貫。古今異時。人之寫憤何不言志。余年志學就外氏阿二千石文學。舅伏膺鑽仰。二九遊聽槐市。拉雪螢於猶怠。怒繩錐之不勤。爰有一沙門呈余虛空藏聞持法。其經說。若人依法誦此真言一百萬遍。卽得一切教法文義諸記。於焉信大聖之誠言。望飛燄於鑽燧。躋攀阿國大瀧嶽。勤念土州室戶崎。谷不惜響明星來影。遂乃朝市榮華念念厭之。巖藪煙霞日夕飢之。看輕肥流水則電幻之歎忽起。見支離懸鶉則因果之哀不休。觸目勸我誰能係風。爰有一多親識。縛我以五常索。斷我以乖忠孝。余思物情不一。飛沈異性。是故聖者驅人教網三種。所謂釋李孔也。雖淺深有隔並皆聖說。若入一羅何乖忠孝。復有一表甥。性則很戾。鷹犬酒色晝夜爲樂。博戲遊俠以爲常事。顧其習性陶染所致也。彼此兩事每日起予。所以請龜毛以爲儒客。要兎角而作主人。邀虛亾士張入道旨。屈假名兒示出世趣。俱陳楯戟並箴蝥公。勒成三卷名曰三教指歸。唯寫憤瀨之逸氣。誰望他家之披覽。于時延曆十六年臘月之一日也。

龜毛先生論一首

有龜毛先生。天姿辯捷面容魁悟。九經三史括囊心藏。三墳八索諳憶意府。三寸纒發枯樹榮華。一言僅陳曝骸反宥。蘇秦晏平對此卷舌。張儀郭家遙瞻啟聲。偶就休暇之日投兎角公之館。爰則肆筵設席薦饌飛盞。三獻已訖促膝談話。於是兎角公之外甥有蛭牙公子者。其爲人也狼心很戾不纏教誘。虎性暴惡匪羈禮義。博戲爲業鷹犬爲事。遊俠無賴奢慢有餘。不信因果不諾罪福。醉飲飽滄嗜色沈寢。親戚有病曾無愁心。疎人相對莫敬接志。狎侮父兄侈凌耆宿。于時兎角公語龜毛先生曰。蓋聞王豹好謠已變高唐。縱之翫書亦化巴蜀。橘柚徙陽自然爲枳。曲蓬糝麻不扶自直。庶幾先生披陳祕鍵覺示頑心。扣據隱鈴教悟蠢意。先生曰。吾聞上智不教下愚不移。古聖猶痛今愚何易。兎角公曰。夫體物緣情先賢所論。乘時摛藻振古所貴。故章昭譏博之篇。元淑疾邪之賦。並載湘素經葉鑒誠。又有鈍刀切骨必由砥助。重輅輕走抑亦油緣。無智鐵木猶旣如是。有情人類何不仰止。今先生蕩滌霧意指彼迷康。鍼灸贖歸此直莊。豈不盛哉復不快乎。爰龜毛先生心索神煩忙然長息。仰圓覆以含慨。俯方載以深思。喟焉良久驟然哈曰。三勸慙叵拒來命。今當傾竭微管標愚流之行迹。盡洩拙蠹陳攝心之梗概。但懸河妙辯舌端短乏。北海湛智心府匱窶。筆謝除痼詞非殺將。欲披彼齷悻悻口裏。默而欲罷憤憤胸中。不得抑忍聊事推揚。宜示一隅孰扣三端。竊惟清濁剖判最靈權輿。並稟

二儀同具五體。於是賢智如優華蠢癡若鄧幹。是故仰善之類猶稀麟角。耽惡之流既鬱龍鱗。操行如星意趣疑面。玉石殊途遙分九等。狂哲別區遠隔卅里。各趣所好如石投水。並赴所惡似脂沃水。寔由鮑塵嗅氣猶未改變。麻畝直性亦未萌兆。遂與頭蝨以陶性。將晉齒而染心。表若虎皮之文。內同錦袋之糞。視肉之譏具招一涯。戴盆之誚永傳萬葉。豈不辱乎亦不哀哉。余思楚璞致光必須錯礪。蜀錦摛彩尤資濯江。戴淵變志登將軍位。周處改心得忠孝名。然則玉緣琢磨成照車器。人待切磋致穿犀才。從教如圓則庸夫子可登三公。逆諫似方則帝皇裔反爲匹傭。木從繩直已聞昔聽。人容諫聖豈今彼空。上達天子下及凡童。未有不學而能覺乖教以自通。夏股傾滅周漢興隆。並是前覆之龜鏡後誠之美風。可不戒哉可不慎哉。宜汝蛭牙公子借耳伶倫貸目離朱。恭聞吾誨覽汝迷衢。夫汝之爲性。上海二親無告面孝。下凌萬民莫隱恤慈。或弋獵爲宗跋涉山坳。或釣罟爲業機權溟海。終日譁浪已過州吁。達夜博奕亦踰嗣宗。話言遠離寢食盡忘。水鏡冰霜之行盡滅。谿壑貪婪之情競熾。咀嚼毛類既如師虎。喫噉鱗族亦過鯨鯢。曾無愛子之想豈有己宥之顧。嗜酒酩酊渴猩懷耻。趁逐望食飢蛭非儔。若蜩若蟪不顧草葉之誠。靡明靡晦誰致麻子之責。恒見蓬頭婢妾已過登徒子之好色。況於冶容好婦寧莫術婆伽之燒胸。春馬夏犬之迷已煽胸臆。老猿毒蛇之觀何起心意。向倡樓而喧樂恰似獼猴之戲杪。臨學堂而欠伸還若兔兔之睡蔭。懸首刺股之勤全闕心裏。提觴捕蟹之行專蘊胸中。數十熠燿不聚囊中。一百青臆常懸杖頭。若儻入寺見佛不懺罪咎還作邪心。未知一稱之因遂

爲菩提四鉢之果終登聖位。過庭蒙誨不誅已惡翻恨提撕。豈思諄諄之意切於猶子。勤勸之思重於比兒。好談人短莫顧十韻之銘。屢事多言不鑒三緘之誡。明知讎言之鑠骨金。不慎樞機之發榮辱。如此品類寔繁有徒。禹筆何書隸筭豈計。如復飽食滋味徒勞百年既同禽獸。煖衣錦繡空過四運亦如犬豚。記曰。父母有疾冠者不櫛。行起不翔。琴瑟不御。酒不至變。啖不至矧。此乃思親切骨不敢容裝。又云。隣有喪春不相。里有殯街不歌。是復與人共憂不別親疎。其於疎遠如是。於昵近如彼。故親族不豫莫迎醫嘗藥之誠則賢士哲夫側目流汗。閭巷有憂無相愁問慰之情則傍親有識寒心入地。形殊禽獸何同木石。體如人類何似鸚猩。嚮使姪牙公子。若能移翫惡之心專行孝德。則流血出瓮抽笋躍魚之感。軼孟丁之輩馳蒸蒸美。移于忠義則折檻壞疎出肝割心之操。踰比弘之類流謬謬譽。講論經典東海西河結舌辭謝。涉獵史籍南楚西蜀閉口揖讓。好書則鷓鴣翔虎臥之字。鍾張王歐擲毫懷耻。翫射則落鳥哭猿之術。羿養更蒲絕弦含歎。就於戰陣張良孫子慨三略之莫術。赴於稼穡陶朱豨頓愁九穀之無貯。莅政則跨四知而馳譽。斷獄則超三黜而飛美。清慎則孟母孝威之流。廉潔則伯夷許由之侶。若乃赴神醫道馳心工巧。換心洗胃之術越扁華以馳奇。跼蹐飛鳶之妙凌匠輪而翔異。若如是則汪汪萬頃同彼叔度。森森千仞比此庾嵩。觀者深淺不測。仰者高下不度。猶須擇鄉爲家簡士爲屋。握道爲床挈德爲褥。席仁而坐枕義而臥。被禮以寢衣信以行。日慎一日時競一時。孜孜鑽仰切切斟酌。縹囊黃卷吐握不棄。青簡素鈔顛沛不離。如是則會宴講義摧五鹿角。諸生論難重五十筵。森森

辯泉與蒼海以沸涌。彬彬筆峰共碧樹以縱榮。玲瓏玉振凌孫馬以連瑤。曄曄金響踰楊班而貫藥。奏離騷不過時。賦鸚鵡不加點。翱翔詩賦之苑。休息藻製之野。然則翹翹車乘門外接軫。戔戔玉帛圍中連塵。魏侯之輅軾於蓬門何更扣角。周王之輦敗於草廬何暇彈鋏。不僥倖以登台鼎。不自銜以齒槐棘。拾青紫於地芥矚目可致。總印綬於股錐旋踵可期。爰則移孝竭主流涕接僚。佩干將以鏘鏘。搢圭笏而濟濟。進退紫震俯仰丹墀。入議萬機譽溢四海。出撫百姓毀斷衆舌。名策簡牘榮流後裔。高爵所綏美謚所贈。豈非不朽之盛事哉何亦更加。若復遊俗之前有日行樂。返真之後莫人相娛。天上牽牛猶歎獨住。水中駕鳥必歡比宿。所以詩有七梅之歎。書貽二女之嬪。然則人非展季誰莫伉儷。世異子登何可隻枕。必須行雨之蛾眉窳彼姬氏。飄雪之蟬鬢占此姜族。羸羸訝輅隱隱溢衢。羸羸送騎霏艾側郭。從者蹠踵袂幕蔭天。徒御駕肩汗霽灑地。紫蓋飛空而雲翔。繡服拂地而風步。盡訝迎禮極賸送義。同牢同尊合香合體。褰珠簾而對鳳儀。拂金牀而比龍體。陵琴瑟以調韻。超膠漆而同契。笑偕老於東牒。悵同穴於南鵠。消一期愁快百年樂。又時聚九族數連三友。則陳八珍之嘉肴。酌九醞之旨酒。飛羽觴以無斁。舉滿白而如環。客調八音詠言歸之詩。主投二轄稱途露之滋。重日忘歸燮夜舞蹈。縱寰中之逸樂。盡世上之賞般。寧不樂哉。宜姪牙公子。早改愚執專習余誨。苟如此則事親之孝窮矣。事君之忠備矣。接友之美普也。榮後之慶滿也。立身之本揚名之要蓋如斯歟。孔子曰。耕也餒在其中。學也祿在其中。誠哉斯言當鏤書紳骨耳。粵姪牙公子跪而稱曰。唯唯敬承

命也。自今以後專心奉習。於是兎角公下席再拜曰。猗歟善哉。昔聞雀變爲蛤猶懷疑怪。今見蛭牙鳩心忽化作鷹。葛公白飯忽爲黃蜂。左慈改形倏作羊類。豈如先生之勝辯變狂爲聖乎。所謂乞漿得酒打鬼獲鹽。斯之謂歟。聞詩聞禮之客。何過今日之勝誘勝誨。非只蛭牙之爲誠。余亦充終身之口實矣。

三教指歸 卷上了

三教指歸 卷中

虛區隱士論

虛區隱士先在座側。詳愚淪智和光示狂。蓬亂之髮踰登徒妻。濫縷之袍超董威輩。傲然箕踞莞爾微笑。陳唇緩頰睚眦告曰。吁吁異哉卿之投藥。前視千金之裘猶對龍虎。今觀寸步之蛇若瞻鼯鼯。如何不療己身之膏肓。輒爾發露他人之腫脚。如卿療病不如不治。粵龜毛公愕然顧眄有覩進曰。先生若有異聞請爲啓沃之。僕不忍兎命帥爾輒談之。伏乞先生莫祕春雷。隱士曰。夫赫赫弘陽輝光燭朗。然盲瞽之流不見其曜。礧礧霹靂震響猛厲。然聾耳之族不信彼響。矧太上祕錄言邈凡耳。天尊隱術如何妄說。歟血遺盟太難得聞。鏤骨示信何曾易傳。所以者何。短綆汲水懷疑井涸。小指測潮猶謂底極。苟非其人閉談喉內。實非其器祕櫃泉底。然後見機始開擇人乃傳。於是龜毛公等並相語曰。昔漢帝冀仙悃請王母。長房得術亦學壺公。吾等邂逅曾無邗原千里之尋。長有彭祖萬祀之壽。豈不美哉亦非幸哉。三人並進再拜稽顙請隱士曰。重望垂誨。隱曰。築壇約誓且示一二耳。爰則承命如言。昇壇結誓臨坎請盟。契事已畢增仰指誨。隱曰。然矣。汝等恭聽。今當授子以不死之神術。說汝以長生之奇密。令汝得蜉蝣短齡與龜鶴相競。跛驢駑足與應龍齊駿。並三曜以終始。共八仙而相

對。朝遊三嶼之銀臺終日優遊。暮經五岳之金闕達夜逍遙。龜毛等對曰。唯唯欲聞。隱曰。夫大鈞陶甄無彼此異。洪鑪鎔鑄離憎愛執。非獨厚彼松喬薄此項顏。但善保彼性與不能持耳。養生之方久存之術。厥途極多不能具述。聊撮大綱示其少分。又昔秦始皇漢武帝。內心願仙外事同俗。鐘鼓鏗鏘已奪耳聰。錦繡粲爛忽損目明。紅臉朱唇不能暫離。鮮鱗生毛不退片食。臥屍作觀流血爲川。如是事類難以陳說。流以涓滴潔以尾闕。心行相違徒深費勞。是猶覆方底於圓蓋願其能合。極功力於寒水求其飛焰。何其愚哉。然猥俗謂。帝皇至貴猶亦不得。而況凡人乎。以此爲虛誕以此號妖狂。何其迷哉。樂太兩帝之徒。此乃道中之糟糠好仙之瓦礫。深可惡之甚。夫如是故傳必擇人。非以尊卑宜汝等專心受學無致後毀耳。能學之人蓋異此歟。手足所及多蟻不傷。身肉之物精唾不寫。身離鼻塵心絕貪慾。目止遠視耳無久聽。口息齷語舌斷滋味。克孝克信且仁且慈。蹶千金以如蠶芥。臨萬乘而如脫躡。視纖腰如鬼魅。見爵祿如腐鼠。怕呼無爲澹然減事。然後始學不異指掌。但俗人尤所翫好。則道侶甚所禁忌耳。若能離此得仙非難。五穀者腐腑之毒。五辛者損目之鳩。醴醪者斷腸之劍。豚魚者縮壽之戟。蟬鬢蛾眉伐命之斧。歌舞踊躍奪紀之鉞。大笑大喜極忿極哀。如此之類各多所損。一身之中既多如此歟。若不絕此離長生久存未有所聞。離此於俗尤難。絕此得仙尤易。必須先察其要乃可服餌耳。白朮黃精松脂穀實之類以除內病。蓬矢葦戟神符呪禁之族以防外難。呼吸候時緩急隨節。扣天門以飲醴泉。掘地府以服玉石。草芝穴芝以慰朝飢。伏苓威僖以充夕饑。則日中

淪影夜半能書。地下微瞻水上能步。鬼神爲隸龍騷爲騎。吞刀吞火起風起雲。如此神術何爲不成。何願不滿。又有白黃金乾坤至精。神丹練丹藥中靈物。服餌有方合造有術。一家得成合門凌空。一銖纔服白日昇漢。其餘吞符餌氣之術。縮地變體之奇。推而廣之不可勝計。若叶彼道若得其術。卽改形改髮延命延壽。死籍數削生葉久長。上則跨蒼蒼而翱翔。下則躡倒景而徜徉。鞭心馬而馳入極。油意車以戲九空。放曠赤鳥之城。優遊紫微之殿。視織女於機上要姪娥於月中。訪帝軒而爲伴。覓王喬而爲徒。察莊鵬之牀見淮犬之迹。窮列馬之廐盡牽牛之泊。任心偃臥逐思昇降。淡泊無慾寂寞無聲。與天地以長存。將日月而久樂。何其優哉如何其曠矣。東父西母何足恠乎。是蓋吾所聞學靈寶之密術歟。顧惟世俗纏縛貪慾煎迫心意。羈縻愛鬼焦灼精神。營朝夕食勞夏冬衣。願浮雲富聚如泡財。邀不分福養若電身。微樂朝臻咲天上樂。小憂夕迫如沒塗炭。娛曲未終悲引忽逼。今爲卿相明爲臣僕。始如鼠上之貓終爲鷹下之雀。恃草上露忘朝日至。憑枝端葉忘風霜至。咨可痛哉。何異鸚鵡曷足言哉。其吾師之教與汝所說之言。汝等之所樂與吾類之所好。誰其優劣孰其勝負。於是龜毛公蛭牙公子兔角公等並啓而稱曰。我等幸遇好會適承讜言。方知鮑壘至冕方壺極香。擘藥之醜子都之好。金石有隔薰蕕無比。從今以後專心練神永味斯文也。

三教指歸 卷下

假名乞兒論

有假名乞兒。不詳何人。生蓬茨衡長繩樞戶。高屏羃塵仰道勤苦。黍髮剃隕頭似銅釜。粉艷都失面疑瓦塌。容色顛頽體形蕞爾。長脚骨豎若池邊鷺。縮頸筋連似泥中龜。五綴木鉢比牛囊以常繫左肱。百八棍子方馬絆而亦係右手。著道神屨弄牛皮履。帶馱馬索擲犀角帶。茅座常提市邊乞人押頰俯羞。繩牀緹負獄傍盜士抱膝仰歎。破口軍持不異沾油之肩。落鑲錫杖還同賣薪之手。折頰高匡顛頽隅目。嗎口無鬚似孔雀貝。缺唇疎齒若狡兎唇。偶入市則瓦礫雨集。若過津則馬屎霧來。阿毘私度常爲膠漆之執友。光明婆塞時爲篤信之檀主。或登金巖而遇雪坎壘。或跨石峯以絕糧輶軻。或眇雲童娘懈心服思。或觀潛倍尼策意厭離。拂霜食蔬遙同偈行。掃雪枕肱還等孔誠。青幕張天不勞房屋。縞幌懸嶽不營幃帳。夏則緩意披襟對太王之雄風。冬則縮頸覆袂守熒帝之猛火。橡飯茶菜一句不給。紙袍葛襪二肩不蔽。一枝逍遙半粒自得。不願何曾之滋味。誰愛子方之溫裘。三樂之叟比比有愧。四皓之老對此非僂。形似可笑志已不奪。或告曰。我聞於師。天地尤靈寔人其首。惟人勝行惟孝惟忠。餘行萬差此二其要。所以不毀遺體見危授命。舉名顯先廢一不可。又一生娛樂惟富惟貴。百年蘭友

誰比妻孥。季悲萬鍾唯感逝親。參登九叙當由仕主。今子有親有君。何爲不養不仕。徒淪乞丐中空。雜逃役輩。辱行忝先人陋名遺後葉。惟寔大辟所加君子所耻。然汝行之。親戚代汝入地。疎人見汝掩目。宜早改心速就忠孝。乞兒憮然問曰。何謂忠孝乎。答曰。在閨之日怡面候顏先心竭力。出入告面夏多溫清。定省色養。謂之爲孝。虞舜周文行之登帝位。董永伯喈守之流美名。占筮之年移孝盡命犯顏諫爭。上達天文下察地理。稽古擬今柔遠能近。紀綱四海匡弼一人。榮及後裔譽流來葉。如是爲忠。伊周箕比蓋其人歟。假名答曰。安親匡主。如是之類爲忠爲孝。伏承命旨。是實雖余不肖然猶頗異禽獸。一念不離五內爛裂。夫父母覆育提挈殷勤。顧其功也高並五岳。思其恩也深過四瀆。鏤骨銘肌誰敢遺忘。欲報罔極欲反尤厚。詠南垓而懷耻譔蓼我以含愁。見彼林鳥終日焦灼。思此泉瀨達夜爛肝。常歎楚河未決周紂就肆。吳劍未許徐子臨墓。老親皤皤臨近冥壤。此余頑頑反哺無由。居諸如矢迫彼短壽。家產澆漓墻屋向傾。二兄重逝數行沈瀾。九族俱置一心潺湲。起慷慨之思以日繼月。興悽愴之痛從且達夕。嗟呼悲哉。進而欲仕已無好竽之主。退而欲默亦有待祿之親。歎進退之惟谷纏起居之狼狽。則作頌寫懷曰。

肆力就畝	曾無筋力	扣角將仕	既無審識	無智在官	致譏空職	有貧素飡	遺誠尸食
濫竽姦行	已尤非直	雅頌美風	但聞周國	彼孔縱聖	栖遑不默	此余太頑	當從何則
欲進無才	將退有逼	進退兩間	何夥歎息				

於是頌詞取畢沈吟良久。乃作書曰。僕聞小孝用力大孝不置。是故泰伯剃髮永入夷俗。薩埵脫衣長爲虎食。父母致倒地之痛。親戚有呼天之歎。因此而視。毀二親之遺體。致九族之念傷。誰復過此二子哉。當如卿告並犯不孝。雖然泰伯得至德之號。薩埵稱大覺之尊。然則苟合其道何拘近局。羅卜之拔母苦。那舍之濟父憂。寧非大孝哉亦非善友哉。余雖愚陋。斟酌雅訓鑽仰遺風。每爲國家先廻冥福。二親一切悉讓陰功。摠此惠福爲忠爲孝。然卿但識筋力之應盡身體之可屈。未視于門之應高嚴墓之應掃。何其劣哉。然此書未委心。後當顯陳之矣。固執如是不拘父兄不近親戚。萍遊諸州蓬轉異境。爰雲漢星闌六府之藏闕焉已空。石窟儲盡八萬之衆怒然忽窮。甌內塵飄竈中苔充。於是思量。內顯依食住外言爲學末。不如緇緇飢人早託豐鄉。卽發松林赴聚落京。乘知足意捧鉢直征。從童都無子持佛經。到兎角舍倚立門楹。於是逢於龜毛與隱士論諍之戰庭。各思扶如電之體宿四生之囿。舉似夢之意入十八之亭。築幻城於五陰之空國。興泡軍於四蛇之假鄉。甲蛛發網鐵螻螟騎。鼓蝨皮而驚陳。旗蚊羽以標旅。杖我見戟持寡聞劍。攘如霜臂戰魍魎原。競利欲談爭寰中辯。粵傾耳漸聆擊目佇立。各謂我是並言彼非。于時自思。溜水微辯燭火小光猶旣如是。況吾法王之子。盍摧虎豹之鉞拉蠍娘之斧。遂乃砥智慧刀湧辯才泉。被忍辱介駕慈悲驥。非疾非徐入龜毛之陳。不驚不憚對隱士之旅。於焉出壘盤桓入壁跋扈。因茲先以孔璋檄示以魯陽書。將帥悚懼軍士失氣。面縛降服無勞血刃。但野心難改情懷猶豫。卽流淚摩首含悲喩曰。夫舉鱗濫觴會無由見千里之鯁。翫翫

籬籬何能知有九萬之鵬。是故海上頑人疑如魚木。山頭愚士怪如木魚。則知非離朱明無人見毫末。非子野聰何能別鐘響。咨呼。見與不見愚與不愚何其遙隔哉。吾聞汝等論。譬如鏤水畫水有勞無益。何其劣哉。龜毛之鼻脚未可爲短。隱士之鶴足不足爲長。汝等未聞覺王之教法帝之道乎。吾當爲汝等略述綱目。宜鑒秦王顯僞之鏡。早改葉公懼真之迷。俱醒觸象之醉。並學師吼之道。儒童迦葉並是吾朋。愍汝冥昧吾師先遣。然依機劣淺示一儀之膚。未談十世之理。而各執殊途爭舉旗鼓。豈不迷哉。隱士答曰。吾熟視公已異世人。視頭無一毛。視體持多物。公是何州何縣誰子誰資。假名大笑曰。三界無家六趣不定。或天堂爲國或地獄爲家。或爲汝妻孥或爲汝父母。有波旬爲師有外道爲友。餓鬼禽獸皆是吾汝父母妻孥。自始至今曾無端首。從今至始安有定數。如環擾擾於四生。似輪轟轟於六道。汝髮如雪未必爲兄。吾鬢如雲而亦非弟。是汝與吾從無始來。更生代死轉變無常。何有決定州縣親等。然頃日間利那幻住於南閻浮提陽谷。輪王所化之下。玉藻所歸之島。椽樟蔽日之浦。未就所思忽經三八春秋也。隱士大驚曰。何謂地獄天堂乎。何爲煩持衆物乎。假名曰。作業不善。牛頭馬頭自然涌出報以辛苦。用心苟善金闍銀闍倏忽翔聚授以甘露。改心已難耳。何有決定天獄乎。余前如汝迷疑。但頃日間適遇良師之教。旣醒前生之醉。夫我師釋尊本願尤深現八十權。慈悲難極示三十化。于時有緣之衆不簡龍神沐甘露雨。榮枯萎枝授結菓期。無福之徒不論貴賤不知辛晷。常沈蓼溷已忘醍醐。所以慈悲聖帝示終之日。丁寧顧命於補處儲君舊德曼殊等。授印璽於慈尊教撫民

於攝臣。是以大臣文殊迦葉等。班芳檄於諸州告即位於衆庶。是故余忽承檄旨。秣馬脂車裝束取道。不論陰陽向都史京。經途多艱入煙曠絕。康衢甚繁徑路未詳。一二從者或沈溺泥中拔出未期。或騁馬奔車先已發進。因茲不棄微物子身負擔。糧絕路迷辱進門側乞行路資。爰則述懷策心。賦無常之賦題受報之詞。振鈴鈴之金錫。馳喑喑之玉聲。唱龜毛等曰。

熟尋峨峨妙高峴吻干漢燒劫火以灰滅。浩浩溟溟滄澗滔天曝數日而消竭。盤礴方輿漂蕩摧裂。穹隆圓蓋灼燠碎折。然則寂寥非想已短電激。放曠神仙忽同雷擊。況乎吾等稟體非金剛招形等瓦礫。五蘊虛妄均水兔之僞借。四大難逗過野馬之倏迹。二六之緣誘策意猿。兩四之苦常惱心源。益氲三毒之燭晝夜恒燔。鬱菴百八之敷夏多尤繁。飄埃脆體機散之朝與春華以繽紛。翔風假命緣離之夕共秋葉而紛紜。千金瑤質先尺波而沈黃扉。萬乘寶姿伴寸烟而厲玄微。婕娟蛾眉逐霞以飛雲閣。的皪貝齒添露而咸零落。傾城華眼忽爾爲綠苔浮澤。垂珠麗耳倏然作松風之通壑。施朱紅臉卒爲青蠅之踢蹴。染丹赤唇化爲烏鳥之哺穴。百媚巧笑殆曝骨中更難可值。千嬌妙態腐爛體裏誰亦敢進。峨峨漆髮縱橫而爲藪上之沆芥。纖纖素手沈淪而作草中之腐敗。馥馥蘭氣隨八風以飛去。涓涓鼻液從九竅而沸舉。綢繆妻孥無異楚宋之夢遇神女。磊砢寶藏宛同鄭交之空承仙語。颼颼松風颼颼吹襟。聆忻之耳更在何所。玲瓏桂月可憐映面。視娛之心亦之何處。乃知颯羅羅穀何應愛喜。森萃薛蘿此常飾耳。緒堂聖室曾無久止。松塚檀墳是長宿里。琴瑟孔懷閔墓之下無由相見之矣。婉孌蘭友荒壠之側復無

談笑之理。孤伏落落之松蔭空滅樹邊。獨伴警警之禽轉徒淪草前。蠢蠢萬蟲宛轉相連。斷斷千狗咀嚼繼聯。妻子塞鼻以厭退。親疎覆面以逃旋。嗟呼痛哉。食百味而婀娜鳳體徒爲犬鳥之屎尿。裝千彩而嬋媛龍形空作燎火之所燃。誰可遊春苑而消愁緒。戲秋池以舒宴筵。嗚呼哀哉。詠潘安詩彌增哀哭。歌伯姬引還深裂酷。無常暴風不論神仙。奪精猛鬼不嫌貴賤。不能以財贖不得以勢留。延壽神丹千兩雖服。返魂奇香百斛盡燃。何留片時誰脫三泉。尸骸爛草中以無全。神識煎沸釜而無專。或投嶄巖之刀獄流血潺湲。或穿嶮嶮之鋒山貫胸愁焉。乍轢萬石之熱輪。乍沒千仞之寒川。有鑊湯入腹常事急煎。有鐵火流喉暫無脫緣。水漿之食億劫何聞稱。咳唾之滄萬歲不得擅。師子虎狼颯颯歡跳。馬頭羅刹眈眈相要。號叫之響朝朝翹霄。赦寬之意暮暮已消。囑託閻王愍意咸銷。招呼妻子既亦無繇。欲以珍贖會無一瓊瑤。欲逃遁免城高不能超。嗟呼苦哉嗚呼痛哉。誰覓鷄鳴之客早消閉關之勞。何求狗盜之子克拯極刑之刃。謀窮途極千悔千切。石磷芥盡已增叫咷。嗚呼痛哉嗚呼痛哉。吾若不勉生日蓋羅一苦一辛。萬歎萬痛更凭誰人。勉之勉之。

於是龜毛等百斛酢梅入鼻爲酸。數斗茶蘼入喉爛肝。不假吞火腹已如燒。不待刀穿胸亦似割。哽咽悽愴涕泣漣漣。擗踊倒地屠裂愆天。如喪慈親似失愛偶。一則懷懼失魂。一則含哀悶絕。假名則探瓶呪水普灑面上。食頃蘇息似醒不言。如劉石之出塚。似高宗之遭喪。良久二目流淚五體投地。稽顙再拜曰。我等久甦瓦礫常耽微樂。譬如習辛蓼葉忘臭屎。覆盲目以進險道。驚蹇驚而向冥途。

不知所投不知所陷。今偶賴高論之慈誨。乃知吾道之淺膚。噬臍以悔昨非。碎腦以行明是。仰願慈悲大和上。重加指南察示北極。假名曰。愈矣。咨咨善哉。汝等不遠而還。吾今重述生死之苦源。示涅槃之樂果。其旨也則姬孔之所未談。老莊之所未演。其果也則四果獨一所未能及。唯一生十地漸所優遊耳。諦聽能持。舉要撮綱略示汝等。龜毛等並避席稱曰。唯唯。靜心傾耳恭專仰說。粵則開心藏鍵振舌泉流。正述生死海之賦兼示大菩提之果曰。

夫生死之爲海也。纏三有際彌望罔極。帶四天表渺瀰無測。吹噓萬類括總巨億。虛大腹以容衆流。開鴻口而吸諸洫。襄陵之汰淘淘不息。凌崎之浪濤濤相逼。礧礧震響日日已衆。鱗鱗雷震夜夜既充。衆物累積群品夥衆。何怪不育何詭不豐。其鱗類則有慳貪隳志極癡大欲。長頭無端遠尾莫極。舉鱗擊尾張口求食。吸波則離欲之船撞摧帆匿。吐霧則慈悲之舸楫折人殛。且泳且涵志意不式。或鑿或鑿心性非直。如壑如溪後害不測。若鼠若蠶匪隱匪惻。共忘千劫之蹉跎。並望一涯之貴福。其羽族則有諂誑譏諛誹謗惡嗜嗜嗜嗜惡作。整翮背道高翥赴樂。碎骨四倒之浦。沸卉十惡之澤。彫啄正直之菱。喙喋廉潔之霍。見鳳見鸞仰豫嚇嚇。擊鼠擊犬俯則咋咋。且飛且鳴營現前之潤屋。或痛或死忘未來之苦酷。豈知鴈門之坂織羅張列。昆明之池黏徽普設。更羸之箭前來碎首。養由之弧後放流血。若其雜類則有憍慢忿怒罵詈嫉妬自讚毀他遊蕩放逸無慚無愧不信不恤邪姪邪見憎愛寵辱殺害之黨鬪鬪之族。同形異心別類殊目。鋸爪鑿齒少慈淪殺。眈眈虎視遊朝露之麓。睚眦師吼戲

夜夢之谷。遇者奪氣拔精塗腦碎腸。見者身慄心悚睽睽伏。如是衆類上絡有頂天下籠無間獄。觸處櫛比每浦連屋。玄虛之神筆千聚難陳。郭象之靈翰萬集何論。因茲五戒之小舟漂猛浪以曳曳掣掣於羅利津。十善之椎輪引強邪而隱隱軫軫於魔鬼隣。是故自非發勝心於因夕。仰最報於果晨。誰能拔森森之海底。昇蕩蕩之法身。誠須六度之筏解纜漂河。八正之舸艤棹愛波。樹精進幢舉靜慮颿。拒群賊以忍鎧。威衆敵以智劍。策七覺馬亟超沈淪。駕四念輪高越置塵。則許頂珠以封疆同彼鷲子授記之春。奉頸瓔以盡境比此龍女得果之秋。十地長路須與經輝。三祇遙劫究圓非難。然後捨十重荷證尊位於眞如。登二轉臺稱帝號於常居。一如合理心莫親疎。四鏡含智遙離毀譽。超生滅而不改。越增減而不衰。踰萬劫兮圓寂。互三際兮無爲。豈不皇矣哉亦不唐矣哉。軒帝堯羲不足採履。輪王釋梵不堪扶輪。天魔外道騁百非而非所毀。聲聞辟支飛萬是而非所是。雖然四弘未極一子沈溝。願此悵悵思此丁寧。爰更百億應化班百億城。假託非相示現非形。會成之道始於八相。金山之體坐於四康。神光神使驛於八荒。慈悲慈檄頒於十方。然後待於萬類萬品乘雲雲行。千種千彙騎風風投。自天自地如雨如泉。從淨從染若雲若煙。下地上天上天下地。八部四衆區各交連。讚唱關關鼓騁淵淵。鐘振礧礧華飄聯聯。燐燐爛爛震震填填。溢目溢耳滿黃滿玄。履踵履跟側肱側肩。盡禮盡敬心謹心專。爾迺轉一音之鸞輪。摧群心之螻械。拔拈大千投擲他界。不削大山入於小芥。雨甘露雨以誘以誠。班法喜食韞智韞戒。悉詠康哉兮擊腹壤。咸頌來蘇兮忘帝功。無量國之所歸湊。有情界之所仰

叢。惟尊惟長以都以宗。咨咨不蕩蕩哉大覺之雄。巍巍焉哉誰敢比窮。此寔吾師之遺旨。如如之少深。彼神仙之小術俗塵之微風。何足言乎亦何足隆哉。

於是龜毛公等一懼一辱且哀且笑。任舌俯仰逐音方圓。歡喜踊躍稱曰。吾等幸遇優曇之大阿闍梨。厚沐出世之最訓。誰昔未聞後葉豈有。吾若不幸不遇和上。永沈現欲定沒三途。今僅蒙提撕身心安。譬如震霆發響蟄蛟開封。朝烏轉輪幽闇渙冰。彼周孔老莊之教何其偏膚哉。自今以後剝皮爲紙折骨造毫。刺血代鉛曝爛用研。敬銘大和上之慈誨。以充生生之航輅。假名曰。復座。今當敝三教以十韻之詩代汝等之謠諤。廼作詩曰。

居諸破冥夜 三教褰癡心 性欲有多種 醫王異藥鍼 綱常因孔述 受習入槐林
變轉聃公授 依傳道觀臨 金仙一乘法 義益最幽深 自他兼利濟 誰忘獸與禽
春華枝下落 秋露葉前沈 逝水不能住 迴風幾吐音 六塵能溺海 四德所歸岑
已知三界縛 何不去纓轡

三教指歸 卷下 了

(永井製本)

昭和十年二月二十日印
昭和十年二月二十五日發行

三教指歸 *
定價二十錢

岩波文庫 1112

10.2.23

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇一八七・〇一八八
九段 一〇二二番小賣部專用
振替口座東京二六二四〇番

譯註者

加藤精神

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚味ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	三條西榮花物語 卷上 三條西公正校訂	更級日記 西下經一校訂
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	三條西榮花物語 卷中 三條西公正校訂	枕草子(春曙抄) 卷上 池田龜鑑校訂
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	三條西榮花物語 卷下 三條西公正校訂	枕草子(春曙抄) 卷中 池田龜鑑校訂
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	伊勢物語 皇代弘賢校訂	枕草子(春曙抄) 卷下 池田龜鑑校訂
古事記 幸田成友校訂	竹取物語 並附錄 島津久基校訂	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
新日本書紀 上卷 黒板勝美編	保元物語 語岸谷誠一校訂	梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂
新日本書紀 中卷 黒板勝美編	平治物語 語岸谷誠一校訂	古今和歌集 尾上八郎校訂
新日本書紀 下卷 黒板勝美編	平家物語 上卷 山田孝雄校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
記紀歌謠集 武田祐吉校註	平家物語 下卷 山田孝雄校訂	新金槐和歌集 增補 齋藤茂吉校訂
古語拾遺 加藤玄智校訂	十六夜日記 玉井幸助校訂	中世歌論集 久松潜一編
水鏡 和田英松校訂	源氏物語(一) 島津久基校訂	藤原定家集(附定家年譜) 佐佐木信綱校訂
大鏡 和田英松校訂	源氏物語(二) 島津久基校訂	法華義疏 上卷 聖徳太子御製
増鏡 和田英松校訂	源氏物語(三) 島津久基校訂	法華義疏 下卷 聖徳太子御製
神皇正統記 山田孝雄校訂	源氏物語(四) 島津久基校訂	上人愚迷發心集 高瀬承嚴校註
	源氏物語(五) 島津久基校訂	正法眼藏隨聞記 懷和社哲郎校訂
	土佐日記 池田龜鑑校訂	日蓮上人文抄 姊崎正治校註
	紫式部日記 池田龜鑑校訂	

生まざりしならば 正宗白鳥著 *	長塚節歌集 齋藤茂吉選 *	北村透谷集 島崎藤村編 *
大石良雄 野上彌生子著 *	上田敏詩抄 茅野蕭々編 *	海舟座 談談本哲治編 *
海神 丸 野上彌生子著 *	晚翠詩抄 土井晚翠著 *	外國文學(小説・戯曲・詩)
出家とその弟子 倉田百三著 *	藤村詩抄 島崎藤村自選 *	註譯 杜 詩卷之一 漆山又四郎譯註 *
布施太子の入山 倉田百三著 *	有明詩抄 蒲原明著 *	註譯 杜 詩卷之二 漆山又四郎譯註 *
幸福者 武者小路實篤著 *	泣菫詩抄 薄田泣菫著 *	註譯 杜 詩卷之三 漆山又四郎譯註 *
その妹 武者小路實篤著 *	白秋詩抄 北原白秋著 *	註譯 杜 詩卷之四 漆山又四郎譯註 *
人間萬歳 武者小路實篤著 *	白秋抒情詩抄 北原白秋著 *	註譯 陶淵明集 漆山又四郎譯註 *
友情 武者小路實篤著 *	文道遺稿 金築松桂譯 *	註譯 唐詩選上卷 漆山又四郎譯註 *
煤煙 森田草平著 *	歌舞音樂略史 小中村清矩著 *	註譯 李太白詩選上卷 漆山又四郎譯註 *
波 山本有三著 *	俗樂旋律考 上原六四郎著 *	註譯 李太白詩選下卷 漆山又四郎譯註 *
病牀六尺 正岡子規著 *	蘭學事始 杉田玄白著 *	註譯 寒山詩 太田梯藏譯註 *
墨汁一滴 正岡子規著 *	茶の 本村岡博譯 *	支那通俗古今奇觀 淡澤主人譯 *
仰臥漫錄 正岡子規著 *	綱島梁川集 安倍能成編 *	朝鮮童謡選 金雲雲譯編 *
子規歌集 正岡子規著 *	清澤文集 清澤蕭之著 *	朝鮮民謡選 金雲雲譯編 *
左千夫歌集 土屋文明選 *	福澤撰集 福澤諭吉著 *	
左千夫歌論抄 土屋文明編 *	寒 齋 錄 陸奥宗光著 *	

即興詩人 上卷 森 崎 外譯 *	昔氣質の地主たち 伊吹山次郎譯 *	貧しき人々 フストエフスキー作 *
即興詩人 下卷 森 崎 外譯 *	檢 察 官 米川正夫譯 *	永遠の良人 フストエフスキー作 *
繪なき繪本 アンデルセン著 *	現代のヒーロー 中村白葉譯 *	戦争と平和 第一卷 米川正夫譯 *
ブランドン ドイブセン著 *	皇帝フョードル ア・カトルストイ作 *	戦争と平和 第二卷 米川正夫譯 *
キイランド短篇集 前田 眞 譯 *	初戀 ひ 米川正夫譯 *	戦争と平和 第三卷 米川正夫譯 *
村のロメオとユリア ケラ 眞 譯 *	トウルゲ 散文詩 西 清譯 *	戦争と平和 第四卷 米川正夫譯 *
アルプスの山の娘 ヨハンナ・スビリ作 *	ブニンとバプリン トウルゲ・エニエフ作 *	戦争と平和 第五卷 米川正夫譯 *
幽霊 曲 小宮豊隆譯 *	罪と罰 第一卷 中村白葉譯 *	戦争と平和 第六卷 米川正夫譯 *
稲妻 小宮豊隆譯 *	罪と罰 第二卷 中村白葉譯 *	戦争と平和 第七卷 米川正夫譯 *
父 小宮豊隆譯 *	罪と罰 第三卷 中村白葉譯 *	イヴン・イリツチの死 米川正夫譯 *
令嬢 ユリ エストリントベルク作 *	カラマーゾフの 第一卷 米川正夫譯 *	結婚の幸福 米川正夫譯 *
大海のほとり エストリントベルク作 *	カラマーゾフの 第二卷 米川正夫譯 *	光あるうちに 米川正夫譯 *
鳥の農民 ストリントベルク作 *	カラマーゾフの 第三卷 米川正夫譯 *	クロイツェル・ソナタ 米川正夫譯 *
オネーギン プーシキン作 *	兄弟 第四卷 米川正夫譯 *	復活 上卷 中村白葉譯 *
スベードの女王 (他一篇) 西 清譯 *	兄弟 第三卷 米川正夫譯 *	復活 中卷 中村白葉譯 *
イワシとイワシノキツネ 西 清譯 *	兄弟 第二卷 米川正夫譯 *	復活 下卷 中村白葉譯 *
とイワシとイワシノキツネ 西 清譯 *	兄弟 第一卷 米川正夫譯 *	闇の力 トルストイ作 *
キツネとイワシノキツネ 西 清譯 *	悪霊 第二編(上) 米川正夫譯 *	生ける屍 トルストイ作 *
外 套 他二篇 伊吹山次郎譯 *	悪霊 第二編(下) 米川正夫譯 *	
	悪霊 第三編 米川正夫譯 *	

法律・社會・政治・經濟

- アリストテレスの國家 國 園譯
法の精神 上卷 宮澤俊義譯
法の精神 下卷 宮澤俊義譯
慣習と權利 青山道夫譯
權利のための闘争 日沖憲郎譯
民約 論 平林初之輔譯
暴力論 上卷 木下平治譯
暴力論 下卷 木下平治譯
國富論 上卷 氣賀勘重譯
勞働者綱領 小泉信三譯註
哲學の貧困 木下平治譯
資本論初版鈔 長谷部文雄譯
資本論大人問題を論ず 久留明造譯
自然辯證法上卷 加古祐二譯
自然辯證法下卷 加古祐二譯

住宅問題

- 住宅問題 加田哲二譯
家族・私有財産及國家の起源 西雅雄譯
フオイエルバツハ論 佐野文夫譯
反デューリング論 長谷部文雄譯
反デューリング論 長谷部文雄譯
反デューリング論 長谷部文雄譯
マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄譯
マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯
資本論解説 大里傳平譯

帝國主義

- 帝國主義 長谷部文雄譯
唯物論と經驗批 上卷 佐野文夫譯
唯物論と經驗批 中卷 佐野文夫譯
唯物論と經驗批 下卷 佐野文夫譯
レニンを爲すべきか 平田良衛譯
カール・マルクス (他五篇) 伊藤弘譯
戦争論 上卷 馬込健之助譯
戦争論 下卷 馬込健之助譯
ケネー經濟表 増井幸雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯
ケネー經濟表 戸田正雄譯

- 婦人論 上卷 草間平作譯
婦人論 下卷 草間平作譯
婚姻の諸形式 木下史郎譯
近代民主政治 卷一 山武譯
近代民主政治 卷二 山武譯
近代民主政治 卷三 山武譯
近代民主政治 卷四 山武譯
近代民主政治 卷五 山武譯
近代民主政治 卷六 山武譯
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著
ユートピア (理想郷) トマス・モア著

御註文に就て

此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、価値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。
購求の自由 しかも購者が全く自由に欲しい本を随時求められる自由選擇の方法を採りました。
印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
體裁は菊半截判、紙装、平福百穂畫伯装幀。
活字は八ポイントを用ひました。
約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。
★一つを二に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
定價(及送料)は左表の通りです。
送料二錢
四十錢
六十錢
八十錢
一圓
御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なので必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

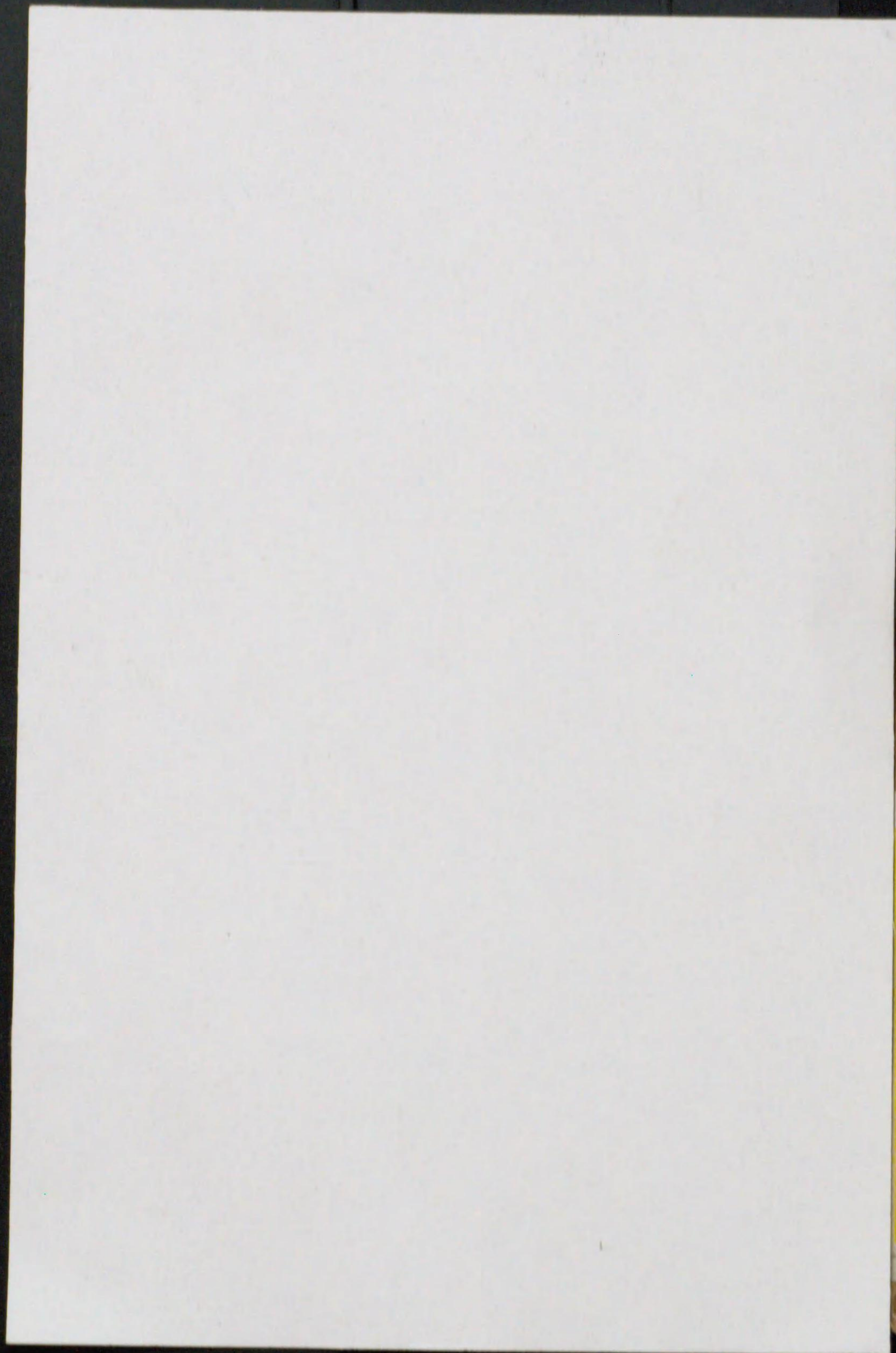
569
14

新刊書目

フアール昆蟲記(第五分冊) 林 謙夫 譯 ★★
 山田 吉彦 譯 ★★
 手島堵庵心學集 白石正邦編 ★
 慣習と權利 ヴィノグラドフ著 ★
 青山道夫譯 ★
 パルムの僧院上卷 スタングアル作 ★★
 前川堅市譯 ★★
 レーニンのゴオリキーへの手紙 中野重治譯 ★
 松浦宮物語 蜂須賀笛子校訂 ★
 日本道徳論 西村茂樹著 ★
 吉田熊次校訂 ★
 都鄙問答 石田梅巖著 ★
 足立栗園校訂 ★

鳩翁道話 石川謙校訂 ★★

ロイヤル・ブルグ資本蓄積再論 長谷部文雄譯 ★★
 センブルグ
 祝詞・壽詞 千田 憲編 ★
 神々の復活(一) メレジュコーフスキイ作 ★★
 米川正夫譯 ★★
 新一茶俳句集 萩原井泉水編 ★
 神々の復活(二) メレジュコーフスキイ作 ★★
 米川正夫譯 ★★
 エレホン サミユエル・バトラー作 ★★
 山本政喜譯 ★★
 アミエルの日記(一) 河野與一譯 ★★
 大弘法三教指歸 加藤精神譯註 ★



波岩